

潮流をこえた総結集を克ちとり プロレタリアートの党を創造しよう

—— 10・30シンポジウムの記録 ——

日本革命・労働運動・党	樋口篤三
現代におけるマルクス主義の再生	いいだもも
労働者にとって党とは何か	横山好夫
現代の党的主体と共産主義者の連合	白川真澄
今なぜ共産主義者の統一協議会なのか	生田あい

革命派の総結集へ！シンポ企画委員会

目 次

発行にあたって	2
司会の挨拶	3
企画委員会を代表して	4
パネラーの紹介	5
●日本革命・労働運動・党	樋口 篤 三…6
●現代におけるマルクス主義の再生	いいだ も も…13
●労働者にとって党とは何か	横山 好 夫…26
●現代の党的主体と共産主義者の連合	白川 真 澄…30
●今なぜ共産主義の統一協議会なのか	生田 あ い…38
再開直後の混乱	48
共労党自身はまだ分派闘争としても党としても止揚したといえない	いいだ も も 51
われわれの革命は単なる未来社会論や思想運動ではない	生田 あ い 53
政治教育、組織者、工作者、宣伝、煽動は党的主体の本質的機能です	白川 真 澄 56
階級闘争の主戦場は、やはり労働運動	横山 好 夫 59
革命は、階級主体と前衛主体ぬきにはありえない	樋口 篤 三 62
人間と自然との関係が変わらないと	いいだ も も 67
自己犠牲の問題と自己変革	白川 真 澄 71
革命の主体は労働者階級自身だと思えます	生田 あ い 73
資 料 1	76
資 料 2	77
資 料 3	79
資 料 4	81

発行にあたって

革命派の総結集へ！
シンポ企画委員会

この小冊子は、一九八二年十月三十日に福岡市で開催されました「連合し、合流し敵を撃つ」10・30シンポジウム」の記録です。「シンポジウムを主催しました」10・30シンポジウム企画委員会」は、共産主義労働者党の関係者（プロ革の友人達は計画の途中で企画委員会から離れました）や、職場・地域で活躍しているノンセクト共産主義者、あるいは季刊「クライシス」の読者会運動を担っている活動家等々によって組織されていましたが、10・30以後に「企画委員会」を継続発展させることが確認されました。「革命派の総結集へ」シンポ企画委員会」と名称をかえました。したがってこの小冊子の編集及び発行責任は、名称がえをした「企画委員会」ということとなります。「企画委員会」は、10・30シンポに続く第二回企画として山川暁夫氏を招聘していますし、第三回企画を準備中です。第二回企画の山川暁夫氏講演についても、なんらかの形で報告されるようにしたいと考えていますが、とりあえず、非常に遅れてしまいました第一回企画のシンポジウム記録をお届けします。

パネラーが多いことや、パネラーの全てが九州に居住していない方々ばかりでありますので、発行にあたっての諸雑務は大変なものでしたが、発行が遅れました最大の理由は、私ども「企画委員会」の事務能力の問題です。全国の多くの友人達に催促をされていましたが、ようやく報告できます。

司会の挨拶

西山 今日。私、企画委員会の西山といひます。今日の集会の司会役をつとめさせていただきます。よろしくお願ひします。本日のシンポジウムにつきましては、パネルディスカッションの形式でやっていきたいと思ひます。討論なり問題提起の幅が非常に多岐にわたると思ひますが、短い時間内にできるだけ凝縮して議論し、皆様方と共に「合流し、連合して敵を撃つ」われわれの生き方、あり方について共に討論し、共同の流れをつくりたいと考えています。本集会の進行の予定についてですが、私共としては、まずパネラーの方々に20分から25分にわたって問題提起をしていただければ、時間も丁度5時位になりますので、一時間休憩して、その後、パネルディスカッションを継続していきたいと思ひます。いろいろ御質問なり御意見があるかと思ひますが、多岐多面にわたる問題について議論することになりますので、交通整理の意味で、司会の権限で、質問なりその他会場からの発言については集約したいと思ひます。休憩時間の間に御質問がありましたら、私の方にもってきていただきたい。できれば箇条書き・メモでもかまいませんから、出していただければ、それについて全体を整理した上で、各々のパネラーの方々にこたえていただく、ということで行いたいと思ひます。よろしく御協力を御願ひします。（会場拍手）

それでは、今集会を主催した企画委員会を代表して、藤吉徹から

パネラーの発言部分を各パネラーに送付し、加筆・修正をしていただきました。シンポジウムに積極的に参加していただいた上に加筆修正の御手数までかけてしまいました。誌上ではありますが改ためて御礼申し上げます。御協力有難度う御座居ました。

10・30シンポジウム以降「『建党協議会』準備会議結成への」よびかけ」が「共産主義者の建党協議会準備会議結成に向けた予備会議」によって明らかにされると共に、「心からの敬意をもってこれを歓迎し、支持し、この『よびかけ』を実現すべく更に奮闘する」と発表したブンド「赫旗」。続いて支持表明を発表した労働者党の「革命の炎」等、潮流をこえた共産主義者の総結集を積極的に推進してきた党派及び個人のさまざまな努力が公然と圧倒的な運動として展開されようとしています。私ども「企画委員会」が『よびかけ』にこたえることは当然です。10・30シンポの目的が具体化していることを心から歓迎します。今こそ10・30シンポの歴史的位置と意味がより一層鮮明になったと確信し、新たな決意をこめて総結集の一翼をになう覚悟です。

第二回企画としての「打倒中曽根ノ米日韓軍事同盟を撃つ」は、準備時間がほとんどなかったにもかかわらず多くの活動家が結集しました。山川暁夫講師によって読みあげられた「『建党協議会』準備会議結成への『よびかけ』」と、若干の説明は、会場参加者に多大な感銘をあたえたとともに、新しい「建党」運動への参加意を表明する活動家もでてきました。企画委員会の友人達は『よびかけ』を主体化すべく真剣に討論を積みあげています。『よびかけ』に連動し、地方でなにをなすべきか、なにができるかノと。

（文責 藤吉）

企画委員会を
代表して

挨拶をいたしたいと思ひます。（会場、拍手）

藤吉 企画委員会の代表をしています藤吉と申します。連日の闘いに明けくれている友人の皆さんが、かくも結集していただきたいと思ひます。『革命』『党』『総結集』という、ある意味では、ややこしい話題ですが、闘いの最先頭にある友人の皆さんは非常に興味がある課題だろうと思ひます。

「マルキシズムは音をたてて崩壊していく」という人がいます。革命に対する傍観者なら別ですが、常識的な活動家は、マルクス主義の再生のために多くの努力、実践を積みあげているのではなからうかと思ひます。

こうした状況の中で、九州の田舎にいる私達は、いったい何ができるのか、という問いが、本集会を企画した当初の問題意識でありました。私達共産主義者、私達活動家が共同の実践とテーブルをつくりあげ、激しく論争しながら流れをもっと大胆に変えていく。そのためには、違った潮流の方々があるいは違った考え方をしている人達が、各々の立場を尊重しながら、具体的に援助しあい、協力していくことから始まり、小さなセクトの利害や個人的な利害をこえて結集していくことが、大切なことではなからうかと思ひます。

歌舞伎の世界で、白波五人男というのがあります。弁天小僧菊之助や日本駄工門、南郷力丸等がそれです。芝居の世界のことではあ

りますが、世の中をなめから見ていたようです。本日のパネラーである五人衆は、すくなくとも、世の中をなめから見るのではなく真正面からとらえ、世直しの実践と理論に取組んでいると言えるのではないのでしょうか。

勿論、前にいます五人は、さまざまな色あいというか、カラーをもっていらっしやるわけで、当然の事ではありますが、全ての問題で一致するというわけにはいかないだろうと思います。

ただこの五人衆は、色あいは違いますが、其々の角度から共産主義者の総結集を課題にしています。生田さんの方からは、一月に、「統一協議会」を呼びかけました。樋口さんの方では「革命運動協議会」として三月に、それから白川さんの方からも「討論のよびかけ」が発表されています。明らかに、今までは異なった道すじを其々がさぐりだす、其々が何らかの形で連合や合流を模索しだしているというふうに見えるのではないのでしょうか。

こうした動きは、日本の長い革命運動の歴史の中でも、何回も繰り返したことはないと思います。特に潮流をこえて団結をしようとしているのですから、注目すべきだと思います。企画委員会の問題意識は、変な言いかたですが、過去の共産主義者の結集のあり方がインテリ主導型で、密室政治型で、東京中心型であったと思うのですが、今回のこうした一連の動きは、かならず成功させたいという思いを含めて、過去の轍を踏まないようにしたいと考えているわけです。潮流をこえて大結集をはかろうという今回の動きも、東京中心のインテリ主導型密室政治にならないという保証はないわけですが、それを、何らかの形で、実際に闘いの先頭にいる現場に、マルキシズムの再生の問題であるとか、「党」「革命」あるいは世直

しの論理の新しい構築のあり方の問題であるとか、そういう問題を、闘争の現場に、自分達の問題意識のところに手繰りよせていくというのが、企画委員会としての最大の眼目であろうと考えます。

パネラーの五人を、そろえるというか、一同に会すること自身が、非常に困難なことだと思うんですが、九州でのこの企画のようなものを、全国で組織することを願ってやみません。

ところで、ここで、会場の皆さんにお断わりしておかなければならないことがあります。企画委員会が当初だしました皆様への御案内状には、白川真澄氏の名前がありません。企画委員会としての最初の予定メンバーに入らなかったのですが、企画委員会内部の熱心な進言がありまして、また白川氏からの要請もあり、企画委員会としては、基本的に参加をしよう立場から、すでにパネラーの形がきまっていた、つまり四氏にお断わりをし御了解をいただいた上で、白川氏の参加を最終的に決定をしました。私の個人的なことになるんですが、最も長く付き合っている友人の事ではありませんし、つまりケンカ友達でもあるわけですが、非常に申しわけありませんが、こういう結果になりました。是非、暖かく迎えていただきたいと思えます。最初の案内状には名前がのっていませんが、あとのピラヤステッカーには白川氏の名前があります。これは、私共の手ちがいではなく、一連の流れの中のことです。企画委員会としては、様々な問題意識が錯綜しながら本日をむかえたというのが実態ではなからうかと思えます。シンポジウムを組織する過程の中において、さまざまな不備な点、あるいはパネラーの方々に対する失礼なこともあったと思いますが、いやな顔一つせずに御協力いただきまして、まず最初に御礼申し上げて、簡単ではありますが

が、企画委員会を代表してのあいさつにかえたいと思います。(拍手)

パネラーの紹介

西山 さっそくですが、シンポジウムにはいたいと思います。は

じめの方々も多かろうと思しますので、私の方から簡単にパネラーの方々を御紹介いたします。最初は、樋口篤三さんです。労働者党議長で、機関紙「革命の炎」をだしておられます。労働者党議長というよりも、九州では「労働情報」の編集人として御活躍なさっているということでは有名ですので、御承知だと思います。(拍手) 勿論、本日は労働者党としての参加です。

いいたもさんです。季刊「クライシス」という雑誌の編集長をなさっています。マルクス主義の現代的再生ということで、近年とみに御活躍なさっています(拍手)

次は横山好夫さんです。ゼネラル石油製精労働組合の副委員長をなさっておられます。季刊「労働運動」という労働者の雑誌がありますが、その編集長をなさっておりまして、影のウワサでは、今や労働者のスターだというように(会場笑い声) ささやかれています(拍手)。

続きましては白川真澄さんです。共産主義労働者党全国協議会の代表をなさっています。機関紙は「統一」です。その編集長をなさっています。受付にもございますが「共産主義者の連合にむけて」ということで提案をなさっています。

つづきまして、共産主義者同盟(赫旗)議長の生田あいさんで

す。機関紙は「赫旗」です。(拍手) 九州には、なじみがないかとは思いますが、御発言の内容をおききしていただければ、どのような考え方をしているのかは、すぐ解ると思えます。御紹介のために受付の方にパンフ類が置いてありますので、ごらんになっていただければ主張なりについては、よく理解できるのではないかと思います。

では、早速はじめたいと思います。

まず最初に樋口篤三さんの方から「日本革命・労働運動・党」というテーマで問題提起をしていただきたいと思います。

あとは前に並んでいる席の順番に発言していただければと思いますのでよろしく御協力下さい。

それでは樋口さん御願います。

日本革命・労働運動・党

樋口篤三

こんにちは。私は、敗戦直後の戦後革命期といわれた一九四七年に共産党に入った時以来、革命というのは労働者階級自身の事業であり、労働運動が中心であるという思想と路線を信じて、日本共産党で闘い、担った階級闘争と党内闘争の中から、もう日共はだめだと思つた一九六五年の二回目の除名、そして共産党と、私なりに一貫してひとすじの道である革命の道の党活動と労働運動をやつてきて三十六年。ひとくちに戦後期といつても内容が大きく違う。敗戦から数年間の戦後革命期の革命運動と労働運動。それから「五十五年体制」といわれた相対的安定期の革命運動と労働運動等と、今日とは明らかに違う。最初から結論になるが、今はまさに乾坤一擲の革命的な正念場に来た。そういう時代にさしかかつたというのが、今日の具体的状況から自分なりの経験、動きつつある階級と、そしておそろく、数年の間に大きな階級の爆発と高揚があるだろう。時代の転換というものは、その一瞬までわからない。今は、一九二九年の大恐慌に匹敵する歴史的な大危機時代にさしかかつた。有

名な一九二九年大恐慌は、恐慌が爆発するその前日までアメリカは空前の好景気であつたが、ある日突然ウォール街に大暴落がおこつたことからはじまつた。だから、恐慌とは何かしら予定調和的にやってくるものではない。資本主義の経済的危機の進行過程で、それが体制そのものを危機に陥しいるような局面に達したとき、いきよに爆発するのであつて、気がついてからはもうおそい。現在日本がそういう状況にあることは数年来私達が言いつづけ、今年（一九八二年）の大阪集会でもあらためて提起して、特に大恐慌と大失業の時代のもつ意味については注意を喚起した。というのは、特に戦後高度成長期に育つた若い人々には余り失業問題といつても、政治的にも個人的にもあまりピンとこないというのが実情だろうからだ。私自身は何回か失業したが、失業のもつ階級的意義は、ただ単に生活が困窮するということだけではない。必ずそこには支配階級による戦争・侵略政策の強化とファシズムへの傾斜、革命的な情勢ということが不可欠なものとしてあつた。一九二九年大恐慌から

二年後には、日本はその巨大な階級矛盾の矛先を満州侵略戦争にむけ、ドイツでは四年後にはナチス党の反革命が勝利した。五十年前と現在とは、時代状況がことなるから、現われ方は当然ちがう。こういう一九八二年といふいまの歴史的情勢をズバツととらえているのは、日本のブルジョワジーを代表する一人である松下幸之助だ。彼は先月（九日）、読売新聞のインタビューでこういつている。

「（松下）一 来年になったら、救いがたい状況になると私は考えている。」

（記者）一 ほう、そんなにひどいのですか。

（松下）一 六十五年間事業をやつてきて、初めての経験ですな。

百年目二百年目によつてくる波、その底に來ようとして

（記者）一 パニックといえますか。

（松下）一 大恐慌ですな。」

こういうことは、政治家は言えない。政府の当事者が、今そういうことを言つたら、それを銀行の取っけさわざをたゞちにひきおこしかねない。いま、経済危機、体制危機をしめす指標は、全部二十九年の大恐慌と比較されて出されている。失業も株の暴落も、基幹産業の過剰生産・恐慌・国家財政の破たん状況もみな基本的にそうである。このようなことが次々と起こつていく記録的な事態を正確にとらえないと、我々は決定的に立ち遅れる。今、官公労働者にさらには間接部門を入れれば、一千万以上の労働者人民に「人勸」凍結攻撃がかけられている。九月のはじめに自治労の全国の左派の活動家の結集体である「運動と資料」誌の会議で、「今年、人勸が凍結するかもしれないぞ」と主張したのは、ひとりだけだつた。あと

はみんな、まさかと笑つたり、「オーバーだ。そんなアジアリ方はよくない」「それが左翼の欠陥だ」という具合だつた。ところが、事態はまもなくその通りになつた。

「人勸凍結」といわれる公務員労働者への賃金カット、切り下げ攻撃は、近代日本では史上三度目だ。一度目は今言つた一九二九年の大恐慌、浜口内閣の時。二度目は一九四九年、朝鮮戦争の前年、百万人首切りと国鉄郵政、自治体への「定員法」攻撃。二九年の時は二年後に満州侵略戦争、四十九年の翌年は朝鮮戦争というように時代の激変期と結びついていた。人勸凍結は労働者、人民の生活を直撃するけど、それだけにとゞまらない。前二回はともに戦争と結びついていた。だからこそ、今の時代状況をまさに歴史認識、時代認識においてしっかりとつかまないと、階級闘争は決定的に立ち遅れると思う。そういう時代に来た。もう少し詳しくいうと、次々と大変な事態がおきていく。例えばイタリアの場合には、日本でいえば富士銀行クラスのナンバーワンの都市銀行が倒産して、頭取がロンドンのテムズ河の橋で首をつつて、また副頭取は自分の銀行の建物からとび降り自殺した。こんなことはかつてきいたことがない。日本とならぶ例外国といわれている西ドイツでは、テレフンケン社（日本でいえば東芝、日立なみの大電機企業で十二万の労働者がいる）という大企業も倒産した。

このシンポが行われている福岡県は、日本の鉄鋼生産の発祥地であるが、鉄鋼産業は「鉄は国家なり」といわれ、かつ「産業の米」といわれ、その国の国民経済のバロメーターは鉄鋼生産に象徴されてきた。アメリカはかつて、その王者であつた。アメリカの鉄鋼生産の巨大さは、一九四五年、第二次大戦終結の時にアメリカ一〇〇

に対して日本は一、一九五五年には一〇対一という具合で圧倒的だった。だがいまでは、アメリカは日本を大中に下まわって生産八千万トンを作り、工場操業率については四割をきった。四割の操業率というのはもう倒産状態である。そこまで追い込まれている。アメリカ帝国主義をおそう、全般的危機はこうして象徴的に示されている。その大きな結果が、失業者の増大という労働者階級への矛盾の転嫁である。「飢え」「飢餓」は、ついでこの間までは、インド・カンボジア・ビアフラなど、貧しい第三世界の代名詞だった。だが、今世界一「富める」アメリカが、その世界一の大都市のニューヨークで失業者が厳冬の一月の午前五時、零下二〇度の雪の中を、教会の慈善事業であるパン一ヶを求めてならんでいる写真が、朝日新聞にのった。こゝに象徴的にあらわれている。私はその写真を見て非常に衝撃をうけたが、ここまで事態が来ている。その中で、日本だけが「例外」といわれてきた。日本の「例外論」とは、三つのことを基礎にしている。第一に、基幹産業の過剰生産恐慌がある。例えば、日本の鉄鋼の生産能力は一億五千万トンあるが、今年は一億トンをわり、工場操業率は六割だ。鉄鋼は日本帝国主義が敗戦になった一九四五年八月十五日だって、溶鉱炉は消えなかった。だが、この長びく不況の中で、今溶鉱炉は約半がとまっている。あるいは、日本政府の景気政策最大の柱の一つであった住宅産業の場合は、実に三年ぶりの下落であり、あるいはエネルギー源である石油は、その原油の輸入量は十三年前の水準におち、トラック産業は二〇年前となった。そういう基幹産業の過剰生産恐慌は何をもたらすか。世界自動車産業でNo.3の大企業である日産は、今までは搾取の体系は非常にうまくいっていた。労働者は毎月二〇時間の残業と一日位の休日

出勤分で三、四万をふくめて平均賃金十七、八万であったが、この大不況の中で残業はゼロとなる。すると月収三、四万円がただちにへってしまふ。四〇代、五〇代の働き盛りの人たちが、手取り十四、五万である。過剰生産とその矛盾のしわよせは、労働者を直撃している。民間大企業で月三、四万の減収で、官公労働者は「人勧」凍結で約三万の減収という事態になってくる中で、日本のみ「例外」はありえない。鉄鋼労連は九月の定期大会で「近いうちに雇用問題が発生するのは必至だが、希望退職まではわが組合は認める」と大量首切り必至であり、しかも資本の御用組合として認める方向をうちだしたのだ。第二番目は、日本の失業率の少なかつた大きなテコは赤字国債による公共事業と人為的な需要創出であったが、逆にその累積額は、年に九二兆円に達し、八十三年度には百兆をこす。その金利は八割ぐらゐるので、単年度のみで七、八兆円となり、あと三年後から返済しなければならぬが、しかし、できる見通しはまったくない。今日の新聞みても、桜田武までが借金をかえすためにもう一回借金しなければならぬと言っている。これは明らかに国家の大サラ金地獄に突入していることだ。国家の破産である。三番目は、金融の問題でも、国際通貨体制はすでに破産してきたが、「中進国」のモラル国家とはやされたメキシコは、国家的破産一対外債務の返済不能におちいった。アメリカやIMFが必死にテコ入れして、返済延期・再延期しているにすぎない。アルゼンチンでも「社会主義国」で世界十位の工業国ポーランドでもそうである。要するに、いつ金融恐慌がおこるか分からない。だから、二九年大恐慌の口火となった株価の大暴落につぐ今回の株価の大暴落後、すぐに三菱研究所は、「金融恐慌はこない」とわざわざ言わざるをえ

ない。金融恐慌は爆発するその日まで来たということはない。なぜならば、銀行の取り付けさわぎをおこすから。そういう基幹産業における過剰生産恐慌を基礎に、財政金融政策ともども、日本資本主義はどうにもならなく追いつめられてきた。

しかし、戦前の単なるくり返しではない。危機の現われ方が違ってきたのは恐慌になるとデフレーションで物価が下がったけど、今日是不況とインフレーションでの同時性、即ちスタグフレーションというように現われ方が違い、又柔構造といわれる搾取・収奪の巧妙な支配構造がまだ生きている。しかも、敵は「死に物狂い」である。敵は、①人勧凍結、行革などを典型とした官民の大首切り賃金ストップからきりさげの大収奪と搾取の強化、②直・間双方の大増税③そして、韓国・東南アジアへの政治・経済・文化・軍事における侵略の強化を総体的にかけているし、一層強める。今年になってにわかには、極東有事研究、海外シーレーン防衛、あるいは核武装論が強まってきた。

最近、シーレーン防衛論が声高にいわれるが、あれは全くのインチキだ。その最大の問題点、対ソ主義論をかかげつつ実際は、朝鮮有事と韓国革命、さらにアジアでもっとも革命が前進しているフィリピン革命への対応にある。即ち、日本海空軍の出動だ。日本のマスコミは、意図的にかフィリピン革命について全くふれていない。

私は、現地フィリピンに三年前にいて学びかつ驚いた。フィリピン革命は、第三世界の中国革命、ベトナム革命を引き継ぎ発展させている。都市・農村同時革命として発展してきていることに気づいた。第三世界の革命は、農村が都市を包囲して、革命の勝利の瞬間に都市が解放されたわけであるが、フィリピンの場合は、既に五

〇〇万労働者階級の一割を革命的労働運動が組織している。大都市に堂々と浮上し、進出している。そして首都マニラから一〇〇Kmの地点の山岳根拠地で、フィリピン共産党の組織する新人民軍が、一〇数年もちこたえ、政府軍がともに勝てない。キリスト教、イスラム教徒と共産主義者が反帝民族解放をめざして、固く統一戦線を組んでいる。そういう事態で革命が勝利的に前進している。

韓国もそうだ。すでに「世界」のT・K生の通信が現われているように、単なる民主化闘争から民主革命の段階にはいつている。日本の自衛隊は、韓国の民主・民衆革命が爆発した時には、米日韓政治・軍事同盟によって米軍とともに必ず出動する。日本の軍事大国化は、近づきつつあるフィリピン革命、あるいは韓国革命、その高揚に対する反革命として日本は登場している。そういう時期に入った中で、一体我々は何を提起し、どう闘うのか。これは単なる年度のな情勢の変化というものではない。まさに世界的な激突である。

嵐の階級闘争の八〇年代は、二〇世紀に入って四度目の世界革命と世界反革命の世界史的な激突の時代である。第一度目は、第一次世界大戦の終結とロシア革命の勝利、それに連動したヨーロッパ革命の高揚と敗北、第二度目は一九二九年大恐慌を契機にしたナチス・ドイツの勝利と共産党に指導された人民戦線派との激突と後者の敗北、そして第二次大戦に突入した。第三度目は、第二次世界大戦の終結と戦後革命。これは御承知のように、毛沢東と中国共産党の巧妙な戦略によって、スターリン戦略に面従腹背し、生きぬいて地方が都市を包囲、中国革命は勝利した。

しかし、西ヨーロッパとくにフランスとイタリアは、強大な党がレジスタンスを通じ、何万人の血潮と生命の中からつくりあげた強

力な武装パルチザンを自主解散して、ドゴールらと保守連立政権をつくり、革命を流産させた。スターリンによるヤルタ・ポツダム体制の結果である。今は第四回目の激突だ。

世界的大不況を背景にした今日は、危機は資本主義の中心の本国に転化し、四度目の革命の波頭と反革命をよびおこしつつある。今東京は、右翼が主要なターミナルと街頭を制圧している。戦后にかつてなかったことだ。ナチスドイツはかつて突撃隊を加担して街頭を暴力制圧し、かつ労働組合をたゞきつづがした。そして一方で、合法性の拡大として議会・選挙を重視した。合法主義と街頭における実力闘争と非合法主義との結合によってナチスが制圧するわけであるが、似た状況のはしりが明らかに東京中心にできてきている。そういう激突の始まりがすでにおこっている。事態は明らかに、まさに「生きのびすぎた資本主義」に対して、根源的な闘いをどう挑むかという歴史的局面に入った。

この間の総評臨時大会で、富塚君は「『乾坤一擲』いい時だ」といった。その点は我々と同じだし、もちろん彼が代表する労働官僚が貫徹しようとしているものは全く違うが、彼は保革連合政府の官房長官を夢みているらしい。我々は「臨時革命政府」を夢みる。まさに決定的に、そういうことを構想し、組織する。即ち、現代社会主義革命の前夜にあたって、革命を本格的に準備する時期にさしかかった。まさに、「革命・労働運動・党」その思想・路線・戦術の全ての面にわたって問題が提起されている。どこをどうという単なる技術ではない。

大衆闘争も、すでに零細商人だって静岡商工会の闘いのように、自らの生活と営業を守るために実力闘争をやる。かつて敗戦直後に

だからこそボルシェビキ(多数派)である。即ち、多数者獲得というのは、武装蜂起の最大の大前提であり、テコであった。それ以来、レーニンあるいはコミンテルンの様な運動の中でブルジョア民主主義革命や民族解放革命ではなく、社会主義革命を問題にするならば、プロレタリアートの多数者を獲得することが根本的に問われてきた。

ロシア十月革命の時は、当時一億の人口の中で労働者はわずか六〇〇万であった。が、それでもこの六〇〇万労働者階級の多数者を思想的政治的に獲得することぬきに社会主義革命の勝利はありえなかった。ちなみに、今の韓国は八〇〇万人。フィリピンだって五〇〇万人で、日本は実に人口一億一〇〇〇万のうち、四〇〇〇万人が労働者だ。

むしろ、一口に労働者といっても、昔とその階級形成や形態は現われ方が違う。根本的にいって労働・生産過程に変化が起っているから、様々に屈折し、階層が分解し、昔風の労働者とは違っている。にもかかわらず、労働者階級が巨大に形成されているとき、その多数者が帝国主義と社会主義のいずれの側に向かうのが、国の運命を決する。この革命の根本問題は、支配階級も押さえている。思い起こしてほしいが、八年前田中角栄がつかまった翌日に、日経連の桜田武が言ったのは、資本主義擁護の戦略提起だ。

第一は職場秩序の確立だ。職場、即ち資本主義の搾取の原基形態の工場秩序の中で労働者を体制内につなぎとめておくことが、ブルジョア側の多数者戦略だ。それが労戦統一の本質である。

第二番目は、軍隊・警察・検察・裁判所という国家権力の中核機構の確立である。彼はあの時は、状況が不利だから軍隊と言わな

は、米占領軍によるスト権剥奪の政令二〇号に対しても「悪法は法にあらず」として、当時の革命党たる共産党と産別会議、特に国労や全通は公然と反体制の大衆の実力闘争を組織した。労働者・人民を苦しめる悪法なんか法じゃないから当然守らなくていいという思想で武装し、山猫ストで反撃した。

今は逆に、日本共産党を先頭に合法主義をひた走っている。「人勸凍結」というのは、非常に象徴的である。政府自ら作った法律もそも憲法に違反してスト権を一方的に奪った代償として政府自ら破った。この時に労働者・人民は、何をやって許されるのだ。大衆の実力闘争の復権と発展だ。そういうことを含めて、労働運動は明らかに地の底から海なりのごとく変化しつつある。

まさに問題は、階級主体と前衛主体の問題である。ここを根本的にどうするのか。どういう階級的労働運動を組立てるのか。その時に社会主義と労働運動の結合は単なるスローガンではなくて、実践的問題となる。当然のこととして「いかなる社会主義か」という問題がある。今、階級的労働運動は正面から階級の解放—社会主義革命をめざすならば「いかなる」ということとともに、日本における労働者階級の多数者を革命派がいかに獲得するか、戦略的組織的任務と貫徹をめぐにした社会主義革命というのはありえない。

若い皆さんは、「階級の多数者の獲得」という言葉は耳慣れないかもしれない。これは、レーニンが提起した社会主義革命の戦略的根幹にかかわる命題である。つまりロシアの十月社会主義が成功したカギは、二月革命と大きく違ってベトログラードやモスクワの大都市の工場ソビエトにおいて、革命派が多数者になったことであ

っただけであって、言うならば、資本主義の原基形態である職場・工場秩序の確立を第一において、それと不可分に国家権力の装置を固めること。今の行政改革とは、まさにズバリそのことである。中曽根は、行革について「明治維新・戦後革命期のマッカーサー改革につぐ明治百年間で第三の平和的クーデター」といっている。その最大の階級的狙いは、まだ残る官公労働運動の戦闘性、職場における階級闘争を一掃して職場秩序を国家秩序に作り変えることだ。だから、国労・動労の現場協議制度が狙われている。

もうひとつ。防衛費だけ突出するということは、その要として自衛隊を専守防衛から侵略・攻撃型の帝国主義軍隊に飛躍させることである。行政改革の本質はそこだ。言葉を変えていうと、職場からの階級闘争の一掃、帝国主義軍隊の確立を中心とする行革攻撃とは、敵方の多数者獲得戦略ということだ。富塚あるいは日共も「多数派戦略」を口にしてはいるが、彼らのというのは、議会主義と民族主義による小ブルジョア的多数者獲得戦略である。

このように、支配階級も富塚も日共も内容は我々と全く違うが、今この多数者獲得を一齐にかかげていることのもつ意味、階級と階層のその政治指導部が、一齐にこの問題を提起していることの意味を重視しなくてはならない。帝国主義か、社会主義か、その両階級の死命を決するところに来ているのだ。その時私達は、今は少数派である、労働戦線といえは総評労働運動の中で、我々は外延を含めて、組織し影響力のあるのは、当面五パーセントの勢力にすぎない。

だが、俺に言わせれば、五パーセントで結構だ。その五パーセン

トが、いかなる思想・路線と組織に強固な革命勢力としてかたまるのか、こそが問題なのだ。少数者であることが帝国主義段階における革命派の必然的な宿命であるならば、その少数者が四〇〇〇万人の大軍の中にわけいて、どのように多数者を獲得するのかこそ、社会主義革命の決定的環である。

レーニンは「階級の多数者獲得」を、社会主義革命の戦略的・組織的中心任務だと言ったけれど、今、私達がそのことをぬきに革命と社会主義を語るということは、全く空語にすぎない。

今、我々は、このような「階級の多数者獲得」にむかって、その階級部隊を形成するために不可欠な「労働者綱領」（その旗印）と「労組連」（組織）を提起しているが、この任務は、前衛部隊の創出によって始めて完結する。私の長い経験からいって、党なき労働運動、党なき革命運動はありえないし、労働運動なき党もありえない。しかし、あやまった党は全てを壊すというのが、我々の自己批判的総括である。

日本における共産主義運動は、日本共産党成立以来六〇余年たったが、党が革命や労働運動に役立ったということはほとんどない。私の経験では、一時的・部分的に一例えば、渡辺政之輔の時の一九二〇年代後半、あるいは敗戦直後の一、二年において、むしろ党が弱くて官僚主義がきかないときは非常に良かった。逆説的にいえば、その時は党は生き生きと、労働者階級のなかで活発に活動した。

この歴史的教訓をふまえて、我々は新しい党を作るその一歩をふみだすときがきた。階級部隊というものは階級部隊であり、前衛部隊ぬきには決定的瞬間には耐えられない。

すなわち、四〇〇〇万の大軍を階級部隊に形成するためには、そ

こに思想・路線・組織においてきたえられた強固な前衛部隊ぬきにはありえない。まさに党の問題が全面的に登場しているのが現在だ。

私たちは世界革命の教訓、スターリン主義の党、あるいは各国の党のマイナスイ面を学ぶと同時に、特に日本の革命が何故失敗したのか、何故同じ誤ちを繰り返すのかを考え、総括しなければならぬ。

結論的にいふならば、今の世界的な状況というものは、ただ単に毎年毎年の情勢分析とは違って、まさに世界的に革命と反革命が日本における革命と反革命が激突する時に、あるいは韓国革命がおころうとしている時に、我々はどうするのか、何を対置するのか、突きつけられる決定的段階に入ったということだ。

日本の共産主義運動は、この点で一度も成功したことはない。日本共産党だけじゃない。例えば、朝鮮戦争の時に我々共産主義者は何をしたのか。戦前の満州侵略の時何をしたのか。たしかにがんばってやったが、決定的に敗北した。

朝鮮戦争と日本の革命運動というのは、日本で一番空白の部分であるが、その時の共産党の歴史をみて、改めて驚いた。四全協、五全協の政治方針・軍事闘争方針に、その瞬間、朝鮮の戦争において朝鮮プロレタリアート人民がどのように何を闘っているのか、どういう苦しみがあるのか、朝鮮の革命が何を提起しているのか、日本のプロレタリアートが何をもちて応えるのか、が全くなかった。要するに植民地、従属国の革命運動を軽視しないし無視するか、あるいは、帝国主義本国の革命に従属するものとしか考えていなかった。そういうことを歴史的に総括しなおさなければならぬ。新しい党をアジア規模で、世界規模で、我々自ら新しいインターナショナルの創出を含めて作りだす、そういう段階にさしかかったというのが、私の問題提起です。

現代における

マルクス主義の再生

いいだもも

いいだももです。はじめに枕詞のようになりますけれども、藤吉徹同志を代表とする企画委員会が、さぞかし様々なジグザグ過程があったことであろうと思えますけれども、シンポジウムの開催にこぎつけ、このようにみごとに成功させたことにたいして、まず心から敬意を表したいと思います。それから、これだけ会場全体を埋めつくすような来会者が闘いの忙しい中をみえられたことにも、心から敬意を表したいと思います。形式上ある意味での単なる虚礼みたいな言い方になりますけれども、私としては、パネラーの一人として非常に心から感謝している次第です。ゆうべ熊本県の八代というところで、私どもが編集に携わっている「クライシス」という雑誌の読者会がございまして、八代は地方の小都市でありますからお集まりになった方々は、例えば高校や小学校の先生であり、市立病院の薬剤師さんであり、あるいは、市役所の税務のお役人であり、あるいはまた、全通の配達労働者であるといったぐあい、つまり民間産業ではない、公務員労働者が多かったんでありますけれども、そ

のため当然のこととして、鈴木内閣が食い逃げをやらかした、「人勧凍結」というホットな問題が共通の話題になったんです。人勧凍結については、東村山市職の自治体労働者である水野要同志のみごとな予見を先程、樋口篤三同志が紹介されましたけれども、現在のスト権もなし賃上げもカットという、やらずぶったくりの「人勧凍結」というのは、日本の近代史上では、三度目の階級的な大攻撃の開始である。教科書問題に外交上の決着をつけて中国訪問を果たした鈴木善幸内閣は、スカンクの「最後ツ屁」のように人勧凍結をやった。サッサと自分は野たれ死にをしようとした。野たれ死にをした鈴木内閣の「最後ツ屁」だけを公務員労働者をはじめ我々全体がさがされてくる状況だと思わんです。このあとに出てくる内閣はいずれキナクさいが上にもキナクさい内閣にきまっています。55年体制の崩壊から85年体制の構築へいたる国家再編の過渡局面が、現にこういう鼻もちならない形で出てきておる。

この「人勧凍結」というのは、勿論、きたるべき資本と国家の反

動大攻撃の始まりであるわけですが、いま樋口同志が言われたように、日本資本主義の例外的「小春日和」にもかかわらず、そのカゲで日本国家が大赤字におちこんでいる、赤字国債を中心に国家財政上の赤字が累積してもう92兆円にのぼっている。首がまわらない。国家的破産です。これは、笑い話にいわれますが、「行政改革」というものを、もし徹底的にやるつもりになって、次官以下全部首切ってしまうとする。大臣と政務次官は公務員ではなくて国会議員でありますからはずすと、一番偉い役人は事務次官でありますから、事務次官というトップから、村の交番のオマワリさんから郵便局の配達人に至るまで、ありとあらゆる公務員全部を首切って、キレイさっぱりにしたらどうなんだという話がありまして、そうなる伊東光晴さん（岩波ブックレット『行革』）が言っているように当然税務署のお役人もいなくなりますから、キレイサッパリいたしまして、我々の「コンミュニオン」がそれで実現するかもしれないけれども、そうした全員首切りで浮く金というのは、2兆5千億円ではないということがはっきりしておるわけですね。赤字国債だけで8兆円ですが、その3分の1もうまらぬ。全部公務員をいなくしたところで、現代資本主義の矛盾の転移形態である今の赤字国家というものを救済することなどまったくできない。ましてや雀の涙ほどの賃上げである「人勧」を凍結することによって、この赤字が補填できないことはハッキリしておる。凍結した本人の方は誰よりもよくそのことを心得ている。敵の側がハッキリしておって、味方が騙されている。当の公務員をふくめて国民の大多数にあってこの危機攻撃の性格がハッキリしてないだけの話である。土光と中曽根の「臨調」路線の第一波としての今度の「人勧凍結」とい

う資本と国家の攻撃は何よりもすぐれて、イデオロギー攻撃であると思われなければならない。官公労働者が、きたるべき闘いにむけて立ちあがるという気力自体を根こそぎ喪失させるような第一撃であると思うんです。鈴木善幸の方は自分自身は野タレ死にをすることによって財界への忠義立ての「最後ッ屁」を捨て身でかかせて、我々全体をマヒさせる、そういう攻撃だろと思うんです。国鉄赤字攻撃にはじまる国家赤字攻撃がはやくもここまで来た。それで、ゆうべの八代の読者会で問題になったのは、なぜ、こういうやらぶつたくりの「人勧」攻撃が行われているのに、職場に怒りがふつふつと沸きたたないのか、という共通の苦しみや悩みであるわけですね。例えば、市立病院につとめている女の若い薬剤師さんは、自分のところの組合の組織率は1割であって、しかも組合というのはいわば生き残っている組合で平均年齢が52才だということですね。年々、上の方から自然の寿命で死んでいきますから、組合員は減ってゆく。その中で青年婦人部というのは、自分を含めてわずか3名であって、青婦部というのが実際は成立しないような状況になっていく。こういう戦後運動の老衰ともいえるべき状況の中で、仲間達をどう説得して、樋口同志のさきほどの提起でいえば「多数者獲得」ということを職場におけるリアルな問題としてどうするか。という悩みが出された。あるいは、高校の先生の話をききますと、その組合は、70名の内60名が組合に組織されている、市立病院とちがつて組織率は高い。しかし組合の中で、たまたま今度の半日ストライキを決定するかどうかの職場討議をやった上で、読者会にきたわけではありますけれども、その重苦しい職場討議では、半日ストライキに賛成するものは、わずか13名であったという。この

13名の壁というのを2年間我々は破れないでいるというわけですね。勿論、スト破りをしようというようなことを、半日ストライキに反対投票する組合員達がいつているわけではない。半日ストなどをしても何になるのか、というシラケ切った気分が職場には一面からいうとたれこめてしまっている、という問題がのぼったわけです。この数年間、配転問題などもふくめての職場諸権利の剥奪、職場闘争の不在が続いたため、どこの学校でも先生方がほとんど発言しなくなっている、ということを私なりに方々まわってみて感ぜざるを得ない。

国家が、戦後世界資本主義の基軸国アメリカの後退、米ソ両極体制の解体の開始に規定されながら「55年体制」の崩壊という形で崩壊してしまっただけの「総合安保国家」——「85年体制」という国家・社会再編に階級敵が移行していこうとする過渡局面での一番中心の環であろうと思うんですね。我々は現在、国家の再編という、国家水準のところ、それに真向うから向き合うような、労働運動というものの実質を、いわゆる「右翼的労戦統一」に反対するという左派の旗印の下で作り上げようとしている。そこでは、先程いった、職場のそういう壁をどのように打開するかということを含めて、

現在、総合安保・臨調路線による85年体制の構築をめざす階級敵の攻撃が、今年末に発足する「全労協」で、すでに合理化が生産原点で貫徹した民間労働者を全部まるごと右翼再編にもっていつて、それと相呼応して「人勧凍結」というものを皮切りにして、そのイデオロギー攻撃とで地ならししていった上で、「行革」という大弾圧でしめあげていく、国鉄攻撃からはじまった一連のこうした攻勢によって総評残留の官公労働運動を解体して、いわゆる「労働戦線の右翼的再編統一」を来年度は決定的に進歩させよう、と敵は戦略的にきている。赤字キャンペーンというイデオロギー攻撃は、いかにも資本主義の長期不況化にふさわしい攻撃であって、国家が赤字だから国家を守るためにガマンせい、フンパツせいということであるならば、次はかならず企業が赤字だから、企業を守るために資本に協調せいという産報型「労働運動」へのキャンペーンになっていかざるをえない。このところに実は、労働者が本当に資本と国家をのりこえることができるかどうかという正念場があらわれはじめられているわけだ。それが、戦後民主主義体制、戦後民主主義支配

運動の実質が、とくに共産主義者にとって問われている。きたるべき内閣は、私はおそらく中曽根内閣であるとおもいますが、中曽根政権というのは名実共に、財界の土光「臨調」路線とタイアップする「行革」内閣であり「軍拡」内閣でありますから、これと真向うから対決することができるような労働運動の陣型を作ることこそが、樋口同志が強調したような「共産主義と労働運動の結合」ということの現在のあり方になる。我々が再生すべき労働運動というのは、いかなる旗印の下にいかなる中味をもって、作っていくのかということが、きわめて具体的に問われざるを得ない。つまり、「いかなる労働運動の再生か」ということが、樋口同志のいわゆる「いかなる社会主義か」ということと同じレベルにおいて問われてきていると思うんです。今日のシンポジウムの主張は、「合流し、連合し、そして共に敵を撃つ」ということであって、私は勿論そのスローガンに大賛成であるから、参加したわけではありますが、いま述べましたような資本と国家の80年代攻撃に対して、共に撃つという

全体としてはみな志を同じくする「同志」であるという共産主義的関係を作りだす、あるいは回復する第一歩を踏み出すんだと思いますが、そのためにはまず、自分の志が何であるかということを確認に卒直に語る必要があります。私も語るし、ここに来られている全ての人々がそのことを明確卒直に語るそのことが、お互いが同志になっていく第一歩であると思うんです。

問題提起に入らせて頂きますけれども、まず樋口同志が言われた危機論であります。私は現在の世界危機というのは、現代資本主義と現代社会主義の双方にまたがる全地球的規模における危機であるから、すぐれて「世界危機」という風に我々が規定するにふさわしいことであると思います。多国籍企業を中心とする世界資本主義というのは、こんにちの「先進国」のわれわれの全文明様式・全生活様式をつくり上げたといっても過言ではない。高度成長の局面の終焉に直面したこれは循環的に終わったのではなくて、構造的に終って現在の長期不況に入ってきている。このような世界機構の出現は、まだ「小春日和」の中にある日本資本主義下の中流意識にとってはなかなか実感できないけれども、現代史上では、マス・デモクラシーとファシズムとスターリニズムの三巴戦をうみだした、一九三〇年代の大不況に一定の意味で比較できるたぐいの世界機構です。もちろん歴史的比喩には一定の限界があり、30年代の長期不況が世界的デフレからブロック化対立へ直結したのに対して、80年代の長期不況がスランプレーションとして世界的インフレの中で、サミット体制、データント体制を維持しているといった歴史的差異を認識しておくことは、運動上も重要なことです。

とにかく、そうした世界危機の到来の中で、多国籍企業を中心に多国籍企業との結合関係において、社会主義的な独裁国家の上からの近代化路線が強行されている。その中でたとえば、70年代のギエレク体制の借款近代化路線に抗して、「連帯」が白川同志がいうように「本物の労働者階級としてたち現われた」つまり、社会主義国家自体の上からの近代化路線も、世界資本主義の長期不況、危機との不可分の関係において、様々な動揺を余儀なくされている。中国の華国鋒の失脚もその別な形のもうひとつのあらわれです。そういう「社会主義の破産」状況も、現在の世界危機のリアルな一面だろうと思うんです。

こうしたグローバルな世界危機の一番根本のところは、職場に還元して見るならば、青婦部がたった2、3名しかいなくなった中で、国家レベルにおける「行革」攻撃をどうハネ返すかということに還元されるわけですから、疑いもなくこの危機は、単なる客観的な危機のみならず、主体の危機であると我々はとらえるべきである。つまりマルクス主義の危機であります。一方において、既存の社会主義国家というものが説明の必要がないくらいに誰の目にもみえみえの形で変質をしておる。これは、社会主義の危機、マルクス主義の危機以外のなものでもありません。もう一つ、他方では我々を含めた「先進国」において、労働運動が体制内化をしている。これもやはり、主体の危機の我々に切実な顕著な現われだと思っております。つまり、樋口同志が、我々は5%の旗をたてていると言った。そこから我々が発する。しかしそのことは裏から言えば、残りの95%が「先進国」においては、存在としては労働者であっても体制内化しているということにはかならない。だから「多数者獲得」ということも改めて強調されるわけでしょう。この主体の危機をどのよう

資本主義は、世界再編の死に物狂いの努力をしておる、このことが現代社会主義諸国をもふくめ、第三世界諸国をもふくめた現在の現代世界史をさしあたりは規定しているという問題がある。「新国際経済秩序」が云々される第三世界をみるならば、樋口同志もふれたメキシコの国家的破産、アルゼンチンの国家的破産ばかりか、韓国をはじめ、我々の東南アジアの近所にある諸国は、軒並み破産状況におちいつている。日本資本主義と経済摩擦があるのは、アメリカと西ヨーロッパということは毎日、新聞の第一面に大きく出ているけれども、実はそれ以上に深刻なのは、日本資本主義とアジアとの経済摩擦であって、アジアの低開発独立諸国は、日本をふくめた多国籍企業の進出の中で、軒並みに現在国家的破産に陥りつつある。それは、多国籍企業を中心にする、危機における世界再編が、今の第三世界に、いかなる閉塞状況をもたらしているのかということにほかなりません。文部省の教科書検定基準を反面教師として学ぶならば、「進出」とは「侵略」にはかならず、「開発」とは「収奪」にはかならない。だからこそ、光州蜂起があり、イランのイスラーム革命があり、ニカラグアのサンディニスタ革命があり、という形で、第三世界の社会的矛盾の激化は人民的解決を求めて沸騰せざるを得ない。

それから次は、いわゆる社会主義諸国です。我々は、地球上の中心にいわゆる資本主義国家と社会主義国家が共存しておいて、社会主義陣営の方が現代世界史を動かす規定力をもっているという、戦後のある時代の国際共産主義運動の公認規定というものをいかなる意味でも確認することは絶対に誤りである、という自覚にたちいたっている。全体として「ウオツカ・コーラ」体制なるものが敷かれて、

にして打開するのかがということが、私の問題関心の中心であります。私はマルクス没後の門人の一人といたしまして、「マルクス主義の再生」ということを常にいうのでありますが、それは危機を通してしかマルクス主義というのは再生しないし、労働者階級というのは再生しないし、革命運動というのは再生しないんだと確信しているからなのであって、ただのお題目ではない。原古の共同体社会から様々な再生儀礼がありますけれども、それは必ず、絶対絶命ともいべき危機の中で自分（共同体）をもう一度甦らせて、自分（共同体）を再生するという儀礼にはかならないので、我々が直面しているのは、そういうたぐいの甦生の問題だろうと思うんです。これは、世界的な比較として古代ローマ世界帝国の没落に比較いたしますと、古代ローマ帝国は、エンゲルスがいみじくも言ったように、2つの相闘う階級の共倒れによって、世界的に没落したわけですね。その階級闘争では、スパルタカスにひきいられた被支配階級、奴隷の反乱に勝つということにはなかった。さりとて、奴隷反乱の方も「故郷を失った」プロレタリアートの一種の帰郷運動としての逃亡闘争ですから、支配貴族体制を倒して、ローマ世界を人民的に再生させるということにもならなかった。まさに共倒れの世界的没落です。にもかかわらず、そこで世界史が終らなかつたのは、古代ローマの辺境である境に、いわゆる蛮族が現われて、このゲルマンの民が、両階級が共倒れになった古代ローマ帝国の文明の廃墟の上に新しいキリスト教のヨーロッパ文明というのを切り開いて、そこからヨーロッパ中心の資本主義的世界編成の今日にまで至っている。そのヨーロッパ中心の近代世界に、資本の文明開化作用によってよかれあしかれ全地球的規模において世界を一つにした。現在の世界

的危機の中で、仮に労・資、南・北の世界史的闘争が共倒れに終るならば、蛮族がどこから現われるか。どこからも現われようがない。例えば、「エイリアン」という映画にみるように、どっか別の遊星から救世主が現われるという風に想定しなければならぬほど、全地球的規模の危機でありますから、現在の世界危機には、古代ローマ帝国の没落に比較することはできないレベルの問題がある。ここで、トコトン、自力で生を更め、命を革める革命主体としてたないならば、全人類の危機は必然不可避であるという風におさえる必要がある。こうした深刻な歴史的特性をもつ現在の世界危機の中で、日本資本主義というのは、ある意味では例外的な状況にあって、「高度成長」の余熱というものの中にいぜんとしてあり、これは単に経済の自然成長性の力というよりも、支配政策のそれなりの操作の「成果」でもあり、とくに赤字国債による危機繰り延べの能力によって、みせかけの安定性というのがいまだに維持されている今日の世界では、非常に珍しい「小春日和」の国であって、であるが故に、高度成長期の生活パターンを基準とする「中産階級」的な価値観というのがいまだに人々の中に根をはってあって、1億の大部分が「総中流意識」といわれる社会意識をもったままでいる状況におり、われわれはさしあたり確固とした少数派として立たなければならぬ。しかし、樋口同志も指摘したように、この「小春日和」は長続きはしない、日本も遠からず、遅かれ早かれ、世界危機の中にのみこまれてしまうだろう。われわれがいま一見空想的に世界を語ることは、明日の日本をリアルに語ることになる。

その危機を来たるべきチャンスとして生かすのは、主体の力なのであって、それを生かさなるときにはどうなるのかという問

題が、その問題の反面には孕まれている。つまり私は、一面では樋口同志の言ったことに賛成であるけれども、その反面では、日本の資本主義が、世界的危機の中にだんだん引き込まれている時には、現在の党の問題を含めての労働運動という主体の危機は、反面ではますます腐敗をして、ますます深刻になるという側面をもちながら、必ずや進行するだろうと思うんです。次第にあふれ出てくる水は、革命の水車を廻すかもしれないが、同時にそれは反革命の水車を廻すかもしれない。それはひとえに、我々が水を導く水路を作れるかどうかという主体の能力にかかっている。流動化の自然成長力が積っていけばいいということにはならない。そのかぎり、現在我々は右傾化の暗いトンネルの時代だといっておりますけれども、それ以上にもっと、徹底的に暗い時代が来るといふ風に一面では覚悟しなければいけない、そういう風に思います。

私共の季刊「クライシス」では、来年はマルクスが死んでから百年になりますので、マルクス百年忌ということで特集号を準備して、早手廻しに年末に出します。是非、正月のお茶の間でモチとミカンでも食べながら、「あー、マルクスが死んで百年たったなア」という感慨をみなさんにかみしめていただきたいと思うんですが：：。マルクスは死んだという人もいる。勿論これは自明の事実です。そのマルクスの葬式も済ましたんだという人がいる。本当に済ましているんだしたら、私はそれはそれで、どうってことはありません。じゃ死んで葬式も済まされたマルクスはどうなるのか、私の言いたいことは、マルクスは必ずや化けて出るだろうということでありまして、だから私は危機を通してのマルクス主義の再生という。

近代の共産主義というのは、いうまでもなくマルクス・エンゲル

スが一八四八年革命のさいに「共産主義者宣言」を発した時からですが、その「宣言」の第一行は、御承知のように「共産主義というお化けがヨーロッパを徘徊している」という風に書きだされている。もともと、マルクスの自己規定によっても、共産主義はお化けであったわけです。こういう人類の希望の原理が、百年たったくらいで、簡単になくなるようなものじゃない。化け猫だってもうチョット永くは化けてでるんだという風に私は考えます。

樋口同志のいう通り、現在われわれが直面しつつある世界的激突の時期というのは、20世紀に入ってからでも、4回目の世界的な激突であるわけですが、私はここで、もうチョットと射程距離をのぼした世界史的な総括として、よりさかのぼって、そもそもマルクスの共産主義が発祥した一八四八年以来の世界史的総括を提起したいと思えます。なにしろそれを、与えられた時間のわずか20分でやらなければなりませんから、無茶苦茶もいところですから、世界革命の主体とは何であったか、あるかという点にしばって簡単に振り返って見る必要があると思う。というのは、マルクスが世界共産主義という形で、近代資本制世界を超越、人類的な危機の克服を記そうとした主体はいくまでもなく、「プロレタリアート」であります。そのプロレタリアートとはそのまま「先進国」労働者というものに等置することができるのか、あるいはもう少し言葉を言いかえてみるならば、工場労働者というものにそのままイコールにすることができるとか、ということが、私の今日問題提起したいことの一審核心の問題であるわけです。一八四八年の革命というのは、2月革命、3月革命としてドイツとフランスの革命であり、さらにはイギリスのチャーチスト運動であります。イギリス、ドイツ、フラ

ンスというヨーロッパの一番先進的な資本主義国におきた革命であって、その時にはじめて、共産主義というお化けがヨーロッパに現われて、「共産主義者宣言」が発せられた。これは、マルクス・エンゲルスの序文つきのドイツ語版では、厳密に訳しますと「共産主義宣言」でありまして、義人同盟を改組した共産主義者同盟の綱領でありますから、実を言えば、そこから「党」をどう生み出すかという苦しみは、そもそも初めから、非常に苦しみをしょっておるわけです。ドイツを発祥地としてみるならば、「共産主義宣言」とは、ブルジョア革命のプロレタリア革命への転化の綱領であり、周辺のドイツからイギリスへと革命を永続化する世界革命の綱領であった。その中で例えば、あの革命の最後のバリケードであったウィーンのバリケードにマルクスが現われて、「賃労働と資本」の学習会を組織したという伝説があります。あるいはそうかもしれません。産業革命が生み出したところにある工場労働者というのがマルクスにとって「プロレタリアート」にある意味では指定されるという側面をもっていたことは、疑いなく思われます。あるいは、一八四八年の革命というドイツにとっては、ブルジョア民主主義革命でありますけれども、そのブルジョア民主主義革命を驚くべきことに、ブルジョア自身も裏切るという革命の力学がそこに出現したということも間違いのない現場での確認だろうと思うんです。しかし同時に、我々は現在から一八四八年革命を総括して見るならば、そのウィーンのバリケードに死をも賭して闘った革命派の大衆というのは、「工場労働者」というよりも「城外市民」と呼ばれ、ドイツ語で「ゲザンテル」と呼ばれた「下民」といふ風に訳されている、そういう、土地を持たない、故郷を持たない、地域から疎外されながら、しかも

城の中にも入れない、都市の中にも入れない、都市の城壁のほとり
の所で裸のまま寝起きしている、そういう無産の民であったという
ことも、まぎれもない事実だった。それはつまり、プロレタリア
トであります。市民、城内市民の方は、城壁から、バリケードから
逃げ散ってしまいました。ブルジョア革命だというのに。反革命
の側からいいますと、ウイーンの最後のバリケードを爆破したのは、
ロシアのツァーリズムが動員した東ヨーロッパの反革命軍でありま
したけれども、この東ヨーロッパの反革命軍は赤マント軍の主体は、
良知力さんが解明しているように、東ヨーロッパにおいて抑圧され
ているが故に、スラブ主義の旗の下に解放を夢見てツァーリズムに
よって動員された抑圧された少数民族であり、被抑圧民族であり、
つまり、土地なき、故郷なきプロレタリアであった。赤旗と赤マン
トが戦ったわけだ。ここでは、双方から、土地なき、故郷なきプロ
レタリアが、ウイーンのバリケードのこちら側と向こう側で、凄惨
な死闘を演じて、その中で48年革命は敗北の年代記として血の海
なかに没落し去ったという風に私は見ます。そして、プロレタリア
ートの党の独立の組織化という問題は、むしろこの48年革命の敗北
の結果の総括から出てきた。産業革命が生み出した工場労働者の革
命的立場の問題をはらんでいたその問題は、いわゆる自由主義段階
から帝国主義段階に資本主義が転化する19世紀の末の農業大不況
を通してそうなるのでありますけれども、いわゆる産業資本主義の
時代から金融資本主義の時代、帝国主義の時代に世界的に転化を
する、その中で、さらにくつきりとヨーロッパにおいて問題性を現
わしてきた。つまり社会民主主義の問題であります。マルクスの名
による社会民主主義というのはマルクス自身はその名称にさえ当

初から異論をとなえていたわけですが、実はヨーロッパという「先
進」資本主義国における労働貴族のイデオロギーであって体制内化
のイデオロギーであった。マルクスを100万べん語ることによって社
会民主主義者は、城内平和体制のなかに全部体制内化をしていった
わけですが、その帰結というのがいうまでもなく第一次大戦です。
城内平和体制はそのまま各国ごとの総力戦体制に転化して、植民地
の再分割をめぐって労働者と労働者が殺し合うという。レーニンに
いわせれば、「世界史的裏切り」であります。プロレタリアートの
裏切りはもちろん、あれこれの指導者達のためたまたまの悪意や誤認に
よって起ったものではありえない。そういう心理的分析はマルクス
主義の分析ではない。レーニンは「帝国主義論」において、なぜ、
「先進」資本主義国において労働貴族が発展するかという基盤を明
確にした。つまり、独占資本主義が形成されたことによる、独占的
な高利潤が自分の資本の生産現場であることと、植民地の独占か
ら超過利潤があがることによって、いわば買収された労働者の上層
部分というのが労働貴族になり、それがイデオロギー的に社会民主
主義になる。従ってその確認にもう一度、我々は自明なことのよう
だけでも、かえっていくならば、ヨーロッパの先進諸列強に体制内
化された労働者は、客観的にはいわゆる獅子の分け前がほしくて、
植民地からの超過利潤の争奪を帝国主義世界競争という形でやった
ことになる。どこの国のプロレタリアートが植民地からの超過利潤
をひとり占めするか、そのための相互の殺し合いが世界大戦であっ
た。非ヨーロッパの植民地大衆は、その争奪の対象であったばかり
でなく、ヨーロッパ中心の争奪戦の手足として殺人現場に大動員さ
れた。こんにちヨーロッパ・コミニズムは「歴史的妥協」ということ

で、キリスト教民主主義との妥協はいうにおよばず、社会民主主義
の歴史的復権までも唱えています。とんでもないことです。それ
こそユーロ・コミニズムの「ヨーロッパ的」正体を示しています。
第一次大戦の惨禍のなから、社会民主主義と決裂したレーニン
のボリシェビズムにひきいられて、ソヴェト革命が起きました。ソ
ビエトロシア革命を支えた主体というのは、両都ペトログラードと
モスクワの工場労働者であります。それから土地革命を求める農民、
ロシアのぼう大な辺境に抑圧された民族としてツァーリズムの
「民族の牢獄」に閉じこめられていた少数民族、被抑圧民族たち、
この三つの主体の大合流であった。両都の労働者革命、農村の農民
革命、辺境の民族革命の大合流が、ソビエトロシア革命というもの
の実体の中味に他ならない、その力に支えられてプロレタリアート
独裁というものがはじめて政権を獲得した。ですから、このパリ・
コミニオン以来の「プロレタリアート独裁」の中味は、私はやはり
労農政府であり、諸々の労働兵ソビエトというのができた諸ソビエ
トの共和国であったと思うんです。そこからどういことが起きて
きたか。我々は、スターリン主義体制から今日の末期のブレジネフ
体制にいたるまで、すでに歴史としてそれを知るに至っているわけ
でありますけれども、そのソビエト・ロシア変質史上の一つの問題
として、私が「緑の反乱」というふうに総称している問題が、初期
のソビエト・ロシアからつきまといまいます。食料危機のなかで、
ソビエト権力そのものに反対する農民をつかんでいたエスエルの反
乱があった。ウクライナではマノフのこれは、アナキズム系の
農民革命軍であります。反乱があった。そして最終的には、悲劇
的なクロンシュタットの反乱に「緑の反乱」は煮つまっていった。

ソビエト国家の周辺部をみるならば、トルコでは、新しく目覚めた
トルコ共産党のもとに闘った、その名も「緑軍」と名のった革命軍
は、ソビエト権力のケパルパシア政権との平和共存政策のために、
いわば捨てられてしまっていて、その中で壊滅をした。今また、イラン
革命が、別名をホメイニ革命という形で起っていますけど、第一次
世界大戦の直後に一あのイラン周辺地区には、その名もジャンガ
リーと名のる「森の人」の赤色共和国が三つもできた。これも、イ
ランの例のパーレビ国王の親の親であるパーレビが第一次大戦後に軍事
権力をもちたてた時に、ソビエト政府との取引が成立して、ジャン
ガリー共和国は歴史から消え去ったわけですね。モスクワの外交政
策に世界の革命運動が従属させられ、ソ連邦の国家的利害のための
道具に使われてゆくそもそのはじめともいえます。「緑の叛乱」
を鎮圧し、緑を切り捨てることによって、ソビエト政権というのは
かろうじて生き延びることができたということだと思えます。こ
の問題は、レーニンが社会民主主義をのりこえるプロレタリアート
の大義としてかかげた「労農同盟」や「万国のプロレタリアートと
被抑圧民族との同盟」の実際のなかにみにかかわってきます。つまり
社会民主党をこえて、レーニンは共産党を作った、第二インターナシ
ヨナルをこえて、共産主義インターナショナルとしての第三インター
をつくった。それが、必ずや諸ソビエトという大衆自身が作り出し
た自主的な闘争形態というものに見合ったかたちの党の性格を獲得
していかなきゃならない、土地なき農民やモノカルチヤ植民地の
新しい自己回復、闘争に見合った党の実質を獲得していかなきゃな
らない社会民主主義をこえるということの中味には、その問題がふ
くまれていたはずだと思う。にもかかわらず、そのような新しい型

の新しい党の性格というものをボリシェヴィキは獲得しきらないうちに、「緑の反乱」や「植民地叛乱」との不幸な対立関係と国際交渉戦の中に入っていったらう、というふうに思います。その帰結は、帝国主義的包囲のなかで、両都の一番革命的なボリシェヴィキ労働者が自分で武装して、食糧危機を打開するために農村にはいついて、暴力的に食糧を調達する、という労働同盟の危機的な形態に次第になっていった。首都プロレタリアートのヘゲモニーが農民と被抑圧民族の解放のエネルギーをひき出して合流するというソビエト革命の原点と反対のことになった。スターリンとオルジョニキツェのいわゆるブルジョア問題の専横な処理の仕方は、その最悪の典型でしょう。レーニンの「遺言」がこのブルジョア問題と文化革命の問題に集中したのは偶然のことではありませんが、レーニン死後のボリシェヴィキは、「遺言」が憂慮した通り、スターリンとトロツキーの分裂、スターリン書記官専制の確立ということになりました。戦時共産主義下の労働同盟の危機は、レーニンとトロツキーを先頭とするネップ新経済政策への転換のなかでそれなりに切り抜けたわけですが、そのネップさえも、一九二九年のアメリカ大恐慌とともに再び激化した食料危機のなかで、スターリンによって投げ捨てられる。資本主義の世界恐慌が、幼ない社会主義国家をもとらえて、西欧からの機械の輸入とロシアからの穀物の搬出のバーターに依存するスターリンの第一次五年計画をガタガタにしてしまった時に、飢餓輸出のなかで穀物危機・食糧危機が発生してその中でスターリンは、ネップ路線を固守するブハーリンを粛清しながら、もう一度ボリシェヴィキ労働者を武装して、「ウラル・シベリア方式」とよばれる食糧の強制調達をはじめた。最終的には、上か

らコルホーズ農業を創出して農民たちを強権をもって集団農場に囲い込む、いわゆる「第二革命」によって、自分たちの権力を維持する供出食糧を確保するという、そういうかたちでスターリン体制が確立するにいたった。コルホーズ大農業化に見合うものとして、当然スターリン型の社会主義工業建設がある。ロシアの農民たちの穀物を飢餓輸出して、血の出るような穀物でもって欧米資本主義諸列強から買った最新型の機械は、テラー・システム、フォード・システムともにはいつてきた。工場は合理化と科学の労働管理によって支配される、そのブルジョアの合理化の度合いに応じて、工場における労働者ソビエト、工場ソビエトは形骸化してゆかざるをえない。名前は、ソビエトロシアであるけれど、次第にソビエトぬきのロシアになっていった。スターリン体制下の労働者の社会主義運動というのは「スタハノフ運動」になり、テラーシステムのもとにからめられた資本主義国の労働者の競争の、いわば社会主義版を展開するというかたちで、スターリン体制を生産原点から支えるというふうになった。プロレタリアート独裁が「プロレタリアートへの官僚独裁」に転化した。

この兆候を、死ぬ間際のレーニンは鋭敏に気がついておった。なぜ、ソビエト・ロシアという生産者の自治組織に依拠する「半国家」であるはずの権力が、「ツァールなきツァーリズム」とでもいうべき、こんなにもグロテスクな巨大管理の国家になるのか、という問題は、レーニンの死ぬ間際までの頭を離れない問題であったといえます。さきほどもふれましたように、死に臨んだレーニンは、その時ふたつ言い遺したと思います。ひとつは、スターリン書記長に対して決定的に闘争を始めたレーニンが、トロツキーとの同盟を実現

させるかにみえたブルジョア問題です。これは要するに、ツァーの遺産ともいうべき両都に、都市労働者に依拠して打ちたてられた赤色権力が、ブルジョアの少数民族を抑圧したという問題です。レーニンは、こういう大ロシア人排外主義が、スターリンの「デルジモルダ」的強権によって行使されたいまわしいことが続くならば、帝国主義的包囲下のこれからの世界革命の前途が、東方の膨大な植民地革命にかかっている以上、この植民地革命と労働者革命は結合することができなくなるではないか——これが、レーニンの遺言の第一です。

第二番目として、レーニンは国有化された工場が「労働者反対派」の理想生産にもかかわらず、労働者によって自主管理という形で、現実には運営することができないという難題の解決に腐心していました。レーニンはその難題をソビエト権力に結びつけて、政治社会革命的に解こうとして、あるいは政治技術革命的に解こうとして、ソビエト権力プラスドイツ国独資とか、ソビエト権力プラス電化とか、テラーシステムの導入とか、いろいろのマスター・プランをうちだしたわけですが、遺言で提起したのは、文化革命ということです。その文化革命の中心は、レーニンに即していえば「ブルジョア文化を習得せよ」ということである。私は、ブルジョア文化というのは科学・技術もふくめてそのように階級関係を離れて中立的なものではないと考えています。ブルジョア文化を習得してプロレタリア社会主義を作り出すというような手品はできない。もちろん、レーニンがプロレトクリトを批判していったように、社会主義は「ブルジョア鉄道」を廃止して「穴居程の鉄道」を新しく建設するという形で社会主義建設をやるものではない。文化というもの

が世代継承的であり、身体的な遺伝としての歴史的蓄積の一面をも

っていることも疑いない。ブルジョア文化に対してもしたがってヒリスチックな態度をとることはできない。しかしながら同時に、資本主義社会における文化は、レーニンがブルジョア民主主義文明とよんだ形のブルジョア・イデオロギーに全面的に浸透された特異な階級的性格をおびていることも疑いありません。なかんずく、ブルジョア生産関係が変革された後に残される生産力体系というのは「資本の生産力」としてつくりだされた体系でありますから、労働者自治にもとづく変革の対象として、改造や廃止もふくめて批判的継承ということにならざるをえないでしょう。したがって「ブルジョア文化を習得せよ」というレーニンの最後のよびかけは、読み書きソロバンを覚えよう、シラミがたかないようにきれいにしましょう。メシを食べる前には手をきれいに洗いましょう、そういうところから始めなければならぬ、非常に切実な、アクチュアルな課題でたしかにあり、文盲のロシアの民というのが、どうすれば共産主義の主人公になるかということの主体的改造の苦しみの表わられたのだけれど、やはりブルジョア文化を習得することによって、ソビエト国家の官僚主義的歪曲をのりこえることはできなかったというふうには私は思います。権力獲得後、生産手段国有化後の社会主義文化の深化のスローガンは全く正しかったが、そのなかみは「ブルジョア文化の習得」ではありえなかった。

こういふことを話しているだけで20分をすぎましたので、ポーンと飛んで最後に中国の話を書きます。

私は、第二次世界大戦後における最大の世界的事件はもちろん、植民地革命の先頭に立った中国人民革命の勝利だと思えます。その勝利を領導した中国マルクス主義は、古くから革命の主体概念を、

「無産階級」というふうを立てています。これはつまり「プロレタリアート」の中国語訳であります。その当時は、日本の共産党が出しておいた大衆むけ新聞も「無産者新聞」と言っていました。私は「無産者」とか「無産階級」というのは、実は「プロレタリアート」という原語に非常に近い適訳だろうと思っています。それは、必ずしも工場労働者というふうにはイコールするところから多少はみ出る、全面的な欠如態であるような世界史的存在のよび方であり、中国語ではこの「無産階級」と区別して「工人」という言葉があります。それは、工場労働者という意味です。

工人と無産階級とをこうして中国マルクス主義が区別せざるをえなかったというのは、半植民地的条件の中におかれた中国が、自分の革命主体をどこに見さだめるか、という時に、どうしても創造的な訳をせざるを得なかったことからきていると思うんです。つまり中国革命の主力というのは、誰がみても、大長征をし、老根拠地をつくり、農村から都市を包囲した中国紅軍であります。レッドアームイであり、中国紅軍の人格的な主体、実態というのは土地なき農民です。よく中国革命は農民革命であるというようなことがいわれるが、単なる農民では勿論ない。なぜならば、単なる農民であるならば、田畑を持っていて、いかに貧農であろうとも5反1町の田畑を持って大長征という2万5千里を歩くことは、どんな革命的英雄であろうとできるわけではない。これは必ず、蒋介石の国民党軍——これ自身が勝利した北伐革命軍の反革命的転化物です——に追われ追われしながら、2万5千里を歩けるということは、土地なき、故郷から切り離された農民でなければできません。いわば中国反乱でおなじみの流民であり、遊民であります。土地なき農民

プラス・マルクス主義イデオロギーという節合で、中国紅軍は人民解放軍としてできなかった。だから、農村が都市を包囲して最終的に権力を攻略する毛沢東の独創的な戦略路線で勝利したと思うんです。

第二次国共合作により、抗日民族革命戦争が第二次世界大戦の反ファシズム解放運動としての勝利と共に、中国人民革命は永続的に前進するチャンスを迎えて、人民解放軍は農村から北京に入城し、上海に入城していった。その時に生まれた問題というのは、農村が都市を包囲する、最後には攻略する、じゃ、攻略した都市——この工業基地、行政中心をどうするのかということだと思っただけです。それは、中華帝国の官僚主義的遺産であるとともに、欧・米・日の資本主義の植民地体制が作り出した官僚都市であり、あるいはまた上海にみられるような、植民地型の大工業都市であるわけです。辺区政府から全国権力になった、じゃ、とった都市と工業はどうするのかという問題に直面したわけですが、それに対する一つの解答は、現在完全に復活した劉少奇の8全大会路線でありましょう。ソ連型の社会主義工業建設の路線を踏襲して、そのままに、都市と工業を奪ったんだから、それをテコにして中央計画経済によって上からの近代化としての社会主義建設を進めていこうという路線です。この課題の中に、大衆路線を基点とする中国人民革命が、さらに解かなければならない最大の問題が毛沢東路線にとってもでてきた。つまり、共産主義への過渡期である社会主義において継続革命をやらねばならない問題であって、これは御承知のように、大躍進、人民公社から無産階級文化大革命に推進されていた主体の問題にほかなりません。あの無産階級文化大革命を担ったものは、農村の人民公

社運動を推進する農、下層中農、それからノーメンクラトゥーラの選抜教育制度から落ちこぼれた紅衛兵、そして、臨時工と失業者であります。総工会に結集したいいわゆる正規の工場労働者つまり工人、本工というのは、必ず造反の積極分子ではなく、一度総工会という労働組合組織を文化大革命によって革命的に解体させなければならなかった。

そうしますと、中国人民革命は、プロレタリアート独裁下に政治と経済を合一し、政治と社会を合一している人民公社という大衆的創造を、農村においては作り出すことができた。その理論的根拠には、毛沢東によるスターリン型の上からの強制的農業集団化に対する根本からの批判があります。そして、その農村人民公社運動が都市と党権力中枢に向けて無産階級文化大革命として、さらに昇りつめてゆく過程において、造反派労働者の拠点で上海コンミュンというものができた。しかし、上海人民公社は看板を掲げかけるだけの問題ではない。コンミュンという看板を植民地工業大都市をそのままひきついでいる上海に掲げさえすれば、それで問題が革命的に解決したことにはならない。そういう上海という都市における大工業の生産力体系を、労働者がどういうふうにするか、コンミュン的に自己管理をすることができるとか、自治をすることができるとか、近郊農業地帯と三大差別の廃絶の方向で労働同盟を現実化していくことができるかということにぶつかってきたと思うんです。その大きな壁をうちぬけない所から文化大革命は、軍・官権の巻きかえしに会って敗北に転じはじめた。これがひとつ。

もうひとつの、第三世界の解放闘争との結合を軸とする全世界版の世界革命的な昇りつめですが、林彪が出した「世界の農村が世界

の都市を包囲する」という問題にそれは煮つきました。先程、樋口同志が言ったように、今例えばフィリピンでは、都市と農村が同時に革命をやっている。かつてのベトナム革命においても、都市と農村が同時蜂起をやることによってアメリカ帝国主義侵略者を追い詰めていった。それはある意味では、農村での長期の遊撃戦争という毛沢東の次元をも超えはじめています。そういう形を我々はみている。つまり、林彪が出した「世界の農村が世界の都市を包囲する」というのは、中国革命経験の世界版であり、中心と周辺の資本主義の世界編成を解く新従属理論にも適合するところのある戦略ではありますけれども、中国革命がやはり上海でぶつかっていた問題——つまり、世界の都市、「先進国」に集中した大工業生産力体系を攻略した場合には、これをどうするのかということとは、必ずしも中国革命の経験からはまだ出ていない。

要するに、社会主義の再生、マルクス主義の再生のポイントは、政治・社会・文化革命の全面性において都市の大工業生産力体系をいかに革命的生産者が自主管理をするのか、そして農業を担っている農民との労働同盟の関係というものを真に同権的な自治連合としていかに形成するのか、自然との物質代謝である労働そのものの自主管理を通じていかにエコロジカルな関係を再生するのか、という課題である、と私は考えるものです。我々、つまり、今日パネラーとして名を連ねている5名、そしてここにお集まりのすべての皆さん、「先進国」の中でこういうシンポジウムを開いて「共産主義と労働運動の結合」の現代的再生ができるのかを討論している我々の課題の核心もそこにあると思います。

問題提起を終わります。(拍手)

労働者にとって党とは何か

横山好夫

おソバというのは、ソバ粉だけではソバにならないそうで、つなぎの部分にうどん粉がないとソバにならないそうです。本日の役割りは、そのうどん粉の役割りだろうと思います。(笑い)

最近、無党派派という非常に弁証法的な存在(笑い)がウワサされまして、その意味では職場で闘っている労働者の中で、現在はある特定の党派に所属はしていないけれども、何らかの形で党派を志向している部分というのは、かなり多いと思うんですね。誰でも党の必要性ということについては否定しないわけで、一般論でいう限り、全部総論賛成だが、各論のところになるとなかなかというのが、実際のところなんですね。

今日私は、全く個人的に体験的なところから考えていることをお話ししたいと思います。実は、党の問題でいろいろな提言がされて自分たちとしても、これを考えなければならぬ、そう突きつけられた時に、つまり所は個人としてどういう思想的な生き方をするのかというところに全部返ってくるんだと思うんですね。今、私自身が

どういふ道を選択するかという解答が出せないもので、後めたさがあります。

今、非常に大きな課題としてとり組んでいる問題は、労働戦線の右翼的再編に反対する勢力をどのように結集するかということなのです。労働戦線の右翼的再編の動向については先程樋口さんもふられましたように、現在の世界的な危機を反映して、労働の右翼再編が進行したわけです。しかし、これはここ数年の規模で始まったわけではなくて、非常に長い準備過程があって、現在の右翼的再編が進められているわけです。彼らの側は、昨年12月14日に「統一協議会」を発足させて、今年も同じ日に「全労協」——協議体に移行しようとしているわけです。これに対して、単産の中で反対派の結合、運動もはじめておりますが、そこでの論議の中でひとつ欠落している部分、あるいは意識してふれない部分に党の問題があると思うのです。

「労働統一」の進行そのものが、社公民路線の進展ということの

中で画策されていて、しかも、社会党自身が階級性という言葉全て捨ててしまうような「新しい道」の路線を採択していく、そういった時代だからこそ、反共・親帝の同盟・J.Cの路線ともやっていけるというふうになっているわけですね。そうすると「労働統一」の推進派というのは、社会党の現在の体制を再編していくということとをひっくるめて、今後進行していく。ですから、逆に言えば「労働統一」の完成形態というのは、党派再編まで含んだところで、やはり、完了するんだらうというふうには僕は見ているわけです。

一方で反対派の勢力というのも、日共は「統一労働組懇」というので登場している。現在の「労働統一」の進行に対して反対をいっている、岩井さん、太田さん、市川さんという総評三顧問の動きなども、ある点では、社会党の中の分解を辞せずという立場で反対と言っているのだらうと思うんですね。岩井さんに直接お会いして聞いたところでは、彼のプログラムのの中では、現在の組合幹部の中で世代交代を行わないと、今の社会党を変えるということにならないらう、だからあと4〜5年はというのが、岩井さんの読みのようですね。けれども、いずれにしても、党派の分解というようなことも考えて「労働統一」反対ということだと思っただけですね。

「労働統一」反対ということで地域なり産別の中で闘っている部分、ようやく、ひとつの場について「連絡会議」というものを発足させようとしている。これから全国的提起が寄せられる段階にきていて、12月の11・12日に東京で「労働の右翼再編に反対し、闘う労働運動を強める労組・活動家連絡会議」というものを発足させるんだらうになっています。それが、実体をもって活動する。今のところ、「全労協」参加をある単産が決めるか決めないかという時

に、その中で反対派勢力を結集して、反対派をふやす。そのためには、三顧問とも手をくむし、場合によっては共産党とも手を組む。そういう範囲の運動であるならば、これは十分活動の余地があると思うんですね。

しかし、そういうことが終わったら、ある大会での決定が終わったらそのあとどうなるのかということになると、それは自分たちの政策、路線の問題というふうなものやどういふふうな打ちだすのか、ということがすぐ問われてくるんです。その時に、労働者の中にある意味での思想的な統一、又は意見の一致というものがなかったら、これはすぐ雲散霧消してしまう。ですから、「労働統一」の進行が、帝国主義的規模で行なわれていくのに対して、我々が反対派を結集していくとするとする時に、表だってその問題を論じれば、非常に混乱が生じるし、そのことが組上にのぼってはお互いのフランクな論議にならないということがあるわけですが、党の問題が回って回っていると、この問題について、私自身も解答をだしていませんけれども、そういうことをやはり意識しないでは「労働統一」反対等々についてかわりきれなくなるだらうと思っただけです。

それからもうひとつ、非常に経験主義的ですし、私以外のパネラーの方々は各々、長い党派経験なり、実践なりを持たれている方々ですから、無党派派の特権を行使して、少しおねだりしたいことを出したいと思っます。私たち、ゼネラル石油労組というところでも闘いはじめて12年になります。その間に首切り問題とか、分裂問題ということを経験して、私自身も解雇されて8年外にいて職場に復帰して4年になります。11人の解雇者がいて、それを全部職場に復帰させると闘ってきて、職場をかちとったわけですが、その時、

もし、党派だった一人や二人を「職革」として残すというか、外におくという選択の方が正しいは正しかろう、そういう解決の仕方をして、拠点としての位置と、活動家あるいは「職革」というものを作り出すというようなことをやったのかもしれない。しかし、労働組合的な解決の方法からいえば、その所は全く発想としてもでない。全員が職場復帰しなければならぬというのが、先ず至上命令であって、そのことでもっと闘い続けてきた。闘争の過程で仲間が死んだり、(一人が自殺でもう一人が山で)その時の職場の論議で、分裂組合に身をおいて闘っておれば仲間の生き死にの問題に全部がかかわっちゃう。そういう中で、いつまでも何のために闘ってきたのかということについてみえないという状態じゃ困る。仲間というのは居心地がいいし、仲間意識が自分達を支える最大のものであるには間違いないのだけれども、このことを何かに向ってなしていく、いわば同志的結合に昇華させなかつたら、一緒にやってきたといっても何をやってきたのかわからんんじゃないかということ、仲間結合を同志結合へ高めよう、ってことが論議になったことがある。しかし、このことが充分展開しきれない。組合の中でみても、確かに資本の弾圧が和解後はあまり直接にはできませんから、意識的には分解していく傾向というのがあるわけです。そういう状態のまま、このまま風化していったのでは何のために職場で闘ってきたのかわからない、というのが体験的な問題意識でもあるわけです。

地元の話しですが、三井三池の意識調査の結果というのが(これは78年、要するに分裂以降18年たって行なわれたところで、)その中で三池労組を守る理由は何か、という設問の中で、正しいことが

も、尚かつ踏み出せないでいるのは何故かという、次のプログラムがみえない。党を作った次に何をやるのか、選挙をやるのか、闘争をやるのか。樋口さんは革命をやるんだというふうには言われるけれども、そのところがやはりなかなか。何のために党をつくるのか。それは、イメージが貧困だからつかめないんだといわれればそれまでなんですが、そのところが出ないと、あるべき社会主義論みたいなものにも重なると思うんですけども。次に何をやるのかというプログラムのところですね。そのところを出さなければダメなんじゃないかという気がしています。

同時に、我々がやってきた12、13年というのは、ある面では新左翼諸党派のいちばん活性化した70年前後からの10年間、停滞といった失礼にあたるかもしれませんが、そういう時期だろうと思うんですが、そういうなかで例えば、党派が最先頭に立って闘うという局面が、どういう場面であったんだろうかということも、もう一度考えざるを得ないというところがありますね。

78年の3・26というのは、まさに党派が先陣切って闘ったものですが、それ以外の闘争のところでみると、大衆運動をひとつの表だてにして、その裏で工作するという運動の作り方、形成のされ方というのが、ずっと続いてきたんじゃないかという気がしているんです。ところが、ある面での操作性を伴うし、それから中での大衆運動を非常に混乱させることもあるだろうと思うし、逆にいうと、無党派党派などという非常に又工的なものをボナパラせるといって、そういう結果にもなっているんじゃないかと思うんですね。そういう実体をどっかで切開しないと、新しい党派とか党形成とか連合とかいうことについて、なかなか卒直な論議ができないんじゃないかと

言える組合という答の人が38%で、第二組合では権利は守れないと

答えたのが16・2%、社会主義実現のためにと答えた人が13・5%ですね。あと「意地」だとか、「節操を曲げたくない」「第二組合は裏切りだ」とか、「敵のやり方が汚ない」とか、そういうふうな意味で答えた人が各々5%前後いるわけですけども。そういう意味でいうと、運動を意識して意識的にこは守らにゃいかん、闘わにゃいかんということが残っている部分が45・8%、感情型というのが8・2%という結果が18年間闘ってきた数字なわけですね。その傾向というのは、我々でいえば12年やってきて、多分同じような傾向だと思っただろう。どうやっても、全部が意識的に転換するということにはならないだろうと思います。党との決定的な違いです。

例えば組合の中にあるフラクションを作って、そういう政治的訓練をやっていくべきじゃないかというふうなたてることも可能だと思っただけで、現実には我々のところでは、そういうふうな展開しなかつたし、逆にいえばいろいろな党派の方々との付き合いはあつたけれども、樋口さんのさっき言われた労働運動の指導ということについて全面的にかかわり、信頼しうるところがなかったというところが言えると思う。我々は逆にいえば、受身の形でみてるからそうなんであつて、見合い写真全部見せられても気に入らなかつたならば仲々一緒になれんというのはあるわけで、まさに、主体的な問題として考えねばならない問題だと思ひます。

冒頭に申し上げましたように、党の必要性ということについて職場でやっている人達の殆んどが否定しないし、どっかで闘いやつている労働運動にかかわる人にとって、党形成という問題というのは最後にそこに帰着するだろうということが全部共通なんですから

思う。

情勢の変化そのものはやはり「労戦統一」の動きが再度活発になってきたのが、オイルショック以降の世界大不況の中で、危機が非常に「高度成長」型でできた社会の形成そのものが全く逆転したわけであつて、逆転の中に自らが置かれていて、それにかみ合う形での戦略が我々自身がたてられているのかどうかという所に全ての問題が帰結しているわけであつて、例えば、住民運動・労働運動でもそうですけれども、10年前言っていた要求が全く白じゃなくなつちやう。例えば、石油基地問題にしても、反対していた住民が誘地してまわるといふ状況がアチコチに起きてきているわけで、そういう状況の中で、戦略的転換を路線の問題としてどういうふうに立てて打ち出していくのか、左翼総体に問われている課題であると思ひます。右翼は、具体的な結論をだして道すじを進んでいるわけですけども、我々自身がどう立てるかという問題は、やはりまだ論じられていないんじゃないかという気がしています。

党の問題を我々自身が論じる場合には、そこに主体的な総括がやはりかけられている。そのことは、我々も真摯にうけとめて、自己切開をやりたいというふうな思っているということも申し上げて、つなぎの役割を終りたいと思ひます。(拍手)

現代の党的主体と 共産主義者の連合

白川真澄

白川です。まず、今日のシンポジウムに招いていただき、発言の機会を与えられたことについて、大変嬉しくおもしろい感謝いたします。しかし私は、招かれたパネラーとして涼しい顔で発言するという訳にはいかない立場にありまして、本題に入る前に申し上げねばならない問題があります。

今回のシンポジウムの「合流し、連合して敵を撃つ」というスローガンに、私は大賛成であります。あるいは、今日のビラに書かれている「左翼の分散状況に終止符を打て」という課題が切迫している状況が、今存在していると思います。したがって、私達の歩みをふり返ってみて、そういう分散状況、あるいは分裂状況がなぜ生じているのかという事を総括して、共産主義者の連合、あるいは闘う人々の大きな合流を創っていく時の基本的な姿勢を、あらためて確認しなければならぬと思います。現在の情勢の特徴として、自民党の方も鈴木の大退陣に見られるように「四分五裂」になる予兆と手詰りを見せはじめていますが、同時に三里塚や部落解放

運動など、これまで最前線を形成してきた闘争や運動を考えても、むしろ、主体の側の内部にいろいろな分裂が生じている、という敵しい状況があることも否めない。とりわけ、連合とか合流という課題を考えますと、やはり、それぞれが歩んできた道、あるいは路線、意見の違いを明確にしながら、同時に違いを分裂の引き金にしない、むしろ、違いを明確にすることを通じて、逆に新しい結合を闘いとしていくという、粘り強い討論と共同の実践の作風を——私達自身の総括としても——どれだけ身につけていくかという事が今敵しく問われているだろうと思います。そういう立場で考えまして、このシンポジウムの事実上の主催者、推進者である九州地方委員会の方で、路線や意見の違いが必ずしも明確にされないままに組織的な分裂がひきおこされるという事態に立ち至った事について残念に思います。私は、私達自身の党の団結のあり方、これまでどういう基準で団結してきたのかという事について、改めて自己総括し、皆さんの前にその問題について更に明らかにしていくという自

己批判を、やはり、最初に申し上げねばならないと思います。

私達共産主義労働者党は、ここにおられます樋口さんやいいださんと私達との関係もそうありますが、71年の時点で三つに分裂する、という事態がありました。その分裂を私なりに総括しますと、いくつかの路線上の違いや意見、方針の違いがありました。果してその違いは組織的な分裂にまで行きつかなければならない性格のものであったのかどうか。あるいは分裂が避けられなかったのかどうかという事について、70年代の闘争を振り返って改めて総括しなければならぬ、と考えております。71年の党分裂を教訓化して考えますと、意見や路線の違いを徹底して明らかにする議論を全国的にも時間をかけてやり抜いて、そして困りの人から見ても、対立点がくっきり明らかになっていく、その上で組織的に別々の道を歩もう、しかし、この点では協力していこう。こういう努力があったく行われないうまま、今回、九州の党で組織的な分裂を引き起こされたことは、連合を提唱し推進する主体としての資格を自ら放棄するものであると、いわざるをえません。それは私自身の主体的な責任、あるいは総括としても、今考えている点であります。そういう点をきびしく総括する中から、大きな合流・連合へ向っての歩みというのが出てくるであろう。つまり、路線や意見の違いを明確にする努力を強める、そういう論争の中から、しかし違いによって対立したり、分裂したりするのではなくて、違いをむしろ結合のバネに変えるような連合のあり方を我々が探り出していかなければ、本当の意味で分散状況、分裂状況を克服出来ないのではなからうか。我々左翼がこういう作風を実現しない限り、私は自民党のやり方はブルジョア政治であると思えますけれども、それでもぎりぎりの所で分裂

を回避する能力を発揮しているのに比して、何故我々の側は、真の対立点を明らかにする努力なしに低水準の分裂をして、分散状況を克服できないのかという、民衆の疑問に答えられない。この点を深刻に総括して、今、連合の問題を語る必要がある。以上を前置きにして、本題に入って問題提起をさせていただきます。以上を前置きして、情勢、あるいはこれまでの世界革命の問題については、いくつか提起されていますので、私はズバリ共産主義者の連合、あるいは党的主体の問題について問題提起を——限られた時間でありまして、多少、箇条書的になるかと思えますけれども——提起したいと思えます。

私達は、新しい党的主体を形成するという問題を考える時に、共産主義者の連合というふうに、問題を立てております。これはどういうことかということですが、やはり、これ迄共産主義者が協力して革命の事業を進めるときに、ふたつばかりの形態があったと思うのです。単一の党へ向って組織的に合同・結合するという形態がひとつ。もうひとつは、党は組織的にはそれぞれ独立しているが、ひとつの目的に向って力を合せて闘わねばならない状況下において、相互に利用し合う統一戦線的な政治的共闘、戦術的なあるいはもう少し長期の射程での共闘です。党派間の関係でいいますと、党派共闘・ロシア革命でいえば、ボリシェヴィキとエス・エル派などとの共闘という形態が、これまでの主たる形態であった。私は、単一党派への組織合同なのか、それともある種の利用主義的な政治共闘、党派共闘か、というこれまでの二者択一を越えていくものとして、共産主義者の連合を提起したい。つまり、各々の政治組織、グループが、おのおのの独自性を十分に生かしながら、あるいは各々の違い

を認め合いながら、連合して、ひとつの党的主体の役割りを果していく。そういう新しい実験に我々が挑戦してもいいのではないか。そういう挑戦がもたらされている時代に、今入っていると、考えております。これは、第三世界の解放闘争の指導的核心として出現した解放戦線型の組織やポーランドのKORなどの世界的な経験を主体的に学びながら、出来あいの党のあり方を止揚していく実験でもあると思います。

そういう意味合いで、我々は共産主義者の連合という問題に、旧来の水準で語られた、いわば、単一の党への組織的な合同なのか、それともある利用主義的な政治共闘なのか、という枠組を突破する課題として、今挑戦しなければならないと考えています。その事は、我々が連合を前に進める際に、やはりそれが清算主義的な「弱者の連合」であってはならないという問題に深く関わります。我々は、70年代の闘争を通して、日本の解放運動に何ほどの貢献をなしたのか、ということがある痛み、残念さをもって総括しなければならぬ。だから、自分だけが唯一の前衛党である、という立て方は否定されねばならないし、こえられねばならない。自己を絶対化してはならない。しかしながら同時に、自分たちが70年代の闘争を通して一体どういう独自の個性、独自の党派性を築きあげてきたのか、いかなる闘いを自分たちは展開してきたのか、という独自性と歩みを清算してはならない。それは継承し、磨きあげるものにはかなりません。それぞれのあるある党派性、独自性を発揮しながら、つまり先程言いましたお互いの違いを結合のバネにかえるという観点からいって、それぞれの政治組織やグループが磨きあげ、創りあげてきた独自の党派性をやはり大事にし、ますます発展させながら、欠

如を相互に補いあい、新しい党的力を創りだすために協力するという課題に、我々は挑戦しなければならない。そういう意味合いにおいて、私は共産主義者の連合は70年代の闘いを清算するような「弱者の連合」であってはならない、ということを強調したいと思っております。

現代における党的主体という問題であります。私は党とは、すぐれて普遍的解放、全体的な解放への志向性をもった人々の集団であると了解しております。普遍的な解放という大変抽象的にきこえますが、例えばそれは、自分の特殊な個別の利害のためにではなくて、自己犠牲を払って全体的な解放のために闘うということであろうと思います。党的主体をそういうふうにして了解するとすれば、やはり党の問題も、ある世界的な水準から立て返さなければならぬ。そこで、党形成の問題に具体的に踏みこむ時に、我々の前に大きく立ちかかっている未解決の困難があると思うのです。それは、70年代の運動の総括でもありますが、やはり、現存社会主義の総括の問題を含めて、いわゆるマルクス・レーニン主義党が何故、解放の党から支配と抑圧の党に転化したのか、という問題であります。例えばロシアにおいても、中国においても、ボルシェヴィキ党や中国共産党が、民衆の解放闘争の最先頭にたって最大の自己犠牲を払って闘う党として現われながら、その党が何故、スターリン主義的な抑圧の党に転化せざるをえなかったのか、という問題であります。

この問題は、例えば日本ではまだ革命が起っていないから、そういう問題はもう少し先に置いておこう、ということにはならない。つまり、党の問題は、すぐれて世界的な同時代性をもって提起さ

れている問題であるが故に、マルクス・レーニン主義党の抑圧の党への転化という問題についての徹底した自己対象化が、今、共産主義者に問われていると、私は思います。その際、ソ連や中国におけるマルクス・レーニン主義党ないしは、その党が主張するマルクス・レーニン主義は、本物のマルクス・レーニン主義ではなくて、現代修正主義であるから、あるいはスターリン主義であるから、という次元で総括することが多いのですが、私は、その次元での総括ではすまされない問題があると思う訳です。私に言わせれば、客観的な普遍的真理としてのマルクス・レーニン主義なるものの存在をあらかじめ前提して、そこからあれこれの偏奇を批判するという立て方そのものを、批判しなければならぬ。支配と抑圧の党への逆転の問題をどう総括するかということについては、時間もありませんので一点だけ申し上げておきたい。やはり、この問題は、基本的には階級と党との関係の問題にかかわると思います。つまり、従来のマルクス・レーニン主義党が前提にしていたものは、単一のプロレタリアートという、私から言わせると、非常に神格化された神化された概念である。いわば抽象化されたプロレタリアートなるものが実在するかのような仮構を自己の正当化の前提において、その代表者として自らの党の存立根拠、あるいは正統性を主張する。そういう意味合いで、やはり、レーニン主義の総括の問題にならざるをえないのですが、いいださんは先ほど、レーニン主義の問題を労働者階級の概念、あるいは労働者と農民との関係で歴史的に論じられました。党の問題の方から論ずるならば、やはり、レーニン主義の最大の問題は、階級と党との関係をめぐってある。つまり、主体としての階級が抽象化され、あるいは物神化されることによ

て、事実上階級が党という特殊な存在・表現形態に等置される、あるいはもっと言うならば、階級が党のイデオロギーに解消されていく。そういう階級把握の問題が根底的に存在する、という風に思う訳です。

何故、いうところのマルクス・レーニン主義が、絶対不可侵の真理として現代社会主義諸国において、民衆を抑圧するイデオロギーとして君臨しているのか。あるいは、何故、社会主義諸国だけではなくて、いくつかの国々における共産党が、自分達の言うマルクス・レーニン主義が絶対の基準であって、それを認めないものは遅れている、あるいは反革命であるという自己絶対化をしていくのか。その根拠の問題として、私は階級と党とのつかみ方の問題が存在すると考える訳です。したがって、マルクス・レーニン主義の従来の革命論を、多少手直しをするということではもはやすまされない。

これは、世界的に投げかけられている問題です。例えば、ポーランド「連帯」が何故、マルクス・レーニン主義の概念を用いないのか。現実に存在するそれが、間違ったマルクス・レーニン主義だから、ポーランドの「連帯」に結集した労働者が拒否をしているのかどうか。そういう通俗的な水準の理解でいいのかどうか。したがって、現代における党的主体という問題を考える時に、解放をめざす労働者や人民が、自分たちの力で多様な自己表現と自己組織化の様式を創造する、そのひとつの求心力的形態として党を位置づけるという観点から、レーニン主義の総括が問われる。主体としての階級が事実上党に解消される、もっと言えば、党のイデオロギーに解消される、そういう構図をそなえた党のあり方が何故生じたのか、と

という問題の総括が、党形成の問題を考える時にひとつ大事な点として出てくると思います。

二点目は、問われている党的主体の時代的な水準という問題であります。例えば、「社共に代る革命党」というたて方がひとつあります。私はそれは、日本共産主義運動の一つの歴史的経緯中において、新しい党を志向する共産主義者の悪戦苦闘の中から出て来た一つの時代性を持った提起であったと思います。「社共」に代れる党」という旗印の下に我々も含めて闘った、私はまだ若い訳ですけれども、樋口さんを先頭に非常に悪戦苦闘を重ねてこられたと思うので、五〇年代末から六〇年代にかけて戦後平和と民主主義が支配的体制として存在し、社共がその反対の極をなしていた時代状況の下において、「社共を越える革命党」という立て方は、我々が何者であるのかを示すことのできる時代的な有効性をもっていたと言えます。

それでは、現在において我々はその立て方でいいのだろうか。つまり、現代世界の構造と座標軸が地すべりに変化している現代における左翼とは何ぞや、という座標軸を我々は改めて立て直さなければならぬと思います。「社共」に代わる」という立て方は、今や何らの積極的方向を指し出すことにはならないからです。現代における左翼という問題を考えてみた時に、従来の基準として、こういう尺度があります。例えば、生産手段の所有関係をめぐっての資本主義か社会主義かという対立の図式、対抗軸で、左と右を区分するという立て方です。しかしながら、七〇年代の様々な世界的なあるいは日本における闘争と運動を通じて明らかになってきたことは、生産手段の所有関係に基本的に規定された資本主義か社会主義

かという対抗軸において、左か右かを区分するという立て方ではすまなくなっているという、歴史的な現実です。

私は、左翼であることの根本的な基準は、いささか抽象的な言い方になりますが、やはり共産主義なのか、それとも資本主義近代なのか、という根本的な歴史的対抗軸において立てられるべきだろ

うと思います。ただその共産主義、あるいは共産主義革命が打倒する資本主義近代の本身とは何かを突っ込んで、我々はとらええす必要がある。ひとつは、日本の状況もそうでありますが、現存社会主義も含めて、国家主義に対して我々は人民の自治と連帯、人民自身がすべてを決するという立場を対置する。つまり、国家が万能であり、国家が全てであるという国家主義。これは、軍事ファッショ大

の基準としてあるだろうと思います。

疎外、自然の破壊、人間の差別を生み出すものであることは、今や明らかです。やはり、そういう近代的生産力体系を解体・再編し、それを越えていく民衆の、いわば自力更生的な新しい質の生産力体系と生活様式と欲求を創造していくという、対抗軸の立て方が必要である。これが左、つまり共産主義とは何かを問う時の大きな基準としてあるだろうと思います。

三つ目は、そういう近代的な生産力にしてもそうでありませんが、そもそも自然なり人間なりを管理と操作と支配の対象としてだけ見なすような知のあり方、つまり、近代合理主義的な知のあり方に対して我々がどういう態度をとるのか。それは否定されるというよりも、止揚されなければならないというのが正確な言い方だと思いますけれども、やはり、労働者・農民が、自分達の生産と生活の場で闘いを通じて獲得してくる、いわば経験の中から育ってくる知、あるいはその中でなされる教育・文化の形成、そういうものをもって近代合理主義的な知のあり方を越えていくことを明確にしなければならぬ。こういう対抗軸が、今、左の基準として明確に問われて来ている。そういう意味での左の本身を、つまり現代社会主義をふくめて、資本主義近代の総体をくつがえす共産主義の本身を今、我々が明らかにする必要がある。詳しい事につきましては「共産主義者の連合に向けての討論の呼びかけ」を出して、その中でいくつか問題提起しておりますので、ぜひとも御検討と批判をお願いしたいと思いますが、最後に何点か申し上げておきます。

私は多少抽象的に、現存する近代的な生産力体系を新しい社会形成の基礎として引き継ぐのかどうか、この問題に明確に答える事が今日における左であるかどうかを決するひとつの基準であると申しあげた訳ですが、これは必ずしも抽象的なレベルでの議論ではないと考えています。これは、現在の世界的危機の深まりの中で、具体的に切実に解決を迫られている問題になっている。第三世界において近代的生産力体系を導入してきた工業化、開発路線は、詳しく論ずるまでもなく現代社会主義における多国籍企業と結びついた近代化・工業路線も、ソ連圏全体で八〇〇億ドルから九〇〇億ドルと

言われている巨額の対外債務をかかえて、借金が払えない破産状態におちいつている。そしてヤルゼルスキ軍政は、労働忌避禁止法なる法律を作って、かつてのソ連の強制収容所と同じであります。労働者を強制キャンプに連れ込んで労働させる。軍政は強制労働をポーランドの労働者に強いながら、何とか借金を払おうとしている。あるいは先程、いいたさんからロシアの例が出されましたが、ポーランドにおいてもやはり、軍政は農民が持っている穀物を強制的に徴発する、そういう形で借金を支払わなければならない。そういう破産状況が来ている。それは、一部の人がいうように経済の管理システムのまずさからだけ来ているような危機ではない。近代的生産力体系を導入した工業化路線そのものの帰結であります。

そして第三世界周辺部、あるいは現存社会主義だけではなくて、今まさに、中枢部の資本主義世界を長期大不況が覆って来ている。一体この危機は、何によって突破をしようのかという事が問われていると思います。つまり従来のケインズ主義的な経済政策・成長路線によって、この危機は救えないという事は、すでにブルジョアジの内部から言われている。これが現在の「小さな政府」を標榜する行革・臨調路線として現われている。これは日本だけではなく、レーガン・サッチャーの路線として先行的に出現した訳ですが、そ

れではケインズ主義に替って、民間活力を増大させ、いわば市場メカニズムを有効に活用するようないわゆる供給の経済学、あるいはマネタリズムによって危機は突破しうるのだろうか。私は、ケインズ主義に代表される現代社会主義は単に資本の利潤の論理で動くだけではなくて、いかにして労働者階級を体制の中に統合するのかがこの観点から、組織された予防革命的な体制としてあると思うのです。福祉国家的な人民統合の路線を捨てて階級対立の激化をよびおこすレーガンの路線は、早晩行き詰まる。したがって、そういう意味合いにおいて、現代資本主義は、確かに前にも進めず後にも戻れないような袋小路にはまっています。鈴木が、野たれ死にしたことに見られますように、現在、ブルジョア階級は危機を突破する有効な方策を持っていない、ひたすら民衆が沈黙し現状維持の保身的態度をとり続けることをあてにしていると思うのです。そこで、人民は何をもって積極的に対決していくのかということが問われる。やはり、簡単な基準ではありませんけれども、私は第三世界の民衆と共に生き、かつ闘って行けるような自力更生的な社会のあり方を、大胆に前に出さなければならぬ。第三世界の収奪に寄生した資源浪費型の近代的生産力と生活様式を変革し、自力更生型の生産と生活を創り出す以外には、我々はもう生きられないんだということを、今明瞭に言う必要がある。その事は、世界のいずれの国においても、とりわけ第三世界やポーランドでも明瞭になって来ている選択です。ですから、工業化路線を軸にした国家・テクノクラート主導型の、これまでの生産のあり方・社会体制のあり方は、事実によってもはや破産した。そのところを我々にははっきり言いさるべきではないだろうか。したがって近代的な生産力に対してどういう態度を

とるのかという問題は、一見抽象的な理論問題のようであって、実は今日のブルジョア階級が陥っている袋小路、世界的な危機の到来に対して、民衆の側がいかなる解答を出すのかという問題として、具体的に選択が突きつけられている問題であると思っています。

二点目に、私は先ほど、七〇年代の闘いを清算するのではなく、それぞれの闘いを総括して、そこから革命の展望をしばらく出さねばならないということを示した訳ですが、簡単に言いまして、やはり人民自身が主人公となる革命にとっては、私は民衆にとっての「根拠地」が必要であると思います。根拠地の形成という問題を、やはり革命の全過程にとっても欠くことのできない問題として立てる必要がある。現実の運動において、私達を悩ます大きな課題は、各々の個別の職場での反乱、あるいは反合闘争、あるいは地域における反闘争、そういう個別具体的な闘いと全人民的なテーマである安保、あるいは反核、あるいは行革をめぐって、現存の国家あるいは政府に対決する全国的な政治闘争を、どういふ関係で展開するのかという問題です。全国的な政治闘争と各々の職場、地域における個別具体的な抵抗、闘争、反乱とがなかなか有機的に結びつかないという困難です。しかも、個別具体的な闘いの中にも人民の新しい生き方を例示する普遍的解放の芽があるわけですから、ともすれば、どちらを重視するかという二者択一と引き裂かれを、我々は突きつけられてきた。これはやはり、日本のような「高度」資本主義国において、階級闘争が引き受けなければならぬ困難な点であると私は思います。そういう階級闘争の特有の構造を前提にして、実は党形成の問題が論じられる。ですから一方で、各々の個別の職場・地域における大衆闘争における前衛的役割を果たす政

治サークル、あるいは政治集団というところで党がイメージされる。他方では、そういう個別の闘争と無関係に、全国的な政治闘争を組織する政治集団として党がイメージされる。党のイメージ自身も、個別闘争と全国的な政治闘争との肉離れの状況に規定されて二元化される。それでは一体、その引き裂れをどのように克服し統一していくのか。私はこれが唯一の統一の方式であるとは申し上げませんが、固定化したくないと思いますが、私達の場合は三里塚の三・二六闘争を軸にして三里塚闘争に全力を傾注してきたことを通じて、やはり全国政治と個別闘争との肉離れ状況を越えていくテコとして、ある全国的な普遍性を具体的な闘いの中に孕む民衆闘争のあり方としての根拠地の形成を主張したいわけです。闘争・生産・生活の一体性を獲得し、国家権力と対抗する最前線として全国政治を形づくりながら、同時にその個別具体性の姿において人民の新しい生き方と社会形成の原理を例示するものとしての根拠地。そこに、普遍性と個別性との生きた統一を見いだし、党の新しいあり方を探ってきたわけです。

それから三点目は、革命の主体をどのようにとらえるのかという問題です。結論的に言いますと、私は先ほど申し上げましたような、生産手段の所有関係に規定された経済的な諸階級、例えば労働者階級、農民階級、小ブルジョア階級というような経済的な諸階級によって規定された集団の一体どれが革命の主体たりうるかという問題の立て方は、生産的ではないと思います。やはり、マルクス主義における階級形成の非常に大事な点は、あるがままの階級が闘争を通じて自己変革し、独自の自己表現様式と独自の自己組織化の様式をわがものとすることによって、解放をめざす自立的な主体へと転化

するということの方にあると考えています。いわば、相互変革的な関係性として革命主体は生成するのであって、先験的に革命主体が存在するのではない。そういう点で考えて見ますと、各々の個別の利害・個別の物質的利害を越えたところで結び合い、相互に変革し合い、自分に欠けているものを相手の中に見い出し合っていくような闘争の中で形成される、諸階級の結合としての革命主体。そういうものとして、革命の主体を立てなければならぬと考えています。そして、そういう諸階級・諸集団の相互変革的な結合の結び目として、私は党的主体の問題が出て来るだろうと思う訳です。ですから、革命主体の形成は自分達の職場や地域において、自分達に固有の生産と生活と闘争、あるいは労働と生活と闘争の三つの要素を含んだ自立した共同性を形づくるといふ契機と、それから個別の利害を越えて普遍的に連帯していくという階級的な契機をふたつながらはらむ。すなわち、自立した「共同体」的な結合の契機と、階級的な普遍的連帯への志向という二つの契機を内に孕んだ人民的主体のあり様、あるいは主体形成の展望を我々としては目指さなければならぬのではないかと考えています。

という事で、もう時間が来ました。最初の問題提起としては、我々が目指す党的な主体がどういふ革命のイメージとの関係で、あるいはどういふ新しい水準において立てられねばならないのかという事につきまして申し上げました。討論を進展させるといふ意味で、やや論争的な出し方になったと思いますが、その点については御了解願いたいと思います。以上で終わります。

今なぜ共産主義者の 統一協議会なのか

生田 あい

今日のパネルディスカッションを企画された皆さんに、私はまず敬意を表明し、発言の機会をあたえられたことにお礼をのべたい。私は、本年一月我々がよびかけた「共産主義者の統一協議会」をもって新しい党を組織していかうと、そういう試みの一つとして、九州の中から全国に先がけて最初にこうしたノロシが上がったことに對して大いに敬意を表し、是非、これを成しとげていただきたいと燃えるような同志的連帯感をもって、ここへ参加したことを申し上げたいと思います。東京政治の中にとびかかっておりました様々な中傷にも打ち勝ちましてといったらオーバーですが、ともかくもかけつけました。私は、是非ともこのパネルディスカッションを通して、皆さんと団結したい。そして日本に新しい、いわゆる世界革命の一つの有機的な構成体であるところの日本革命の実現のため、今パネラーの皆さんがおっしゃった様々な新しい社会主義、新しいマルクス主義の再生を真に実現のできるような新しい革命党の土台石を九州及び全国に一つ一つ作っていかうじゃないかということをは

非皆さんに呼びかけたい。ここでそうした確認がなされて、これから一つの新しい日本の革命運動、共産主義運動の流れが九州から変わるといふことを是非期待して私の問題提起をさせていたかと思ひます。個人的に言えば、私のオフクロさんが北九州の出身であります。また、私には、こうした公然とした集会の中に登場することも最近では、初めてです。それから「共産主義者の統一協議会」問題をこの一月に提案してから公然とした集いで提起をさせていたのだのも初めてです。そういう意味で感慨の深いものがあります。今日は企画委員会の皆さんの様々な努力、様々な問題があった様ですけれども、そうしたものをどうやってこれから止揚していかうのかという様な問題も含めて私が、何らかの役に立つならば、非常に幸いだと思ひます。先ほど樋口さんなりそれからいいだもさんなりから世界的な危機の状況、主体的な危機が非常に大きな問題になってきているということについては私は全く賛成です。くどくどと同

じ情勢分析をする必要はないと思ひますので、一言でいえば全世界的な規模でいわゆる戦争と革命の新しい時代が始まっていると思ひます。そういう意味で今までの帝国主義の相対的安定期の平和な、いわゆる55年体制と言われた、眠りこんでいた時代から我々の今生きようとしているこの80年代、21世紀へ向う時代は人類史的ないわゆる核戦争等々の問題も含む新しい帝国主義戦争という危険なそういう意味では、新しい帝国主義戦争の危険を真に止揚していかう様な、そういう社会主義革命の激突の時代に我々が今、さしかかっているんだということ。その新しい時代の中で我々がどういう主体として自らを再生していくのかという問題が文字通り我々の革命運動の再生といわゆる党の建設の問題として浮び上がってくるんだということ。とがたいたいパネラーの共通する問題意識です。私もそういうことです。基本的にそういう意味で一つの時代の流れが大きな形で、我々主体を動かしながら、ある党派、それからグループ、それから個人、老若男女を問わず、我々全てのものの中に再生と崩壊、あるいは新しいものと古いもの、そして革命的な要素と反革命的な要素、そして従来の価値観に新しい価値観の芽ばえが、共に相剋しいながら現在、依然としてまだ共存しつつ、そしてどちらが勝つかと、そしてどちらの営為がどちらを越えていかうかということが、この戦争と革命の時代を制する。あるいは、労働者階級人民の革命闘争の勝利を準備するにあたり、重大な、その成否を決するものとなるように思ひます。そういう様な大きな歴史的転換の時代にさしかかっていることが、我々が今党の問題を考える時に重要な歴史の認識ではないのかというふうに思ひます。そういう意味で、我々が何故、共産主義者の統一協議会を今呼びかけるのかという問題も、文字通

り、そうした時代認識に基づいています。旧来我々がブンドの中でいくつか繰り返してきた統合の単なる延長線上に、あるいはブンドの再建で、いわゆる新しい時代を乗りきっていく様な革命党として考えていないと、そういう意味で、先ほど白川さんが若干問題提起として論争的に提起されましたけれども旧来の時代経過から言えば文字通り社共に変わりうる、そして単に変わるのではなくて、社共をも止揚しうる、そういう、革命党に自らをして旧来の新左翼そのものを飛躍させていかうという、呼びかけです。そこには、そうした新しい歴史の時代の転換の中で我々ははっきりと20数年間の新左翼の歴史が終ったという風に認識すべきではないかということが、前提としてあります。今日は、企画委員会の方から、統一協議会を提起するにあたって我々がブンドをどういう総括に基づきながらこの間の歴史を克服してそこに至っているのか、簡単な経過を教えてくださいたいということの要請がありました。確かに、九州でわれわれは、なじみがうすく、初めての方々も多いかと思ひます。それで、『われわれは何であり、どこから、どこへいかうとするのか』のパンフも受付にもってきてありますが、我々は別にブンドの売り込みをする気はありませんけれども、やはり、自らとは何物かを名乗るために、簡単な経過と、今日に至る問題意識、その上で我々の提唱する「統一協議会」に対するいくつかの問題の核心を提起していきたいと思ひます。ブンドが、共産党とは違って、いわゆる一九五八年の日本共産党から、いわゆるソ連社会主義の変質が、全世界に公然となった時期、ハンガリー事件や、あるいはポーランドのボズナム暴動とかの時期、——スターリン批判の嵐が吹き荒れていた——国内では、日本共産党の六全協、いわゆる修正主義への転

換の中で、新左翼のある種の口火を切って日本共産党から学生を中心にして分派し、日本共産党に変わる新しい革命党をめざして先程いっださんの話に出ましたマルクスの「共産主義者同盟」の名前をいただいて第一次ブンドが結成されたのです。詳しくは、あとでパ
ンフでもみていたゞくことにして、この第一次ブンドは、六十年安
保闘争では、全学連の指導権を握って、社会党、共産党、総評安保
共闘の最も戦闘的存在として闘ったのです。しかし、第一次ブンド
は、この六十年安保闘争の総括をめぐって分裂、崩壊し、一九六五
年に、第二次ブンドが関西ブンドを中心に再結集され作られていま
す。これはヴェトナム反戦闘争を契機に、七十安保闘争を、社会党、
共産党、総評の闘争放棄に対して、全国全共闘と反戦青年委を中心
に、革共同中核派と指導権を競いつつ闘ってきたことは、皆さんの
御存知のことです。私達は、直接的には、この第二次ブンドの組織
的系譜をひくわけです。第一次ブンドは第二次ブンドへひきつがれ
てきているわけであって、そういう意味では、ブンド20数年の歴史
をひきついでいきたいと思います。第二次ブンドが分裂
したのは、いわゆる先ほど共労が71年に分裂をしたというほんの少
し前69年です。先程もいきましたように、いわゆる60年安保闘争の
総括をめぐって第一次ブンドがわかれて崩壊し、そして今後は第二次
ブンドが60年代なかばにできて、いわゆる67年の10・8闘争から69
年の安保決戦まで、いわゆる自民党政府打倒に登りつめたあの69、
70年安保闘争の決戦をいわゆる革共同と共に、あるいは、様々な新
左翼の諸同志と共にブンドも指導部を形成して闘ってきたわけです。
第二次ブンドの分裂というのは、70年安保闘争が時の自民党政府打
倒にまで登りつめながらも実力闘争がブルジョワ国家権力、警察機

動隊に封じ込められていた時に、これをどう突破するのか、その戦
術・戦略をめぐって分裂した。これは、大きく三つの傾向に分裂し
ています。一つには、直ちにブルジョワ国家権力打倒の武装蜂起を
提起し、学生・全共闘運動に依拠してやろうとした赤軍派、一つに
は、これに反対して、この全共闘運動の延長上に社会革命を展望し
た部分、情況・叛旗などですね。また、一つは、丁度、中間派とい
われたのですが、党建設と労働運動を主張した部分、皆さん御存知
かもしれませんが、大阪中電のマッセンストライキに象徴される部
分、関西派といわれる部分ですね。これ以降、大分派闘争の時代に
入り、それぞれがテロリズムや経済主義、あるいは組織主義へ純化
していくのです。いわゆる73年、74年頃まで、暴力的形態をとりな
がら分裂縮少再生産をくりかえし、一時には二十何派にも分かれ、
その中には、ああした連合赤軍事件をも含んでいます。
こうしたことを我々は、ブンドの党的破産と認識してきました。
いまだにこれを見とめない分派もありますね。私達の再出発は、
なぜこんな破産がおこったのか、ここからです。我々は日本共産党
から最も早くにわかれて、そして日本共産党の民主革命という修正主
義の革命路線に対して、日帝打倒、ブルジョア独裁権力を打倒して、
プロレタリア独裁の樹立を堅持する社会主義革命路線とプロレタリ
ア国際主義、そして暴力革命というようないくつかのマルクスレー
ニン主義の原則を復権し、かかげて当時の大衆闘争の先頭に立ちな
がら闘い、結局は党をつくれないうで、基本的に四分五裂をしてしま
った。多くの同志達が海をこえて、あるいは権力に殺され、分派闘
争の中で死に、獄中に入りというような形で、最も精力的に革命的
に闘った。にもかかわらず破産してしまった。この痛苦な歴史、党

的破産の歴史的総括の中から私達の総括は開始したわけです。武装
蜂起に着手しようとした部分はね、社会主義革命の原動力を労働者
階級の階級闘争ではなく学生運動に求めて、テロリズムとなり、空
想共産主義に近くなった。労働運動に入った部分は、労働者階級の
階級闘争を経済闘争、民主主義闘争の戦闘化に切り縮め、社会主義
やプロ独を彼岸化させる傾向を強めたんです。私達の総括は、この
どちらも、一言でいえばブンドの路線に底深く溢れていた小ブル共
産主義の思想的根拠から生まれたと考えています。あるいは、日本
共産党を出てくる時に、日本共産党のもっている修正主義に反発す
るあまり、宇野経済学であるとか、黒田主体性唯物論であるとか、
あるいは、トロツキーの政治理論であるとか、様々な反スターリン
主義の思想政治理論に依拠してきた自分たちの思想的根拠そのもの
の破産なのではないかという総括をしたわけです。そして、その意
味でもう一度、我々の依拠すべき革命の主体、主人公とは誰なのか、
そして我々のめざすべき革命の基本的中心的戦場はどこなのか、そして
我々がめざすべき革命の性格及び我々の作るべき党の性格とは何なのかとい
う事を、一言でいえば日本革命の綱領・路線としてこれにもとづく戦術・組
織問題をめぐる全体の思想的点検にはいったわけです。

同時に70年代の初頭前後からはじまりました朝鮮人問題に対する
我々の思想的態度であるとか、あるいは女性、部落、あるいは障害
者等の解放運動というかたちで、様々な70年代の諸解放闘争、ある
いはもちろん三里塚闘争を契機とした、農民に対する態度、そん
うものが、各々の独自性をもちつつ、我々が目指すべきプロレタリ
ア共産主義革命のどのような不可欠の一環としてそれらを位置付け
共に闘わなければならないのか、どのような思想的な団結を闘いと

るべきかについて、いくつかの差別事件を通してわれわれに問われ
ていました。ブンド総括は様々な党内闘争の第一級の課題にこうし
たいまの諸問題があがっていたということもあって一層深められた
と思います。

そういう中で、我々はそれを真の意味でのマルクスレーニン主
義の原則的復権を思想的基礎にして、これを日本の現状の中に適応
していく共産主義と労働運動の結合の見地から、革命の主体を明確
に労働者階級に依拠する、労働者階級を主人公にした革命と党の建
設におくというようなことを、今から言えば、恥しい話ですけど
も、本当に学生や小ブル分子の一部の戦闘的分子のいわゆる突撃戦
で革命を切り開こうとしてきた、そういう意味での小ブル的な革命
性をプロレタリアートの革命性に依拠した新しい革命的労働党にブ
ンドを再生していこうではないかということが、いくつかのわかれ
た分派の中から、いくつかの契機を背景にしながら同時に始つたの
です。一つは赤軍の中から、それから労働運動に入っていたなか
から、あるいは、社会革命一般を目指していったなかから、いわゆ
る総括論議と、綱領・戦術・組織をそれによっておきなおしていく
という形で、今掲げているわれわれの綱領の基礎となるような綱領
草案を総括の中から闘いとして、そして組織を作り変えていく、い
わゆる当時、私たちは「党の革命」というふうに呼んでいました。
まさに「党の革命」がおこったのです。それぞれが「党の革命」を
通して、今度は分裂ではなくて「分裂から統合の時代へ」というこ
とを合言葉にして、第一次ブンドの先輩たちが目指したように日本共
産党に真に変わりうる党建設のため、「共産主義者の四分五裂に終止
符を打とう！」と呼びかけて今日の赫旗にいたるいくつかの統合が

70年代のちょうど半ばから、いま当時の四つの分派が一つにまとまっていますけれども、時期をあい前後しながら団結してきたのです。綱領の下での統合、すなわち、思想・路線上の一致の下での団結・統合ということが、私達のブンドのかつての戦術上や、人間関係上の結合がいかに階級闘争の波の高低にもろく分解したかをも対象化した、われわれの総括の表現です。かつその思想・路線というのは決して抽象的なものではなくて、我々が生き、泣いて、悩んで、どうやって生きるかというようなことをそれぞれのその時期に問われた部落問題であれ、女性問題であれ、労働運動であれ、武装闘争であれ、そういうようなものを契機にしてそれぞれがつかんだ部分が、それを思想的に、一般的な個別の利害ではなくて、共通する労働者階級解放の思想として、綱領の基礎にすえた一致点を闘い取ってきたことです。

そうした党内闘争及び分派闘争の総括と新しい党への再生の中から、私なども生れてきたわけです。非常に残念なことに、いまだ革命的左翼のどの指導部にも殆んど女性はいなくて、また幹部としても、様々な女性差別もあって中々成長しにくいですね。そういう意味で、私がこうしてやっておれて、かつこれを是としているということは、私達の70年代の「党の革命」の結果でもあると思います。それは、指導部の質、幹部の質、あるいは組織の基礎としての工場細胞の位置、あるいは党内民主主義など、これは新しい党の論争点ともなるものですが、こうしたこと一つ一つ置き直してきました。

それは、労働者幹部が政治幹部になっていく、労働者階級自身が自ら党の主人公になるなど旧来のスターリン的な修正主義的な官僚主義の問題を物質的に党内で掃いていくシステムをいかに作りだ

っていくならば、必ずなぐりあった分派、我々の中ではお互いに殺しあうところまでいった分派が今は共にやっております。そのことを我々が70年代で実行にうつしてきたことが、その綱領的総括をもふくめて新左翼の世界の中にはつきりと示した一つの試金石ではなからうかと思っております。

今後これまでの分散と混迷という時代が一方で続きながら、他方で全国の労働者階級、人民・共産主義者の中からこういうパネルディスカッションができるような新しい胎動というんですか、そうした団結の気運が生れ、又、今我々がかかえているマルクス主義の危機なり、労働運動の再生なり等々の問題が、いわゆる一つの戦線的党になり下がっている現在の新左翼の個別的部分を算術的に総和した形ではそれを越える事が出来ないという現状の中では、基本的に共に共同作業としてそれをすりあわせて互いを止揚していくような過程でしか新しい革命党を創造しえないのではないかと我々の認識があるわけです。

我々はこの82年の正月にこうしたブンドの歴史をふまえて、統合の可能性というものを示しながら「共産主義者の統一協議会」を呼びかけたわけです。

もしそれが浸透し、あるいは共感や支持をえられ、我々の提起したことの意味があるとしたら、そうした70年代の経験なり、実績が全国の労働者なり、そうした部分に受け入れられていった根拠としてあるのではないかと思うわけです。

これは全てではありません。それはむしろ歴史的な時代の流れと転換、それからそれぞれの新左翼諸党派の指導者、あるいは全国の同志たち及び日本の労働者階級の成熟というのか、そうしないこと

していくのか、そういう党内改革等々を模索しながら、我々としては昨年81年の9月に基本的に第二次ブンドの大きな三つの流れー右と左と中間の流れのそれぞれの総括をした部分の団結統合をもって第二次ブンドの党内分派闘争に一応の結着をつけたと思っています。もちろんブンドの分派の中には、まだ五、六つぐらいですけれども、機関紙も出してというブンドがあります。ブンドの破産をみとめず総括をそうした形でしないで、いわゆるブンド主義の再建と再興というような形で、小ブル急進主義のまま基本的にはいるブンドの分派とは我々とは統合できないでした。もちろんこれからも統合を願っていくつもりですけれど。

大変長くなりましたが、そういう過程があったということをお我々の歴史として踏えていただきたいと思います。これは一言でいえば、今から見れば一つの前史としてささやかな一歩にすぎませんけれども、この中の教訓としては、共産党の総括だとか等々が先ほど白川さんから冒頭に言われましたけれども、一つ一つの共産主義者が共に闘いの中で分裂し、分派していく問題というのは明らかに思想的根拠なり、路線的な問題をはらんでいるわけであって、そういうものをけっしてあいまいにしないで、そうしてかつそのことにはらまれていく——これはブンドもそうでしたけれど——たえず人間関係、あるいは当面する戦術、あるいは等々の中に逃げこんだりしたりすることを我々は排してやってきたということがあります。

お互いのあいまいさなり、意見の違いの中に、どういう思想的根拠があって、どういう路線の違いがあるかってことを鮮明にしなから、そしてそのすりあわせをしなからその路線の違いと思想的違いを止揚させていくようなそういう方法をいわゆる綱領的団結をつく

にはどうしようもないところまで来てしまっていること。そうして一方の上層、いわゆる支配階級のもうどうにもならなくなってきた、そうした危機的な状況との相互関係の中で、新しい党を生む可能性と条件がやっと生まれつつある。これが我が提が、一つの提案として成立する物質的根拠と可能性であり、今の歴史的な時代のまさに要請だと考えます。

こうして一つの新しいささやかな試みを自ら踏えた上で、共闘ができるぞと、あるいは別れていた同志も団結できるぞと、いうことの可能性を示しながら、新しい党建設を呼びかけることは、ブンドの破産を破産として認めて、この十数年間栄光のブンドから言えば地を這うような、悲惨な時期を過してきたわけですから、そういう意味で我々の歴史の一つの位置であり、かつ、大きな喜びでもあります。

そういうことを前提にして、我々は「共産主義者の統一協議会」を呼びかけてきました。こちらに話を移したいと思います。

これは、はっきり冒頭に言いますと、党派の方々より我々が歩いた範囲では先ほど横山さんがおっしゃった様に、無党派の方というのをどういう風に、そういう風にわけるのがいいかどうかかわかりませんけれども、いわゆる労働運動の最先頭に立っておられて、苦勞されている方々、そして今の党派、新左翼、もちろん社共は言うにはおおよぼ、そういうものにヘキエキしている人々たちから、非常に大きな共感と支持とを受けました。

むしろ一月や二月の時に我々が持ってきた時には、こういう風にいわれました。新左翼の党派の方々には、「ずいぶんどでかいことになり、すごいこと考えたじゃないか」と。「だれどこれはや

れないよ」と。「ちょっと生田さん大それたことしすぎるんじゃないの」と。

そういう意味でもあまりにもデッカすぎる。もちろんこれはできちゃったわけではないんですから、これからどうなるかわかりませんが、そういう風に言われました。

ただど私はやっぱりそういった先ほどの労働運動の最先頭で旧来の党にもうヘキエキしながら、それでも党が必要だという風にはつきりとおっしゃって、ほんとにこれができるんだっただけ支持するといった方々の志というか、情熱というのか、そして日本労働者階級自身に対する深い信頼というのか、そういうものに徹底して依拠して我々は新しい党を作りうるかと春の頃から確信を持ちながら推進してきたわけです。

結論的に言えば、今、そうしたまだ少数ですが、賛同された人々で「共産主義者の統一協議会」の予備的な準備討議が生まれつつあります。

これを本物にするか、それが偽物の——ある人に言わせれば新左翼の、二十何番目の党になさしめるのかどうかというのは、大言壮語を許していたらければこれは文字通り、我々共産主義者と労働者、人民全体のこれ迄の闘いのある種の総括を賭けた営為にかかるとは思わないかという風に私は思う訳ですけれども、このことに賭けてやる以外に革命的左翼の再生の道はないという風に思っています。もちろん、私達は自力で闘い、行動することをいささかも恐れていないし、それを強めようとしてきました。

では、「統一協議会」の核心問題は何か？、すでに提起している文章を読まれた方は御存知かも知りませんが、社会主義論の問題

が70年代にやってきたように、もっと大規模な党の革命だと思っています。それは革命だといっているいかもわかりません。

旧来の革命運動のあり方と党のあり方を革命していくそのいみで「一つの革命」とあるという風に、決してこれはアジェーションではなくて申し上げたい。

何故かかっていけば、旧来の新左翼の党が単に、いくつか集まったりして総和したり連合したり、あるいは寄木細工のようになって、本物の新しい党が生まれるという風には思いません。

いま、日本の共産主義運動が、この歴史的時代の中で直面している困難は、それ程小さく、容易なものではないし、また、日本労働者階級の熱望している党は、数千万のプロレタリアートの指導政党なのです。ただ、革命的左翼を離れて、天上から新しい党が降ってくると思わない。とすれば、われわれ革命的左翼の「病」ともいえるべき弱点を主体的に切開し、共同して改造しあうしかない。

それは我々も含めて、いくつかの官僚主義や、いくつかのセクト主義、いくつかの思想的小ブル性などを残している問題、あるいは、日本階級闘争の全体を担うのでなく、それぞれ部分性をしか各党派が表現しえないことなどの問題として、これは、日本共産主義運動の長い混沌と分散に根拠があると思うのですが、だから、われわれがめざすことからいえば、この第二点目の核心問題は、共産主義党派と同時に、対象を無党派の労働者サークル・個人等にすえきって

これまでと異ってはじめてよびかけたところに大きな意味があるということ。それは、これまでの党派がかかえもっているセクト主義や官僚主義や様々な体質も含め、あるいは様々な限界性を、日本労働者階級の階級闘争の第一線で闘って、そこにつきあたっている

だとか、総括の問題だとか等々については、後で論議の時に私の意見は述べたいと思います。協議会提案の味噌というか、核心問題というのには、まず第一点は、先ほど白川さんもふれたように単なる政治共闘だとか、旧来の統一戦線の党であるとか、あるいは党派のいわゆるそういう意味でいったら単なる連合の党ではないということ。

これは、いろいろと意見のあるところで、十分討論を闘わせる必要があると思います。私達流の表現をとれば、社共に代り、かつ、それにとどまらず、新左翼の歴史的時代の終焉を踏えて、この新旧左翼を止揚しうる全国単一の革命的労働者階級の創建を目的としようということ。その方法は、全国の共産主義者の思想的な統一を要しようということ。そのことは、先程からいわれている互いの総括をすりあわせながら、世界と日本で、今日の共産主義運動が陥っている危機的状況を突破しうる思想・理論的水準を共同の作業として作りながら、日本の労働者階級解放の旗印となる綱領に煮つめあげる。その綱領の下で各組織・グループ・個人を統一していく、団結することだと思えます。ここが先程いった政治共闘や、統一戦線の組織、あるいは、連合党とは根本的に異なると思う。もちろん「協議会」それ自体は、この共同作業それ自体を志を同じくする人々で、組織していくものであるから、ただちに各組織・グループを解散したりするものではないし、あるいは、協議会が現実の階級闘争の中で、共に闘い、そこで実践することを否定するものではないと思えますが、これが非常に前提的に重要なことだと考えます。第一点目はこれです。

それから二点目には、当然なことに、基本的に統一協議会が我々の意味での無党派の方々等々の党を指向する。そういう志ざしある全国の共産主義者が、一丸となってそうした党派の限界をも、先程うどん粉の話が出ましたけど、そういううどん粉をちりばめながら、やっぱり本物のソバ粉に練り上げて、叩いて本物のソバにするといううような作業が媒介しない限り、大規模な全国の党派の止揚ということがありえないというふうにふんでいます。

これは決して解党主義的に言っているわけでは全然ありません。むしろ、この70年代に生き残ってきた党派に私は敬意を払っており、だからこそ党派が小さく自足してはならず、これらの党派がこの協議会の中では積極的なそれぞれの役割を果すべきだと思っております。そして抽象的な言い方になりますけれども、社会主義ってというのは、いわゆる労働者階級・人民の大衆的な創造物であると思うわけで、そうした社会主義をめざす党も、この時代というのは、そういう大衆的な創造物でなければならぬと思えます。

これは非常にきれいな言い方ですけれども、我々自身の前史、くぐってきた過程から言っても、ほぼそうした領域に入らないことは、今日の世界と日本の飛躍の中で我々自身が飛躍していく、そういう革命家に育っていくことはほぼ不可能である。ほぼ、いくつかの重要な人材がいわゆる党派に所属をしないで、全国に志を持ちながら、どの党派にも結集しないで散っています。日本の労働者階級・人民が戦前・戦後の共産主義運動の歴史の中でつくり上げてきた、貴重な蓄積がそうした人々の中にもあるわけであって、そういうものをたぐりよせていける様な、そしてかつ先程から問題になっている日本の労働者が陥っている帝国主義の支配の中で決起し

えない様なそういう思想的、イデオロギー状況を真に突破しえる様な思想的内実を手さぐりで作り出していくということの一つの共同作業としてやらない限りどうにもならんと思うものです。その中には当然、熾烈な論争とか、いくつかの対立点を止揚していくような作風、それからそうした模索がどういう形態かは、私はまだわかりませんが。

だけれども、我々がいくつかやってきた統合の中で、ささやかではあるがいくつかの教訓を見つけています。

そういうものを持ちよりながら新しい革命党の作風を、党を創造していく過程で我々が自ら作り出していくということによって、日本の労働者階級自らが党の主人公として、自らの党を組織していくような触媒というのか、媒介に、我々今ある党派が自らを止揚していくべきではないのかというふうに私は思います。

すなわち、一言でいえば、全国の労働者階級一人一人が、党建設の主人公となるような新しい建党運動として、共産主義者の統一協議会を提起をしています。それが二点目です。

三点目の問題は、文字通り社会主義の再生にかかわる問題です。これは、先程いいださんがいくつかの点をのべられていたので、私は議論の中で私の意見をいわせていたことにします。ただ、われわれが新しい党をつくるということは、いかなる旗をかかげるのか、いかなる思想的統一なのかという意味で、マルクス・レーニン主義の世界史的危機が叫ばれ、「マルクス葬送派」すら生れている中で、この創造的発展を思想・路線に打ち固めることが重要になります。ただ、ここで、われわれの立場をはっきりさせておけば、いわゆる今日のソ連に代表される「国有化社会主義論」とは明確に一

線を画しています。ポーランドの支配階級がやっているものも基本的には同じですね。かってブンドは、生産手段の私的所有を社会的所有に転化する問題を、単に「国家形態」をもって社会主義とする誤りをしてきました。それは、トロツキーの「労働者国家論」や、日共の「生成期の社会主義論」もほとんど同じ根っこがあると思うのです。

そうした点を思想的・路線的に総括してきたわけです。もちろん、社会主義革命の中でプロレタリア階級独裁を条件にして、生産手段の私的所有を社会的所有に変える点に、労働者階級の経済的解放の重大な基礎がある事をいさかも否定しない。ただ先程も自主管理という言葉が出ましたが、われわれの考えをいえば、「労働者統制・労働者管理」という内実そのものが、生産と分配の面でいかに実現されるかあるいはプロレタリア民主主義がいかに実現されているか、もったいば、全社会的規模での社会革命を労働者階級を主人公としていかに実現しうるか。ソ連の社会主義が変質して、「社会帝国主義」となっている現実、ポーランドの現実、いままた中国の問題として大切なことだと思います。こうした点については、それぞれの総括と意見があるので「協議会」は、熾烈な理論闘争も辞さず、この世界的なみでの社会主義の再生の問題や他政治総路線にかかわる問題に共同でとりくむ必要があります。これが三点目ですね。

四点目の問題は、「協議会」をもって新しい革命党をつくっていくことは、一朝にしてなるものではありません。そしてかつ同時にテールブルについてなら直ちに組織であればそれを解散することでもありません。情勢からすれば出来るだけ早くということが望まれますが、願望だけではできません。

大革命として、取り組んでいくことを呼びかけて、私の方の提案を終わりたいと思います。以上です。(拍手)

そういう意味では、私たちは基本的に協議会の呼びかけにも書いた様に一定の時期をかけて、基本的な協議会テーブルの中で、現実の階級闘争の最前線でも共同して闘い一定の役割を共同して果していながらそうしてそこで互いにこの階級闘争の試練・ふるいにかけられて、闘いの中で真紅の団結と信頼を作りだしながら、実践と結びつけた綱領論争を組織し、綱領上の統一にもとづく組織統一をつくりだしていく、新しい党を生みだしていくことだと思っております。この作業に、ただちに着手すべきであるということが今年の一月の提案です。ちょっと時間が過ぎましたので、もう少しいろいろ言いたいところでは、論議の中で内容上は言わせていただきますけれども、そうした趣旨として、私たちは協議会の提起をしてみました。是非、このパネルディスカッションの成果として、我々に結集をし、共に協議会を推進する。これはなによりも皆さん一人一人の事業なんだというところ、我々が今ある古いものと新しいもの、崩壊と再生、これは我々の組織から全国の全てのところをつつみこんで、今この過渡期にいたっています。

それは、ブルジョワジーにもふるいがかかっているわけですから、我々自身の試練の問題を、唯一突出できる、そして先程樋口さんがおっしゃったように、それを単なる党の建設一般ではなくて、党と労働運動、それから今、大きな政治的統一戦線が作り上げられる、一つの気運が生まれはじめてます。

そういうようなものと、大きく運動をさせながら、一つの新しい歴史の流れを、新しい時代に向かってつくりだしていくような一つの運動として私は「統一協議会」運動を建党運動として、かつ今ここに存在する党と共産主義者個人の文字通り、自己変革、自己改造、

旗 せつき 赫

共産主義者同盟中央機関紙

発行所 赤路社

編集・発行人 北沢 晋
東京都大田区大森北 1-13-11
電話 03(766)4729
郵便振替 東京7-86947

関西赤路社 大阪市福島区大開
1-19-13副島ビル
電話 06(462)7030

毎月10日、25日発行
1980年2月28日
第3種郵便物認可

〈定期購読料〉

1部・22回
手渡し 3000円
開封郵送 3500円
密封郵送 4000円

休憩後の再開を妨害しシンポ ジウムの混乱をはかるプロ革 派のヤジ暴言

プロ革代表A 集会についての意見提起をします。

司会 あらかじめ申し上げましたように文章で……（と一方的な発言については議事進行のさまたげになると制止の発言をするが、プロ革代表Aの発言は司会の指示に関係なく早くちに発言が続く）
— 集会についての意見ということで司会の方にも意見提起をしているんですけども、今日ピラをお渡ししたことを含めて党の方から説明したいという趣旨なんです、集会前に渡したピラと白川氏が発言の中で明らかにしたことについて簡単に発言します。私達としてはシンポジウムの成功をめざして当初は企画委員会に参加しておりました。その後、この実質的なシンポジウムの主催者である共産主義労働者党……— 発言を勝手にするな— 共産主義労働者党全国協議会の名において……

司会 ちょっと待って下さい。そんな形で全員が自由に発言するとシンポジウムができません。よろしいですか……（聴取不可能。この間もプロ革代表の発言は一方的に続く。併しテープの聴取不可能）
会場 司会の指示に従って下さい。
会場 議事進行、進行。

プロ革B 冗談じゃないよ。何いってるんだよ！
プロ革C そんなに（聴取不可能）……
プロ革B 何が連合だよ……シンポジウムなんてねえよ！

ようが、その問題をこの会場で討論しようというのは集会の進行にとってはゆゆしきことであり、進行の妨げになると思いますので、その点を考えていただいで、パネラーにも失礼になることではありませんし、集会参加者にも失礼です。司会の進行に御協力をお願いいたします。

プロ革B 何が党の連合だ。冗談じゃないよ（プロ革派一斉にヤジ）
プロ革C ちょっと質問ですけどね、それは……
会場 やめて下さい
会場 集会が先に進まないじゃないですか。
— プロ革派のヤジで会場騒然 —

会場 司会の進行に従って下さい。
会場 集会をつぶしにきたのか。
— プロ革Cしゃべり続けるが聴取不可能 —
司会 私は集会が始まる前に申しましたが、時間の関係上すべての議論を全面的にする……

プロ革C すりかえるな。
会場 司会がしゃべっているでしょ。発言控えて下さいよ。先に進めないじゃないですか。— なにがすりかえだ —
— プロ革一斉にヤジ —
プロ革 脱党しておいてなにごとだ。
会場 何をいってるの。出てもらうよ！

プロ革 事実を事実として— 会場、何が事実だ—
司会 指示に従わないで発言するのはルール違反ですから認めるわけにはいきませんが、それにしても皆さんの発言は、まず今日の集会に対する基本的評価について明確にしたうえで発言しないと、発

プロ革C 今後のためもある。発言をさせる！
会場 党派問題を大衆組織にもちこむな！ シンポジウムをつぶす気ですか！— プロ革代表の発言は、抗議とヤジの中で続く—
司会 指示に従って下さい。— 異議なし —
プロ革C なにをいってるんだ……（会場では、プロ革派によるピラが会場整理の係員の注意にもかかわらず一方的にまかれる）
会場 集会を妨害するような発言はやめて下さい。
プロ革代表A……私達ちは、企画委員会から脱退せざるをえなくなるという事態が生じ現在に至っていることをまず皆さんに……で、シンポジウムの当初の趣旨が、共産主義者の連合、これまでに闘ってきた人民、共産主義者が連合して共に闘うという趣旨からして、この集会自体は……（聴取不可能）……ですけれども、その主催者が分裂主義者であるということを、私たちとしては集会参加者の皆さんに包みかくさず明らかにするべきであるし、又、そのことを通して、このことに対してどういう評価、見解、政治的立場をとるのかということから、今後の共産主義者の大きな連合をめざす動きに……分裂・離党によって（ヤジ・抗議）……

会場 シンポジウムに反対し、一方的に企画委員会をやめておいて……（聴取不可能）……それがプロ革か……すわれ、すわれ—（会場騒然となり、聴取不可能）
司会 私たち企画委員会としては、本日の集会において、各々のパネラーの方々の御意見を全体化した。その上で成功させたいという考えで臨んでおります。企画委員会内部で発生した諸問題については、党派内部の問題を含めて、各々に評価・意見もあるでし

言そのものが集会破壊になるでしょうが（会場拍手。異議なし、反対する人は出て行けばいいんだ）
プロ革B 客観的事実を明らかにしろ、と言ってるんだ。
会場 事実は集会破壊行為だ……論争はあとだ！
会場 どういう主体として集会にきているのだ！
プロ革 真実を真実として言えと、言ってるんだ。
会場 なにが真実や。今、あんたらのやることが全ての真実やんか。発言する人がシンポの意義については評価をせんでいて、なにが事実で、真実や、私ら大阪から来てるんよ！ パネラーの話しを聞きに来たんや、集会に反対なら出ていけばいいんや！（会場、異議なしの声、多数）
司会 もう一度お願い致します。シンポジウムを成功させるために司会の進行に御協力下さい。御協力を御願ひします。

会場 異議なし。
プロ革C 発言を封じておいて、なにが討論だ。（会場 ヤジ）
会場 何を言っているんだ。白川が参加して君らの主張をしているじゃないか、それもシンポジウムに反対しておいて参加しているんだ……（ヤジ、会場騒然）
会場 お前ら集会をつぶしにきたのか
司会 この集会の進行と形式については、あらかじめ私の方から提案して、パネラーの方々全員と確認したうえで進めているわけですが、不規則発言は失礼でしょうが、もっと冷静にやって下さい。論争は論争。シンポはシンポでしょうが。

会場 異議なし！— そうだ！
プロ革B どっちが失礼だよ！ 司会を罷免するよ。

会場 何をむちゃくちゃ：：集会進行!

会場 お前たちが失礼じゃないか。

プロ革C 企画委員会として、質問に答えられるのか。答えられないのか。答えるなら答えて下さい。私たちは：：：。

——会場、騒然。プロ革ヤジ——

司会 それは本日の問題ではありませんので：：：。

プロ革B いろんな問題があると言ったやないか。いろんな問題についてみればいいじゃないかよ!

司会 集会自身を成功させたいと願っております。皆さんの御協力を御願いたします。

プロ革B いろんな問題とはなんだよ。

司会 司会に御協力下さい。——異議なし!——

プロ革B いろんな問題とはなんだよ。

会場 なにを云っているんだ。静かにしろ! なんぞ知らんが、それが明らかにならないと前に進めんのか?!

会場 お前ら何しにきたんか、さわぐなら出ろよ!

会場 外でもらたらええんよ! 今日は合流の問題の話聞きにきてるんよ! 外でして、外で!

司会 何度も申し上げておりますが、企画委員会がこの集会を主催してはいます。闘う人々の大合流を進めるものです。会場の皆さんの御協力で集会を成功させて下さい。集会の進行に御協力下さることを御願致します。——よし! よし! 議事進行!——

プロ革B ……いってみるよ!

会場 いいかげんにしなさいよ! 司会の議事進行に協力するしかないでしょうが!

会場 だから参加したくない人は帰ったらいいだ。帰れよ!

司会 よろしいでしょうか。私の方で二点にわたって整理しております。一つは、共産主義者の総結集について具体的な形骸なり方策について組織的・運動的につめていく課題があると考えます。従って、その点について、パネラー同志の論争の発言をして頂きたいと思

います。いま一つは、いくつもの問題が——例えば、危機のとりえ方、革命主体をどう見るのか、革命後の社会のあり方、特に工業化社会の問題等——がだされたと思います。これらについて全てを討論することはできませんので、革命主体をどう見るのか、という点でく

くっていただいて論争的にパネラーの方々に発言して頂きたいと思

っています。残念ながら時間の関係もありますので、一人十分間位

づつひと通り発言してもらい、その後、パネラー同志の討論、論争

的になっても構わないと考えています。パネラーの方々にあらか

じめ御承知して頂きましたが、同じひとつの課題だけに論議がな

ると困りますので、そこはパネラーの意見なりが可能なかぎり全体を

反映できるように、私の方で立ち入ることもありますので、その点

の御協力をお願いします。それでは議論を進めていきたいと思

います。まず申しわけ御座居ませんが、いっださんに先陣を切っていた

だきたいと思

——テープがえ——

司会 いかがでしょうか。いっださんあたりから。先陣を切るというのには非常にたいへんだとは思いますが、さきほどは樋口さんにその御苦労を御願いしましたので、よろしかったら、いっださんに御願

いっだもも氏の発言

共労党自身はまだ、分派闘争としても党としても止揚したといえない

ある意味では、会場自体がもめたあとでの先陣を切ることで、当然これは司会者の悪意から出てる(笑い)割りふりであって、本当に難しいことだと思います。難しいと思うけど、私はあえてかいて出ます。深いことは、当然短い時間の中で言えませんけど、ひとつは、総結集のためには、我々は志を同じくする同志的關係にこそ關係をますます深めていかなきゃならないということでありまして、それも、いくらでもリップサービスとして言えることであって、事実はやはり、先程言われたようなことが少なくとも部分的、一時的にはあって、その実際を抜きにして前へ進めないという事ははつきりしている。同時に、パネラーの大部分がそのもめごとの外部の人間であって、そうした問題は内部でキチッと、自分たちで処理してもらいたいという希望がまた外部から出るといって自覚も、ある組織に属しているものが、外なる大衆、外なる党派との關係においては、当然のモラルとして持つべきであろうと、私はそういう風に考えます。そして、私は生田あい同志とは、実はこのシンポジウムが取り持つ縁のおかげで、今日をはじめて会ったわけですが、お互いに知らない所で階級闘争はそれなりに担ってきている

けれども、はじめてこの討論会で出会う、その出会いの場をこういう形で組織してくれた企画委員会の方々に私は、最初に心から感謝をしたわけだし、生田同志自身も、いろんなジグザグな過程にあるし、中にいろんなことがあったろうけども、そのことはともかくもここまでもってきたことを大いに多とするという意味のことを先程言われたわけで、生田同志と全然違ったとやってきて、皆さんのおかげで、私としても今日をはじめて出会いの場を作ってもらったことをふくめての人間の相互の確認であつたと思うんです。そのところを大事にして、どこまでお互い知るとこまでいけるかってことになるんだらうと思うんです。

私ははじめて会いましたけど、生田同志の話が非常に感銘深かったのは、系統は違うけどやっぱりブンド内の苛烈な分派闘争があつて30いくつにもわかれてる中から、しだいに総括を深めながら、それぞれ自己の責任に応じて、一つの統合の形をつくってきているということなんです。私はその分裂と再統合の過程で、どういう教訓が具体的にあったかということをもっと学びたいと思うんで、その点をもっといろんな形で具体的に討論を深めたい。経験を先験的に予め教条化することは出来ないわけでして、どっかの紙にそういうことがすでに全部書かれてあるというようなことは、マルクス・レーニン主義であろうとあるはずはないんで、こういうことには教科書はありえない。経験から真剣に学ぶ以外にない、ですからこの党の経験のところには、具体的に語っていただければいいほど、私は生田同志の党派の外でやってきた人間であるけども、そつから学べるだけは学べるが多くなると思います。そのようにして今日をはじめて会った兩名がこれからはもうちょっと同志的關係

へと進むという形にいくんではないか。
そのことの照らし返しの関係で言いますとですね、ブンドの様々な分派闘争をやってきて、分派闘争の終焉——といっても、正直のところまだいろいろなこと、いろいろなところが残っている感じもするけども——一応そういうことが生田同志の場合には言える。ところで我々はさくばらんと言って横山同志を除いては、旧共労党ですよ。共労党自身はまだ、分派闘争としても党としても止揚したところまでできていないと私は思うんです。そこは、お互いに自己責任を持って、自己総括をしてすり合わせながら、やはり——ブンドとは同じ形の自己総括には当然のことながらならないし、組織も違うんだから同じ形には進まんだらうけれども、そのところをいわば共通の時代史的経験として、できるだけ普遍的な教訓を読みとりながら、我々自身がそういう作業をまじめにやっていくということがやはり必要だろうと感じます。

それが総結集というふう言うと、誰もそれに反対する人間はいないだろうと思うんですね、総論賛成である。ところが難しいのは、各論になると逆に全部が反対であるというところで、そこをどう打開するか。各論のところでは、ブンドの生田同志の提案した教訓と、我々自身がまだ自己止揚してない問題をすりあわせてゆく必要があると思う。共労党関係が自己止揚してない中で、今日もこの会場でその一部の再分裂の問題があらさまになった。パネラーとしても、それはた迷惑だといっても、お互いに運動やっている共産主義者だから、お互い痛みが走らざるをえないような状況として目撃したわけですから、その臨場感をリアルに踏まえながら、たじろぐことなく合流へ向かって前進したいと思えます。ただ、合流し連

合するやり方は、適時、適切なやり方で進めなければならぬはずであって、日を選んで、場所を選んで、大衆の期待と要望に応えながら、一つ一つ具体的に解決できるところから解決していくというふうにしたい。それは非常に小さいことですが、大事のためには小事をゆるがせにしてはならない。そのことを最後に申し上げます。
司会——じゃあ、主に白川さん、生田さんで、協議会の問題を、具体的にお願いします。順序はどちらからでもかまいませんので（笑い）。勿論、他のパネラーの方の介入もごばみません。ではどうぞ。

生田あい氏の発言 われわれの革命は単なる未来 社会論や思想運動ではない

私は、総結集の方向、形態については、すでに協議会を提起しておりますし、先ほど申し上げましたように協議会はずでに第一弾として、全国の党派、グループ、個人の志ある方々の間で予備的な準備活動を開始しております。具体的なことはここでは申し上げられませんが、いざれども、いざれきちんと公開をします。ここにいる皆さんも、私はぜひいっしょにやりたいと、いうことを、この場で呼びかけた訳です。そういう意味で、形態問題については、はっきり申し上げて、私が会場にもって来ました。——『われわれは何者であり、いま、どこへいこうとしているか』——共産主義者同盟のパンフ（注）——に書いていますように、白川さんが提起している共労党の「連合論」については反対です。

ただはっきりさせておきたいのは、その連合というものは、旧来の戦前でいえば、猪俣さんのいわゆる横断左翼論があります。そういう横断的な左翼論を唱える現在のいくつかの党派の方もいらっしやいます。個人も。そういう意味の連合ではないことは分かります。

それから、いわゆる統一戦線党的な考え方で基本的にいくつかの、そういう試金石というのか、試みがなされて破算しているグループもいます。そういう意味でも、連合が、統一戦線党ではないということも分かります。

連合というのは、非常にあいまいな言葉であってもそれ自体どうのということではありませんが、共労党の「連合論」は、そこに貫かれていた思想的・政治的意味と党観において重大な問題を含んでいて、その総括的表現として「連合論」となっています。すなわち「連合提案という革命党観は、白川さんのいう「指導的核心」としての「党」であって、これは革命党を全国単一の戦闘司令部として組織するのではなく単なる「媒介」や「ヘゲモニー」としての抽象的な意識にしてしまっているように思います。こういう「党観」では、革命を勝利に導くことはできないと思います。どうしてこんな党観がでてくるかといいますが、白川さんの「連合提案」の中でおっしゃっている共産主義者の連合の基準の中で、われわれ日本労働者階級人民の当面の主要な敵である日本帝国主義を打倒することや、プロレタリア階級独裁の樹立、あるいは、革命の動力、主人公として労働者階級という「階級概念」が、すっぱりと抜けおちているか、あるいは意識的に見直おされているのです。われわれの革命が単なる未来社会論や思想運動ではなく、今眼前のブルジョア国家権力を粉々に打ち砕いて労働者階級のプロレタリア独裁を打ち立てようとするなら、革命党は、強固な思想的に武装された組織でなければならぬのは、当り前のことですね。この点で、「連合論」の内実は、マルクス主義の最も核心ともいえる点を投げかけているが故に、私は断固として反対なのです。もちろん、われわれがめざすべき革命の総

体において、白川さんの「連合論」には学ぶべき点があります。例えばプロレタリアートの社会革命をとらえるに、官僚主義に反対する、文化の面、分業や分配の面における資本主義の残存物に対する革命等々の強調に対して賛成です。社会主義におけるプロ文革——継続革命の正しい実行の問題です。こうした点は、白川さん、いいださんもおっしゃっているマルクス・レーニン主義の見直し、とくにレーニン主義の評価をめぐる問題で論争となるところでしよう。しかし、私は意見のちがいをはっきりとさせますが、そのちがいを恐れません。これは、今後、論争をしていかなきゃいかん。いいだもさんとの間でも、意見の違いがあると思います。

そういう意味で、そうした問題のある程度の最低基準を、我々がひとつ党をつくっていくための政治的な最低の基準がある程度満たしうれば、その上で組織形態、総結集の形態としては、やっぱりはっきりと目的を一致させた形で、というのは、何かよく、統一戦線党をつくるのか。いわゆる一般的に運動のために連合するの。あるいは依然として党派共闘を考える人もいますし、いろんな党派を回ってみたいと思いました。そういう意味では、はっきりと、名称はどう呼ぶにしろ、共産主義者の統一、いわゆる思想的統一綱領の上での統一を基礎に、社共にかわる全国単一の前衛党——革命的労働者党をめざした協議会であると、はっきりいうべきだと思います。そういうことで、私たちは今事業を進めたいと思っています。この点は先ほどから何回か言っているんで、これについてむしろ反対の意見を出していただいて論議をした方がいいんじゃないかと思えます。ただ一言、今いいだもさんもおっしゃっておられましたけれども、今日の現場で、このパネルの会場でやられたことを見聞きして

まして、非常に心が痛みます。

はっきり申し上げて、少し遅れている様に思えます。やり方、作風、たとえば先ほど言ったように、新しい時代に向かっていく時に、いろんな意見が対立する。そしてそこに思想的違い、路線の違いがもしはらまれていたら、それをはっきりさせていく議論が必要ですよ。そういうものを党の問題と大衆運動と、はっきりと分けなきゃいかんと思います。原則的な党と大衆運動の区別と結合、そして正しい関係のあり方を、これは労働組合と党の関係でもいえます。そういうふうなものを、はっきりうち立てていくような、そういうことではなくてどうやっていくのかと、私たちも、殴り合ったり、そうして、会場からつまみ出すとか、ピラを破って捨てるとか。70年代のある時期はしょっちゅうやり合ってきた訳ですよ。今でもまだ確かに、いいだもさんもおっしゃるような、いくつかの部分の間にそういう場面がありますね。……(テープ交換)……

……能力を自らがどのようにつくるのかということも、もう少し努力をしていただきたいというふうに、ここへ来て、決してえらそうなことを言う訳じゃありませんけれども、是非お願いをしたい。そういう意味で、ここは開かれたパネルの討論の場なんで、もし本当に路線論争なり意見の違いがあれば別の場をやりやりになって、そこを公開の場にしていやるんだら、そういうような場として設定していただいた方がいいんじゃないかと思えます。その点で、もう少し高い所へというのか、団結のテーマを設定されてここをやっているんで、同じそういう問題を出すにしても、そのことに引きつけた問題の提起の仕方を、相方がきちんと論議をし合うということ

が、私は非常に大事だと思うんで、是非ともお願いをしたい。共労の皆さん方っていうのは、我々ブンドから見れば、随分オトナですけど、やっぱり総括のあいまいさっていう所があるような気がします。いま、われわれが共同してやろうとしている協議会などの提案は全国の共産主義者の団結のため、新しい建党的ために、非常に大きなわれわれの未来がかかっています。そういう意味で、是非とも、一党派のいくつかの利害にあまりこだわらないでというのをおかしいですけども、それは内部でしっかりとやりながら、先ほど言ったように、自らを革命していく観点で、大事にした

い。これを是非育て上げていくという観点。文字通り我々の子供を育て上げていくような、そういう意味では今、産む陣痛というのか、というような事態に、全国的に皆んな入っている訳で、そういう生みの陣痛というのは、こういう問題をともないますし、私はいきごとを言いません。だけれども、やっぱりそれを育て上げていく我々共産主義者の粘り強い態度と作風を、是非ともいっしょにつくり上げていくということをお願いして、総結集の形態の問題とあわせて、意見表明にしたいと思います。(拍手)

「自立」——3号——
 「ガリズリ」 カンパ 百円

- 一、フクニチ闘争経過
- 一、民衆解放と自立の思想
- 一、「3・6集会」報告 その他

(発行) フクニチ組合を強くする会
 (連絡先) 福岡中央郵便局 私書箱七二号
 (電話) 〇九二(五二一)六〇六二

**小さな火花も
 広野を焼きつくす**

1983年5月5日
 編集・機関紙編集委員会
 発行・さわらび社
 定価・50円
 (連絡先)
 福岡市博多郵便局私書箱 138号

白川真澄氏の発言

政治教育、組織者、工作者、
宣伝、煽動は党的主体の本
質的機能です

共産主義者の連合の問題について前提的にふたつ、それから今後の進め方について一点だけ申しあげたいと思います。

前提のそのひとつは、すでに先程の会場発言で明らかになっていくわけですが、このシンポジウムの事実上の主催者である党九州地方委員会の分裂問題に関してです。御指摘がありましたように、自分たちの組織の内部において矛盾解決をする力をもたなければならぬのにもかかわらず、そういう力をもつことができません、この日を迎えてしまったことについて、冒頭申しあげましたが、私たちの団結のあり方の問題という点において、深く総括したい、と思っております。ただいちばん最初に申しあげましたように、私は、どこに意見の違いがあるのか、あるいは路線の違いで本当に組織的に分裂せざるをえないのかどうかという点について、ひとつの組織の中で、あるいは共同事業としてやってきた人たちの中で、トコトシ議論をしつくすという態度と作風が今求められていると思えます。もし、路線や意見の違いを明らかにするように十分に議論する

努力なしに組織的に分裂するという態度があるとするれば、そして私は現実にそういう事態がひき起こされたと考えておりますが、それは、今後の大きな目的に向っての協力と連合のためには、きわめて有害であるし、きびしく批判されなければならぬと考えております。そういう意味では、どこに意見の違いがあり、どこに路線の違いがあるのか、ということがほとんど明らかにされていない時点で、九州の党が組織的に分裂にたち至ったことについて大変情けなくかつ恥しいと思っております。できうるならば、ぜひ昨日まで一諸の同志として闘ってきた人たちと、ひとつの討論の場について、本当に自分たちは組織を別になければやっつけられないのかどうか、根本的に相容れない関係なのかどうかを討論したい。三里塚の三・二六の闘いを共同して闘いぬぎ、そしてその闘いの中で原同志を失ったその半年もたたないうちに、路線をめぐる議論をほとんど尽さずに、分裂がひき起こされたことは大変残念であります。私自身としては、やはり、そういう議論の場をもって、再団結に向けて努力をするということが、今日、ここに出席をされたパネラーの方、ならびに会場に参加されておられる方に対する責務であると思えます。私はそのことは、単に、いち組織内部の問題ではなくて、やはり、連合を推進していく責任と資格の問題として、意見の違いを解決していくためにどういう作風と態度が必要なのか、という基本にかかわる問題として問われているということを、まず第一前提として申しあげたいと思えます。

第二の前提は、共産主義労働者党の三分裂以降、御承知のように樋口さんは、現在労働者党という組織的な形をとっておられて、私

はそこにひとつの総括の形があると思えますが、いいたさんたちを中心にしたグループは、現在ひとつの組織的な形にはなっておられないわけですが、私はやはり、共産主義労働者党としての歴史的な総括を共産党を構成した人々によって徹底的にやる必要があると考えています。そして、自分たちが何者であるのか、そしてその中で何を生みだしてきたのか、何を継承し、発展させるべきなのかという問題についての、前に向っての討論を共同してやる必要があるだろうと思えます。もしその総括を自分たち自身の中でやりきることができないとすれば、それこそ、生田さんがいわれたように、潮流をこえた大きな連合と協力を推進していくということはできないだろう。そういう立場で、第二の前提の問題として、共産党の総括の問題を申し上げておきます。

それから今後、共産主義者の連合をどう進めるかという問題であります。私は、多くの共産主義者が協力して革命の事業を進めていくという時に、これまで存在したのは、ふたつの形態であるということをも最初に申しあげました。

ひとつは、単一の——民主的であれ何であれ——集中的な党を作るために組織的に合同していく、いわば単一党へ向っての組織合同や統合、あるいはその組織合同を進めるための結集形態をつくるという方式がひとつであります。もうひとつは、党派共闘、あるいは政治共闘の形態であります。

私は、そういうふたつの形態を越えて党的主体の新しいあり方を創造する実験に挑戦すべき時期に現在きているのではないかと、という問題提起を冒頭したわけです。つまり、新しい党的主体の機能を現実に果す共産主義者の連合——連合という言葉には必ずしもこだ

わりませんが——という立て方をするのは、単一党形成をめざすための諸政治組織あるいはグループの協力、合作という方式かそれともそれぞれの政治的な党派ないし無党派も含めて、当面の政治目標を実現するために共闘し合う政治共闘かという、その従来の発想と枠組み自身をもう一度対象化して見る必要があるのではないかと。その枠組みに何もしばられる必要はないのではないかと。いうふうに考えているからです。

世界的な水準での党形成の問題として、例えば、ポーランドのKORの経験を考えますと、KORは、マルクス主義者とカトリック左派との共闘形態であります。KORは、自己を党的主体と規定もしていないし、集中的な政党形態もっていません。しかし、ポーランド「連帯」が一千万の労働者をまたたく間に結集していった過程で、労働者と知識人のブロックとしてのKORは、指導的媒介つまり党的役割を果たしたと思えます。労働者の中において果たした政治教育的な機能であるとか、あるいは、自立した労働者組織を作りあげるうえで果たした組織者としての役割、あるいは、「飛ぶ大学」の組織化、「ロボットニク」の発行をはじめとする教育的な、また宣伝・煽動者としての機能をKORは実現しえたと思う。政治教育、組織者、工作者、宣伝、煽動は、党的主体の欠くことのできない本質的機能です。もちろん、ヤルゼルスキ軍政の奇襲に対して、党に要求されるひとつの集中した戦闘力ないし行動力をKORは発揮したのかと言え、そうではない。その点にひとつの大きな総括上の問題がひそんでいる。

もちろん、私はKORをモデルにして党形成をやろうと考えているわけでもないし、例えば最近日本でも「みどりの党」を結成する

動きがありますが、私はそういう輸入式の発想になじまないというか、賛成しないわけでありませうけれども、共産主義者が自分たちの政治組織、あるいは政治グループの独自性を生かしながら、なおかつ全体として連合して党的主体としての機能を果たしていく、そういう党の新しい形の創造に挑戦すべきだろうと考えております。

共産主義者の連合が例えば、協議会とよばれるか、あるいは連合とよばれるか等々の問題についてあまりこだわらざるつもりはない。その際、当面大事なことは、路線や経験が違ふ共産主義者が協力し連合して党的機能を果たすことができる連合であれば、協議会であれ、そういう党的主体が一举にできあがる、というふうには考えないことです。そういうふうに見えることは自分自身に対してひとつの幻想をいだくことであると。そうではなくて、党的主体に求められるいくつかの本質的な機能、たとえば、活動家教育の機能、工作者の機能、政治目標の提起などの機能を実際に、共同して様々な方たちで作らねばいけません。そういう共同実践を多様な形態で進めながら、当面私たちが力を集中する大きな中心は、60年代から70年代にかけての革命運動あるいは私たち自身の運動の総括を基礎において、

我々がどういふ革命をめざすのか、何をめざすのかという路線的内容を明確につくりあげていく作業だと思えます。先程、横山さんは党を作つてその党が何をやるんだ、と非常に鋭く提起されたわけでありませうけれども、とにかく党をつくれれば何とかなるという抽象的な党形成では、何も生まれないと私は思います。党的主体なるものが何をなすべきなのか、つまりどういう方向と路線でいくのか、ということについてのそれぞれの問題意識を徹底的に議論をする必要がある。私は今回のシンポジウムはそういう場のひとつであると思えます。そしてここで、路線や意見の違いがでるといふことを何ら恐れる必要はない。むしろ、違いを明確にしなから、違いがある故に協力し結合していくというあり方をわがものとす。そういう意味で形成されるべき新しい党、あるいは党的主体がめざすべき目標、路線ということについて討論する。しかも、できるだけ公開し、かつ全国各地で様々な形態において積みあげていく、そういう作業の中から、共産主義者の連合が組織形態として最終的にどういふ形態をとるのか、ということについての、創意あるいは提案が必ずでてくるであろう、というふう考えています。

横山好夫氏の発言

階級闘争の主戦場は、 やはり労働運動

最後になるとしゃべりにくくなるから先にしゃべっておきます。

さっき僕は非常に不十分にしか言えなかつたのですけど、やっぱりそれは、僕が弱いもんですから、こういう奮闘気の中になかなかしゃべりにくくてですね(笑い)、無党派と党派の決定的な違いは何かということなんです。やっぱり所帯もつてるかどうか、門がまえもつてるかどうか。そのところが決定的に違ふんで、先ほどのいろんなやりとりを見ていて、やはり所帯もつていて、これは非常に大変なことであると(笑い)つくづくと思つたわけなんです。その辺がなかなか無党派が党派に踏み切れない一つの壁なんです。逆に言うと、そこそこで甘やかされる。融通無碍いくらでもにげちゃう。そういうふうにおいとくと、我々の主体というのはグズグズとくずれちゃうんだらうというふうに思うんですね。だから、そこはこういう提起の中で自ら問い直すという意味は、どっかで門構えをきちっとする。たてまえを持たなければやっています。もう一つ、これは伝説的になっていきますから、みなさまも御記憶にあるでしょうけれども、共産党というのは共産主義労働者党なんです。それが分裂した時に、共産主義と労働者と党に分裂した(笑い)。それぞれがどこに行っているのかというのは語弊があるから

言いませんけど(笑い)。そのことが再統一されるのかどうかというのには、ある意味では連合がうまくいくのかどうかという、まさに共産主義と労働者と党がどうなるかという問題ですから。そのところは非常に野次馬的に言えば、見守っていくと言うか(笑い)むしろその主体の中から労働者が落っこちちゃうことのないように、労働者としては願っているし、思い込みを入れたいところなんです。先程の司会者の提起の中に、革命主体は何かというもう一つの問題があつて、やはり、僕は自分の置かれてきた立場からすれば、労働者ということではしか言えない。

たしかに市民運動なり、住民運動なり、いろんな戦線なんかに出ると、労働組合はいつも遅れていると言われるわけですね。なかなか決めた通りに出てこないし、反応がにぶいと。三里塚に行つたつてそうだ。あるいは、地域の住民闘争やつたつてそうだ。そういう格好で労働組合が批判の対象にされるわけです。

逆に言うと、それは向うに組織されているということだ。向うはどこが主戦場かというのを一番よく見ているから、一番管理しやすい所、一番管理しなければならぬところに集中的に資本の、あるいは、体制管理というのはギユツと締めつけているわけですから、そこでの攻防戦なんだというふうには僕はやはり、労働運動を立てて行きたいし、そこでの転換がなければ、日本の革命は全くありえない。

その場合の一つのカギというのは、労働者自身がよく議論することですけれども、今までの運動の延長でやっていくのかどうかということをもう一回問い直すところに来ていられるんだらうと思えます。

実は、私達自身も労働組合の中で綱領を論じてみようということ

で、この間綱領づくりというのをやっているわけですが、その中でも問題というのは、ゼネロが資本との闘争を終えて和解する時に、八つの行動規範というのを作りました。それは天下国家を論ぜよとか、あるいは互いに助け合い、批判し合おうとか、あらゆる差別を許さないこととか、質素であれとか、八つの項目にわたっての行動規範を作ったんです。今から思うと、そのことは、闘いで養ってきたある種の闘争主体として団結形態、闘争体としての団結形態が資本の中に入ることによって解体されていくだろう。そういう読みの中である種の倫理綱領的に作ったわけです。そうすると、自らの身を律するという側に力点がある。何かを開いて創っていくというところは、やっぱり欠けているという点があって、今外に向かつて開かれる中味のものを作り上げなきゃいかんというふうに作業を開始しているわけです。

その中で、例えば労働組合としてやるべき課題というのはいったい何なのか。労働組合が本来的に果たさなければならぬ機能とはいったい何だという格好でいろいろな課題を全部だして、その課題を整理していくと——たんなる分類ではなくて、その中にこめられている心のところは何なんだというふうな問題を抽象化しようじゃないかと。

労働組合的な課題でいうと、例えば賃上げ闘争やるとか、反合闘争やるとか、それぞれの課題があります。そういう中でいろいろな方針が立てられるわけですから、例えば要求いくらにするとか、闘い方どうするとか、常に行動綱領的になるようなところは年度の運動方針の中で出てくる。そういうふうな立った時に、例えば政治的領域ではどうなのか、あるいは思想・文化的領域ではどうなのか、あ

るいは国際連帯とか、共闘とか、支援とか、そういう領域についていかなることが求められているのか、そういういろんな課題をぜんぶ分類していくと、大体領域的にはそういう領域になる。

その中で、共通する心のところは何なのか。例えば、賃上げ闘争をやるといことはいったいどういう意味を持っているんだ。資本との闘いなんだ。資本との闘いというのは、じゃあいったい、それを掘り下げていくと何をすることなんだ。一方で賃上げを放棄することにはならんわけですから、やっぱり賃上げで賃金を闘いとして生活をよくする。生活をよくすると言ったとき、その中味の豊かさというのはいったい何なんだろう。そういう、ある面での労働運動が何か言わなきゃならない心のところを掘り下げていく必要があるわけなんです。賃上げと言っても、額の問題ではない。その中に込められている労働者分断の資本政策の問題にしない。その中に込められてはやっぱり、差別と闘うという、そういう心がなければダメだと思ふ。

あるいは、労働者の文化領域ということでは、いわゆるその中で互助共生というような思想がその中にあるじゃあないか、それはいったい何なのか、予見的に取り得ている社会主義の思想なのか。あるいは、全く身をすり寄せ合って、あったかく生きようねと言っただけなのか。そういう点についてやはり掘り下げて心のところをえぐり出して見ないと、外に向かつて広がる綱領にはならんだろうというところが、今、組織内で論議しているところなんです。

このところは、日本の労働者が労働運動を変えていこうという時に絶対に避けて通れない問題であって、自分たちの現在の生活基盤を単に守るということではやはり開かれないし、よくある例え話

しで、第三世界の革命の最後に日本の労働者がほろぼされて革命が勝利すると、そういうことになるんでは話にならないかというのが、主体の問題を考える時の一つのキーだと思ふ。それからもう一つ、労働運動の再編過程で一番問題になるのは、それぞれのおかれている利害でしか判断できないこと。だから、労働統一反対というふうな言う場合に、非常に端的に言えば、例えば共産党系の組合にいて、その中で彼は統一労働組合に行つた場合どうするのか、一番端的な例でいえば、全国一般の南部支部を例にとればですね。全国一般が総体的に協議会へ行くと、そうすると、東京地本は共産党が主流ですからそれは統一労働組合に行つて、協議会からは抜けるということになる。その中にある南部支部というのは、共産党と切れるのか、切れないで主流派に走るのか、それとも第三の道歩くのかというふうな、非常につきつけられた現実をせまった問題としてすでにあるわけですね。

そういう所と、例えば自治労のように、総評ができた時もそうですけれども、もう全て解体しちゃって、全部むこうに連合会ができちゃってもなおかつ、下部のところではまだ行かないですんでいるとかいうような、非常に時間的な落差（タイムラグ）が大きいわけですね。

そういう問題だと、全部いっせいに労働統一反対で論議しましよ

うねと言つてもなかなか同じ土俵につけないという問題がある。そういうことだけじゃなくて、ある組織のなかで、例えば組合の専従や組合で養ってもらっている人、そういうところに人数が多ければ多いほど、主流派の意見に従えなくなる。そういう利害もある。あるいは、地域にある権利を持っているというふうな所もある。

そうすると、それぞれの個別利害と言えば、なかなか一線について論議することはできない。その時に、その論議を始めるとどうなるかと言つと、組織論がでてくると運動論にすり変わるといことになる。そういう二元がそれぞれの場において、論議が進まないということがいつもあると思ふのです。

僕は党派の連合の場合でも同じようなことはないかということ、やはり論議していく時に提起されなければならぬ問題ではないかと思ふ。以上です。（拍手）

クライシス発刊二周年
シアレヒム創刊
記念講演会

鄭敬謨・いいだもも世界を語る

発行・

クライシス九州読者会

樋口篤三氏の発言

革命は、階級主体と前衛主体ぬきにありえない

いくつか提起というか、感じていることを話したい。

即ち、共産党の総括をめぐる問題です。僕も共産党の一端を担い、三派のひとつを代表した責任がある。少なくとも僕自身も共産党に身体はつたし、全力でやったんだから悔しさにおいて人後におちないし、自己批判もある。我々なりの自己批判の文書も出している。そのうえに立って実践的総括を含めて、自ら党をしょって立つことをやってきた。だから旧共産党を含むわれわれ新左翼の総括といった場合、先程提起した現在の危機の時代にどのように前に向かって進むのか、その戦略的路線の一致と共同性をかちとることでの、そこに向かった総括でない限り、総括を自己目的にしても何も生みださない。

その場合、なぜ日本の共産主義者・日本の革命運動は革命をなしとげることができなかったか、その主体的歴史的総括が必要だ。

今、中国革命は変質した。そして朝鮮革命にもいろいろ問題がある。しかし、歴史的にみて中国・朝鮮・ベトナムと日本の共産党はほぼ同時に出発したのに、彼らはすくなくとも革命をなしとげた。が、我々は革命を成し遂げていない。その落差は何であるのか。

よく今までいわれてきたのは、日本は帝国主義本国での革命だから、その柔構造支配と対決する複雑さがあるが、資本主義の発達していない中国・朝鮮・ベトナムの革命は単純に成功するという「説明」だ。しかし、そんなことはない。やっぱり我々の日本の共産主義、共産主義者の主体の問題なんだ。

革命は、階級主体と前衛主体ぬきに自然発生的にはありえないが党の問題について言うならば、日本の革命運動は余りにも「歩止り」が悪い。今日は皆さん若い人が多いが、十年たったらどうなっているだろうか。是非、皆さんにもう一回、十年たつて会う日を楽しみにしたいが、僕の経験でいえば、僕の所属していた川崎の東芝堀川町細胞は、一九四八年の時に、日本共産党の工場細胞で一番大きく強いと言われた。三〇〇〇人の工場で、三〇〇〇人が共産党員、専従が二人おった。要するに泣く子も黙る東芝だった。

けれども今どうなっているかというと、その三〇〇〇人の党員のうち、今でも革命運動をやっているのは僕一人だ。共産党はいますよ、十人位。でも彼らは「議員バツチ」だ。あんなマルクス主義なら楽な話だ。(笑) 樋口はよくやっていると、だから頑張れという応援団のおじいさんも何人かいるけれども。残念ながらこれは歩止りという三〇〇分の一だ。

あるいは当時の全学連・東大細胞を例にとってもいい。ここも三〇〇〇人だった。けれども今僕らの同志はほとんどいない。戦後革命期の日共で最強といわれた東芝も東大もこの有様だから、あとは推して知るべしといていい。

そこでいいたいのは、何故、労働者もインテリも共産主義として長続きしないのか、つまり歩止りが悪いのか、その問題は何なのかというのが僕の総括の視点なんだ。宮本顕治は、「お前らがだらしがないから」という総括だ。それももあるかもしれない。しかし、それが中心ではない。

一体何が足りないのか。日本の共産主義運動・革命運動は、ひとくちにいうと魂がないのだと思う。そのために命を賭けるくらいの賭けに値するものがないから、困難にあうと逃げちゃう。僕だって何度もつまつた。共産党にも命賭けだったし、共産党だって命賭けだった。だから分裂したりなんかした時は、その分だけ絶望する。けれども、絶望しても、はいずり回っても、もう一回地をはってやってきたのは何故か。

僕の場合、自分で考えてみてね、すごく頭悪いです。いいださんとか白川君とは違って学歴的にはね。(笑) あまり自慢にもならないけど、高校では一五〇人中一四三番だった。本当にずばぬけて理

論があるわけじゃない。ただし、俺の生き甲斐、生き方がある。それが革命であり、共産主義である。

何故革命であり、共産主義かという原点だが、それは帝国主義戦争に対する非常な憎しみである。第二次世界大戦には俺も行ったし、兄弟三人は戦死した。だから敗戦後、正しいと思っていた戦争が全クデタラメであるとわかった時には驚いた。その時に生きた共産主義者が、帝国主義戦争に反対して命がけで闘ったことに感動した。それが、一番俺を支えてきた理由だ。このことを再びくり返してはならない。そのためには革命しかない。その非常に単純素朴な原点が僕の原点、命を賭けて突き進むに値する生きがいであり、生き方なんだ。

もう一つ単純素朴な話をしよう。僕はレーニン主義を今も正しいと思っているし信用している。もちろん、レーニンが言ったことをそのままではダメに決まっているが。例えばレーニンの時代には原子力はなかったし、ロボットなんかありはしない。いかにレーニンが偉大であっても、そこまで全部予言しろって無理な話だ。ただ、レーニンの時代的制約からくる限界にもかかわらず、「民族植民地問題」にしろ、「国家と革命」とか「左翼小児病」とかの愛読書は何度も読んだけど、今でも正しいと思う。足りないことをどうするかこそが我々の任務であって、あまりポイポイ捨てない方がいい。二〇世紀後半の世界、現代の帝国主義の発展、そのなかでの我々の社会主義革命をとらえかえすうえで、一体どこが問題なのか見直す観点が大事なんだ。

これも単純な話だが、僕がレーニンにもっとも胸を打たれ、共感したのは、彼のこういう発言だった。「共産主義とは何であるの

か。共産主義とは革命直後の飢えた内戦ロシアで、一人のミルクを呑めない赤子がいる時に、大人がミルクを呑むのを許さない。それが共産主義なんだ。」僕は、こいつはいいことを言んだと思った。一言でいうと「平等」ということだ。俺はそれをずっと今まで自らの人生観にしてきた。だから、たとえば労働情報の賃金に差をつけないのは、自らの思想なんだ。僕は十四万五千円。親子ぐらゐ年が違ふ女性十二万五千円で、経歴に関係なくできるだけ差をつけない、平等ってことを買ってきた。

実は、そのことがポーランドでも問題になっている。今の日本には山ほど共産主義論があるし、我々は哲学も経済学もしっかり学習して身につけなくちゃいけないと同時に、その魂というのか肝心カナメのところを忘れちゃいけない。

僕がポーランドの連帯にもっとも共感する理由は、二十一項目の要求にある。それはもとは社会自衛委員会が「権利宣言」として創ったものを、八〇年夏のグダニスクの地区連合ストライキ委員会が共同の要求として闘い、勝利した後、「連帯」の綱領の冒頭に再びかかげた、ポーランドプロレタリアートの社会主義革命の原点だ。核心は三つある。一つは独立自治。独立というのはソ連やポーランド政府に対する独立であり、自治ということ。二番目は「パン」の問題。三番目は、特権階級を許さない、差別を許さないということだ。

この差別を許さないという要求は僕にピッタリなんだ。ワレサらは、連帯労働組を作って、わずか三ヶ月で一七〇〇万人のうち、一〇〇〇万人を組織した。まさに多数者を獲得した社会主義革命だ。その時に彼らは組合役員、専従の給料をいくらにするということもそ

の原則から決めた。日本でそういうことをやっているとろはあるだろうか。ない。平等思想というのは、そこにあらわれるんだ。全ゆる不平等とか差別というのは、身分差別・人種・民族差別・障害者差別・男女の差別等々の差別とともに、階級社会では必ず賃金に結びつき、あらわれてくる。そこを根本から打ち砕くような思想と闘いぬきに社会主義はありえない。いいかえれば生産点の問題だ。

労働と生活の問題。そのことは全面的で、人類普遍的な問題であり、そこを貫く平等というのは、理想かもしれない。非常に難しい。そのところをあえて、絶対の「平等」に一步でも二歩でも肉迫する。むろん、この「大理想」は階級の廃絶と結びつかない限り、階級社会のもとでは、単なる小ブル的な願望にすぎなくなってしまうかもしれない。にもかかわらず、そういう焼くような、人の魂を打つような、ここで命を賭けるに値するということがないと共産主義革命はなしとげられないと思う。

今日、ここにいらっしゃる皆さんのなかには無党派の人もいるでしょうが、僕の経験では、三十六年やって、ああ党にいてよかつたなあと思つたのは十年もない。「ろくなことはねえ」(笑)といふことがはるかに多い。たとえば今みたいな時だって、どんなにしない党だって党を名乗ってればたいへんですよ。実際の話。無党派の方がはるかに楽です。(笑)けれどもあえて苦しくてやんないけないのが党なんです。

かつて、レッドパーズがまだ横行していた時だって、僕らは自分の工場で、みんなもぐっている時、五〇人の党员の中で僕一人だけ名乗っていた。だから敵の集中砲火を浴びてとても苦しかった。けれども、その時は、「俺は言われる通り共産党员だ。なんで悪い。」

こう思つてもいたし、敵の攻撃と対決し得たのは、大衆に対する信頼感があつたからだと思う。そこで負けたら、僕らは執行部も専従もやめ、いつでも降りる覚悟でいた。今だって同じなんです。大衆が僕を「認めない」といえば、労働情報だって、季刊労働運動だっていさぎよくやめる。その覚悟はある。

そのうえで、にもかかわらず党なき革命はない。党なき労働運動はありえないという僕の信念は曲げない。ろくな党はいらんこともたしかだが。(笑)そこをどうするのかというのが今の挑戦なんだ。僕がもう一つ、ポーランド連帯に共鳴するのは、ポーランド語では「自主管理」といったら自治と同じ意味をもつのだが、彼らは、「労働の自立管理」、「社会の自主管理」、「自主管理国家」となるんで「人民に奉仕する党」といつていることにある。これまでの党というのは、常に命令する党であつた。だから、これまでのことだけでいえば「党なんかいらん」という結論もでて当然だ。けれど僕はそう思わない。我々が皆さんが自らそうでない党を創ればいい。ゼネロ党だっていいじゃない、横山君の。新日鉄の人なら、新日鉄党とかね。自ら共産主義者たらんとするなら創ればいい。

しかし、それだけなら全国性的じゃないから、すぐにぼしやるわけでも必要だ。自ら決意した人たちが集まって、三人寄つて創つてみる。今までの党とは常に「上」からだったが、今は「下」から、つまり工場・地域を原点にしっかりする。いいですか、「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である」といい、「労働者・人民こそ革命の主人公」というけど、党の場合も同じだ。その党において、党员が今まで党の主人公だったことがありますか？一度だつてな

いんだ。党员はいつでも指導部の手足、「将棋の駒」だった。そこをひっくり返さなくちゃならない。党员こそ主人公である。

そういう党をつくるのは可能だ。自ら決意した一人一人の力でそれをつくるために「起つ」。協議会の問題はそこへ来たことにある。その挑戦を抜きに、この八〇年代の難局は切り抜けれない。僕らは負けたらみんなお互いに刑務所ですよ、本当の話が。本当に覚悟して、この危機に立ち向かわなくちゃならない。しかし、俺らが勝つたら、田中角栄も中曽根も打ち首ですよ。(笑)平たくいえばそういう所にさしかかったんだ。

さっき、白川君の話を聞いて、かなり同感する点があつた。例えば、生産力の問題なんか、彼とかわりっこないんです。我々の生産力は、政権をとつたならば、僕に言わせれば鉄鋼は日本で一億トンもいらん。三〇〇〇トン位でいいじゃないですか。つぶしちゃうばい、そんなものは解体すれば。日高六郎さんがいったように、我々が政府をとつたら、新幹線は時速二一〇キロメートルはいらない。一一〇キロでいい。そういう主張が大事なんじゃないですか。今、工業生産力があまりに肥大しすぎて、飽和点をとくにすぎている。まさに資本主義は「生きのびすぎた。」

今、生産力を問題にしているのはエコロジ派だけのようみえるが、生きのびすぎた資本主義がつくりだした生産力を生産力水準の中味を問わず無前提に肯定するのなら、社会主義最左派とはいえない。

たとえば、自動車の生産現場に行つてみれば、皆さん入つてみればわかるように、大変な台数のロボットが導入され、労働者は「大平楽」であるかのようにいわれている。けれども、そんなことはま

まったくありえないし、逆だ。僕は電気工場にいたからわかるけれど、すさまじい合理化とラインのスピードで、本工なんて嫌がって入らない。下請・季節工・日雇いといった底辺にいけばさらに矛盾がでてくる。その中で、労働者はだれでも「俺は何のために一体働いてんだ」と、ずっと悩みながらいる。労働者はみんな買収されたわけじゃない。例えば日産を、あるいは鉄鋼の下積みを見ればいい。あの天下の日産・新日鉄といったって、労働者はみな窮乏たる生活です。一杯飲み屋で立ち飲みしているんじゃないですか、みんな。その実態を皆さんは、御存知ですか。社会主義を語り、革命をめざすなら、少なくとも僕は、今の労働者階級の実態をしっかりとつかむべきだと思う。生産現場で、いかなる労働をしているのか。どうい生活なのか。何を思っているのか。たしかに労働者階級の半分はダメだ、今現在。それは帝国主義と社会主義の分裂、労働者階級の分裂の時代の必然である。しかし、今明らかにもう一回、時代もしたがって労働者一人一人の人生も、労働者階級総体も変わりはじめている。

その時、革命主体は労働者階級であるし、そこを抜きに資本主義の打倒はありえない。つまり階級支配の解体がカギだ。そこへむかって労働者階級を組織していくのが、やっぱり前衛党なんだ。その未知への挑戦へむかって、「団結して、これが勝負だ！」というのが、もっともいい主張です。(拍手)

いいだもも氏の発言

人間と自然との関係が変わらないと……

また司会者の御指名に忠実に従います。(笑い) 今の樋口同志の話は、すごく僕の心を打ったですよ。皆さんの心も打ったと思います。つまり、150人中143番(笑い)、あと7人いるから、あと7人はどうしてるかとも思っけれど、さすがにそういった人だ。僕の方は150人中1番以外とったことないです。(笑い) まあ、横山同志の「共産主義」と「労働者」と「党」という三つの割りふりであれば、誰がみたって、樋口同志ってのは「労働者」という割りふりだと思っんだね、それが最近どうも、「党」が樋口同志の割りふりになったような感じにもなってきたんでね、僕は大変途惑いながらも(笑い)、やっぱり歴史は前進しとるなアという感じを持ちます。

それで僕の方は、旧態依然としてあい変わらず「共産主義」というのを一人で代表しているわけですから、(笑い)この観点からしか議論の集約にかかわれない。今迄でたことに関連して小さいことで三つと、革命の主体という大きなことで一つ。

ひとつには、今樋口同志がポーランドの「連帯」に感動したと述べたことを、もうひとつ党の次元との関係で多少理論化して展開しますと、白川同志が言ったKORの問題が出てくる。KORの問題は、統一労働者党が支配権力の党になった時に、労働者の大義を潜

革命の火

定価 : 150円
電話 : 03(816)5379
振替 : 東京0110468 木村 三郎
労働者党全国委員会機関紙

司会 どうもありがとうございます。一通り各パネラーの方々が多岐多面にわたる問題提起がございましたが、ここで司会がへたな交通整理をするのもどうかと思えますので、時間も残り少なくなってきましたが、もう少し各パネラーの方々に御自由に発言していただきたいと思います。

いいださん、いかがですか。これまでの討論につきまして御意見等がございましたら、お願いいたします。

在的に代表する党に準ずる存在になった。それがしかし、「連帯」ができた時に「連帯」の中に消えていったと思うんですよ。これは古い党概念で言う、「解党主義」ってことになるのかもしれないけど、僕はそれだけのことなのかという疑いを持つてるわけです。つまり一方から言うならば、「連帯」というのは本来党が作るものとされてきた綱領を、労働組合でありながら、行動綱領って形でつくった。こういうことが現にこの時代には労働者自らの成熟において現われておいて、その行動綱領をつくることを通して、支配国家に対抗する労働者階級が、白川同志の言葉で言えば「本物の労働者階級」として登場したということがある。そのことは、党がなくていいということにはもちろんならないから、党がなかったら結局はヤルゼルススキの軍事クーデタに負けたんだという総括はいかにもできるだろうけど、KORが「連帯」の中に消えていったことは、「連帯」自身の労働組合の団結の中味が、彼ら自らが規定するように、「社会運動としての性格を持つてくるユニークな労働組合」として成長しつつあったということは、まぎれもなくある。もし、ポーランドでできたるべき党というものが現れるならば、そういう大衆運動が管理国家との対峙の水準において高次の質に上ってきた主体状況の見合いにおいてしか新しい党というものは実質上できないだろうというふうにみています。

それから、二番目には「横山、おまえせネ石党を作ったらいじやないか」という形で出された問題ですが、それがそう簡単にいくんだったら、あんまり苦勞はないんだけど、私も協力してるせネ石の組合学校ってのは7年目に入ったんですよ。もう大学院ですよ。こないだ新しい三役が相談に来て、7年目は政治的には代々木派に

属すると思われる歴史学者の江口朴郎さんの「現代の日本」をテキストに使用して、一年間やろうということに決まったのですが、さつき横山好夫同志が横からささやいていうには、「覚えるだけでも大変だけでもさ(笑い)今度の一年間の組合学校は『現代の日本』がテーマだから、こういうこともやんなきゃいけないですか!!」って。無党派労働者コミニニストとしては、ヘジテイトしたというかな、非常に恐怖に満ちた(笑い)ささやきがあった。そういう水準に学習はさしかかっているんですけども、横山同志が言われたようにゼネ石の有名な八つの行動規範というのは、中国紅軍で言うならば、いわゆる三大規律八項注意みたいなものでありますから、作風に關係する、いわばモラルなんですよね。今後はそこからさらに、労働者のところを問うということになってきたということで、組合として合宿でもって、行動綱領作りにとりかかっている。これから一年間の組合学校は「現代の日本」をやりながら、同時に労働者が自らの手で行動綱領を作っていくということに、理論的に協力できる様な、そういう組合学校にしていこうという形で、第七年目はさすがに大学院らしく、少しなってきたなアという感じを持っているんですね。現実はそのような形で、着々とはいえませんが、のろのろと進行している。そういう現状にあるわけですが、やはり、これまでの既成の党概念、既成の組合概念でははかり知れない新しいものが、少しずつ生み出されつつあるということを、私は確認できるわけです。そのことを又、どういふふうに、現代におけるマルクス主義の新しい再生に結びつけて理論化するかということ、これは、これまであまり早まってはならない問題ですけども、私のような理論家にも求められている。そうした状況に、こんにちの党と大衆運動

との相互関係はおかれていますんだということです。

それから、もうひとつはですね、これはこういう形で「統一協議会」の提唱が満席の党派、無党派の活動家を含めて、いわば大衆的な場面で議論される。企画委員会は、大衆的な実行委員会であるけれども、同時にそれが党的主体の問題を問うようなパネルディスカッションを主催しているという、そういう関係も現実に出てくるわけでしょう。その現実を、我々はこういうふうなところから将来の党的イメージをくみとるか、というぐあいには生かすべきだと思っただすよね。西ドイツが昨年、緑の党もふくめて各派の共産主義者を集めて、2000名の大衆的規模で「党とは何か」「党をいかに作るべきか」という大衆討論会をやった。日本も当然、党の問題でもいろんな諸形態を駆使すべきであって、そういう形態も大胆にやるべきである。そうじゃなければ、やはり自民党の密室政治とほとんど変わらない水準で党創りがなされる、もっと大衆の質が新しく出てるんだということ信頼して、一つの方法としては大衆自身の公開討論の中で、来たるべき我々の党というのは何なのかということは大胆に議論して、そこから党的諸形態を結晶させていくべきであらうと思っます。そこは緑の党的創成もふくめて、ドイツに大いに学んだらいいんじゃないかと思っます。

最後は、ちょっと大きい問題で、本日私が問題提起した革命の主体の問題に戻ります。樋口同志が今、自分は生産力は全部パーだという意味でのエコロジー派には組さないけれども、資本の生産力のこういう異常な亢進というものを、どんどん亢進させていけば、豊かになるっていう、そういう生産力主義では全くないんだというふうに言われたので、私は大いに「好(ハオ)」なんです。

それからまた、先程生田同志が国有化社会主義というものはダメだといわれた点も「好」です。生産手段の所有制を唯一のあるいは最も主要な軸点として階級を規定するような。——そこからまさに国有化社会主義論というのは出るわけですから。——方法論については自分らはダメであるという総括をしていると、生田同志が発言されたことについても私は非常に心強く受けとったわけです。

つまり、私流に言えば、純然たる経済的規定によって階級を客観的存在として規定するだけでは、現代資本主義下の現在の労働運動なり階級なりの再生ということはいえないというところは、はっきりしている。これは、レーニンの文脈で言うならば、雇い主との闘争という水準に労働者が自分の闘争を限定する限りは「経済主義」であって、やはり、その場合で言うところのツァーリズムという国家と向かいあって全人民的政治闘争の主導者となった時にはじめて、ロシアの労働者階級はソビエトを作るように革命的階級になったんだということになります。私は、その問題も先程も述べたつもりですけども、総合安保国家に敵権力は推転しつつ、そこを樋口同志がファイトを持って言ったようなファイトを込めて向かい合う時に、日本の労働者は労働者階級になるのでしょうか。闘争を通じて、意識的自覚を通じて、労働者階級というのはいくまでかというところは疑いがないことだと思っます。

私が言いたいのは、その先にちょっとありましてね。近代以前にも百姓というのは、やはり革命主体としての団結形態となった。我々のじいさんの頃迄、それは明瞭だった。つまり百姓一揆です。一揆というのは、日本語は近代になってから非常にヘンチクリンになって、標準語化した一面がありまして、「一揆主義」という形の言

葉になって、運動上は専ら悪い意味で使われてきている。ブッチャム(ブチ)の訳になってしまった。革命運動にとっては、一番いけないことになったわけですよ。先走って、少数で何かやるのが一揆だ。ところが百姓一揆というのはそんなものじゃ全くないわけですよ。その村の全農民が神前でもって、聖なる水をすすり合って、日常性を超える。もう日常の延長線上では生きることができないギリギリのところ、ある超越的な領域への飛躍をかけて、自分達の靈的交通ともいべき精神的な団結をすることによって一揆になるわけだから、一揆というのは本当は一揆主義の正反対で、全農民的な団結、しかも、彼等との関係において死をも賭する誓約集団になるということが一揆の本質なわけでしょう。

労働者階級が、階級的に闘争を通じて再生する場合にも、必ずやそういうモーメントを持たなければならぬだろうと私は思っます。主体の革命的再生は、深く生産と生活の根柢に根ざすけれども、そうであればあるだけ日常的領域の単なる延長線上にはありえない。つまり危機における、先程は、国家と向かい合うという水準と云っただすけれども、別の文脈でいえば、危機における飛躍を通じてはじめて、一揆的な団結が労働者階級の現代的形態において、もう一度とりもどせるんだと思うわけです。そのところは、超越的領域に關係しますから、ある意味では普遍的な理論の問題です。自分らの闘争や地域の固有性をそのまま持ちながら、どうすれば合流し連合して普遍的に到達できるか——この課題を解決する度合にに応じて、階級が階級になるんだらうとそういうふうな考えます。それが第一点です。

それから第二点は、今樋口同志が「おれは、エコロジー派ではな

い」というふうに言い出したことに若干からまって言うわけですから、革命の主体の形成というのは、人間と人間の関係が変わることです。僕と今ここにいる全部のパネラーとの関係、ここに来ている皆さんとの関係が闘争とか、自覚とかを通じて、同志の関係に変わることなんだろうけれども、僕ももうひとつ、革命の主体が主体になるためには、人間と自然との関係がどうしても変わらなきゃいけないと思うんです。非常にすぐれたマルクスの存在論の今日の展開でも、人間の場合は相互主体性というんだが、自然の場合は対自然というんです。しかし「対自然」と言ったら、マルクスのもとの実践的唯物論の魂で言うならば、人間というものも、労働力という形で、ひとつの自然力であるわけで、身体的存在として自然力であるわけです。ある意味では、労働するということは人間という自然が無機的な環境的な自然と労働を通じて関係行為を持つことでしょう。これは男が女に「関係する」、女が男に「関係する」と同じ原基をもつ。マルクスの言葉の使い方では、「関係行為」なんです。自然と関係行為をするという、そういういい関係である労働が、土地私有化と労働力商品化という近代的条件のもとで、資本の生産力体系の中で開発になり、自然の征服になり、そして自然を拷問にかけるといふネガティブな形になった。そこに、近代文明というものが革命の主体を汚染し解体する根源があると思うんです。そこで、私自身「エコロジーとマルクス主義」という著書を近刊するのですが、革命の主体の再生は、人間と人間の関係を変えるんだけれども、人間と自然との関係も近代のあり方とは違ったものとして、変えるんだと思います。そのかぎりやはり、エコロジカルな危機にまで人類史的危機が及んでいるなかで、階級闘争と

してのエコロジーというものは、今日の時代において、我々につき出されてる最大の革命的課題の一つであり、しかもマルクス主義がこれまであんまりつめてこなかった空隙にそれがなっていると考えます。解放の思想、希望の原理としてのマルクスの共産主義の再生は、この問題を避けて通ることはできない。

季刊「クライシス」バックナンバー案内

- 創刊号 *二〇世紀—人類史の現在
- 第2号 *生き方・死に方を変える
- 第3号 *文化を読解する
- 第4号 *科学技術批判と現代文明
- 第5号 *現代史としての光州・パレスチナ・イスラーム
- 第6号 *資本主義の現在—経済・社会・人間
- 第7号 *生活を変える・もう一つのテクノロジー
- 第8号 *いま第三世界とは何か
- 第9号 *次は何か—「昭和」の総括
- 第10号 *農を否定できるか—都市とムラとの対話
- 第11号 *危機管理としての総合安保
- 第12号 *社会主義の再生
- 第13号 *教育管理はイヤダ
- 第14号 *マルクス死後百年
- 第15号 *核文明に明日はない

白川真澄氏の発言

自己犠牲の問題と自己変革

簡単に二点だけ申しあげます。

樋口さんの話を聞いて感じたのですが、やはり樋口さんに非常に共感する点のひとつある。それは、マルクス主義をいわば、思想というか、魂というかつまり生きざまとしての思想という次元で立てていくということです。そのことは、今のマルクス主義の危機の問題とも非常に関係があるわけですが、私は戦後のマルクス主義、特に日本のマルクス主義運動のいちばんの弱点として根本的に総括しなければならぬひとつの問題は、生き死にかかわる人間の生きざまにまで具現される思想としてのマルクス主義と、それから対象的な世界の分析の道具としての、いわば理論としてのマルクス主義とが「肉離れ」してきたという問題であると思っているわけです。つまり、ひとりひとりの人間の生きざまを規定して、その行きつく先は犠牲の大きい闘いの道であるという、マルクス主義が分析用具としての理論として独立し、マルクス主義が増えれば増えるほど共産主義者が少なくなり、マルクス主義が「飯のタネ」にまでな

っている状況があるわけです。ですから、マルクス主義を根本から自己対象化し、その重大な危機を越えて、マルクス主義を解放の思想として再生していくということは、私は単に理論体系としてのマルクス主義の再生だけの問題ではなくて、より以上にマルクス主義を自らの生きざまとして生きていく主体の問題としてマルクス主義が総括され、再生されなければならないと思います。

その点において私は、革命主体ならびに党の問題をたてる時には、二つの点が大事だろうと思う。

ひとつは、自己犠牲ということ。端的にいいまして、私は、共産主義者とは何か、党とは何か、というふうに問われた時にこう考えます。例えば、一千人の民衆が今まさに侵略してくる敵に対して、これを迎え撃って闘わなければならないという気持が一千人のなかに湧き上がっている時に、誰かが弾にあたることを恐れることなく真先に前にでなければその千人の心がひとつになり敵を倒す現実の力にまでならない。真先に敵の前に飛びだして一千人の心と力をひとつに凝集する、そういう触媒あるいは例示の役割を果たすものとして、私は党の必要性あるいは役割があるというふうに思います。しかしその場合、その党は千人に代わって千人の利益のためにオレがやってやるんだということであってはならない。やはり千人が自らの力で闘うことが大事であり、その欠かせない契機として党がある、という問題が同時にある。その点をふまえてつづいて党の形成していく時に、やはり我々は我々自身の生き死にの問題という領域を含めた次元で党形成の問題をつきつめて考えなければならぬのではないのか。我々は何のために生き、かつ何のために死ぬのか。もっと言えば、我々ひとりひとりの死というものが生かされ

る、あるいは生きるようなあり方というものが、私は党を作っていく時に必要な魂だと思います。

ふたつめは、主体形成において一番大事なポイントは自己変革の問題だろうと思います。いわば経済的・物質的な被規定性から見てどの階級がいちばん革命的なのか、あるいは革命主体たりうるのか、という議論の次元を越えなければならぬと私は最初に提起しました。やはり、それぞれの階級であれ個人であれ、最初に提起したまで自らを変えようのか、あるいは相互に変革しようのかという自覚的な努力、自己変革と相互変革がどこまで進むのかという度合に応じて革命主体は現実的に登場してくると思うわけです。マルクスが資本主義近代総体を否定する主体として立てたプロレタリアートは、資本が唯一万能の創造主としてふるまい社会が資本によって一元的に支配されているというある極限化された抽象的な資本主義の像を前提にして、その物象化された世界の自己否定的な契機として立てられた概念であると、私は考えます。現実には登場する革命主体としてのプロレタリアートとは、賃金労働者階級と等置されるものではなく、労働者や農民や知識人の中から自立をめざし相互に変革しあう火びとの共同性として生成する。これもマルクスの言葉でありますが、「ブリュメール十八日」でプロレタリア革命の特徴とプロレタリア革命の特徴を区別して、プロレタリア革命は、非常に自己

批判的な革命であると言っております。私は大変この指摘が好きです。つまりブルジョア革命は、成功から成功へあわただしく突進してすぐに有頂点になってしまふ。プロレタリア革命は何度でもやり直すことがその精神である。つまり自分たちの弱点、欠陥、中途半端さ、けちくささを大胆に自己批判し、新しくやり直して前に進むと、いうふうに言っております。これは必ずしも理論的に厳密な規定としてマルクスが言っているわけではありませんが、大事な点だと思えます。ですから私は、抽象的に規定された均質的な集団としてのプロレタリアート概念から出発するという立て方ではなくて、むしろ、様々な経済的諸形態、政治的諸形態の下で抑圧され差別されている労働者、農民あるいは被抑圧・差別の民衆が闘いの中で自己を変革し、相互に変革しあっていく結びつきと連帯——その中にはいったださんの言われた自然との関係を共生的な関係に変革することを含みますが——の中にこそやはり革命主体の現実的な生成と登場を見いだす。そういう主体的なたて方が文字通り革命主体の問題を追求する時には大事である。そして、自己変革および相互変革という関係性が、党形成をふくめて主体形成の問題にとって最も大事なキー概念ではなからうかと思えます。自己犠牲の問題と自己変革の問題について発言させてもらいました。

生田あい氏の発言

革命の主体は労働者階級自身だと思えます

時間ありませんので、ちょっといい皆さんの意見で誤解があるようです。ここで論議をして、決着ということは時間的に無理なので、今後楽しみに残しておきますけれども、少し私の見解を補足しておきます。

先ほどの革命主体にかかわる問題です。まずKORの評価の問題のうち、とくに党の問題。連帯にKORを解消したことの評価のところ、一面、ポーランドの共産主義者の成熟、つまり労働者階級自身が革命運動の主人公であり彼ら自身の自己解放の事業という思想的核の徹底が党と労働組合の関係、かつ指導のありよう、先ほど樋口さんいわれたようにそれが、命令や等々というものでなく、非常に創造的な生き生きとした関係に表現されているなど、我々日本の共産主義者が学ぶべき点が多い。こういう面で私はKORもっている意味についていい皆さんの御意見に賛成です。ただし、KORの中でも論争があったように、この間のポーランド革命の敗北の過程で鮮明となつていくと、党を「連帯」に解党していったことは、誤りであるし、敗北との関連でこれは大きな教訓にすべきだと思えます。なぜなら、ヤルゼルスキ軍政の反革命クーデター

がしめしたごとく、われわれが共産主義革命、いわゆるパリ・コンミュン型の社会と国家をめざすとき、国家権力の問題、今日の帝国主義国家を粉砕しなさいかん。これは向こうが軍隊を持っており、暴力革命にならざるをえない。われわれは武装しなさいかん。プロレタリアの以降も一定そうですね。これは、近いところの70年代においては三・二六などで、大衆的な一つの典型的な全人民武装の萌芽が出てきたが、まだ部分的ですね。私達は、少数の、小ブル学生による直ちの突撃戦を呼びかけるなどの過去の誤りを犯してきましたが、最終的には、労働同盟を基礎に全人民の武装蜂起で、ブルジョア国家権力を倒すこと。同時に、われわれのプロレタリア国家をつくっていくことをはっきりしたい。もちろん、つくったプロレタリア国家が、「死滅しつつかあるような国家」になつていく過程をどのように創造するのは、すぐれて、今日ただいまからの革命運動総体の中に、ソ連の総括を踏まえ、マルクス・レーニン主義のプロレタリアを核とする理論と実践の創造的發展をすべきです。これは、ポーランドの敗北や、光州蜂起の総括から朝鮮の労働者がつき出している問題ではないでしょうか。

それから先程、「国有化社会主義論」についてわれわれの総括ともふれた点をいいました。そこでいい皆さんもおっしゃった点で少し誤解が生じるといけませんので、一言付言しておきます。これは、社会主義革命の最も基礎にかかわる問題、生産手段の私的所有を社会的所有にかえる、その内実そのものの問題です。旧来のわれわれ現在のトロツキズム、あるいは、一部の新左翼もいまだそうですが、この生産手段の社会的所有の内実をいわゆる「国家形態」一般に切り縮める傾向。ソ連のように、すでにプロレタリア国家でなくなつたにも

かわらず、国家的所有であるから「社会主義」という具合に立ててきた経過があります。もちろん私達は、プロ独国家樹立において、その第一歩としてのプロ独国家の所有形態をとり、ここから全人民的所有へ発展していくプロセスについて、いささかも否定しません。しかし問題は、形態一般でなく、その真の内実、すなわち、武装した労働者の自治的大衆組織に立脚したプロレタリア民主主義が政治において実現しているか。工場・地域をはじめ、実際の生産と分配がそれら労働者自身の統制と労働者管理として実現されているかどうか、この点が旧来の「国有化社会主義論」とは異なる重要な点だと思います。これはポーランドの「自主管理共和国構想」から学んだ点です。

そういう意味で、今、いいたさんが出された領域について、生産手段の所有制の問題の真の内実、これを根幹とした人と人との関係、かつ分配の問題、また人間と自然との関係、あるいは核・原発におけるようなこれが生産力か否かの論争については私は生産力だとは思いませんが、もちろん、いわゆる生産力主義なるスターリン主義をもわれわれは批判してきたわけで、こうした諸問題について、マルクス主義の核心をおさえて、マルクスが初期においてしめた点を今日の資本主義・帝国主義批判として具体的に分析し豊富化し、われわれのめざすべき社会のあり様を模索するといういみでならば賛成です。

そこで、革命の主体にもどりますが、白川さんのおっしゃっているような階級概念の見直しについて、私は反対であり、結論的にいえば、樋口さん、横山さんもおっしゃったように革命の主体は、労働

者階級自身だと思えます。

それは、理論的・原則的でない方をすれば現在の資本主義社会において、資本家階級が生産手段を独占して、この生産手段から分離した労働者階級を経済的に従属させているという生産手段所有制を根幹に、生産における人と人との関係で、資本家が労働者を強制的に指揮して労働させ、生産物の分配の面で資本家が労働者の剰余労働を搾取している。あるいは、分業制の固定化など、資本主義における階級と階級関係は決してマルクス・レーニン主義の規定が変化したり古くなったりしていると思いません。

ただ、それは、決して、あるがまゝの労働者をそのまゝということとでなくて、あるがまゝの労働者に依拠しながら、闘いの中で、自らを一つの支配階級にいかにか高めていくのか、めざすべき社会の主人公として、農民や被差別・被抑圧人民の先頭に立っていくか、いかにそれが思想的・政治的に保証され体现されるか、ここでこそ、先程から討議してきました労働者階級自らの党の問題が浮き上がってくると思えます。

農民運動・住民運動・女性たちの闘い・部落や「障害者」の解放闘争はわれわれの革命の不可欠の一環だと思えます。ここに、プロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争をカナメにして日本革命の陣型をつくるのが大事ではないか。と同時に、日本の労働者階級は国際プロレタリアートの一兄弟であり、日本革命を世界革命に有機的に結びつけて、朝鮮・アジアをはじめ第三世界の被抑圧民族と連帯して闘うことがいままでもなく大切だと思えます。

時間がないので、この点を補足しておきたいと思えます。以上です。

(拍手)

司会 次々と御意見があるかと思いますが、予定時間をかなり過ぎておりますので、パネルディスカッションについては、これで終りたいと思います。いくつかの方々から意見もありましたが、本来ならば、やはり、よい充実したシンポジウムとしてやるためにはシンポジウムのやり方、形式を、今後創造していかねばならないと思います。私たちは、こういう企画は全く初めてで、皆さん方に非常な御迷惑をおかけしたこともあろうかと思えます。今後全国各地

でも、こういう試みをどんどんやって、問題意識のすりあわせ、様々な交流、理論と実践のすりあわせを何回もやっていくことによって、連合し、合流し、敵を撃つ！そういう主体の形成というのは可能だと思います。今後も私たちは、さらによりよい形態というのを工夫しながら、今後の課題にむかっていきたいと思えます。有難うございました。

溶鉱炉の火は消えたり 浅原健三

* 売上は、「フクニチ組合を強くする会」の闘争資金にあてます。

* 残部数わずかノ

資料 1 「第一回ピラ」

合流し、連合し、敵を撃つ！
10・30 シンポジウム福岡へのご案内

80年代に入って、第二次大戦後長きにわたる「相対的安定期」を謳歌してきた資本主義世界が、不況・失業・インフレの三重の困難に直面し、30年代に匹敵する危機を回避することも、解決することもできないまま、この危機を体制崩壊につながらぬように国家を前面におし出して管理するため総合安保戦略などの階級支配の様々な再編がはかられてきています。

米・英・日等帝国主義諸国において共通の80年代階級支配の政策は福祉切り捨て、労働組合の既得権剥奪、そして軍備の拡大であり帝国主義諸国支配階級の共通のスローガンである「小さな政府」とは、強力な軍事力を対外的に、特に「第三世界」に向けて行使することをいとわない、強力な政府—国家に他なりません。

7月30日、明らかにされた第二臨調基本答申では、三公社の分割・民営化構想の中で、現場協議制の廃止—国鉄労働運動の解体が宣言され、それを強行するための「非常大権」を行使する国鉄再建監理委員会の設置が決められ「全民労協」の発足と並行して労働戦線の「全的統一」—右翼的再編の完成のため決定的な一歩が印されようとしています。

これらのことは、言うまでもなく支配階級がこれまで通りのやり方で支配を続けていくことができなくなったことのアラわれであり、労働者・人民が70年代を通して蓄積してきた階級的力量が全面的に顕在化し、階級支配の転覆に至ることに対する支配階級の危機感の

あらわれに他なりません。我々が直面している危機は資本主義にとっての危機だけではなく、地球的規模における自然—人間関係の危機—存在の危機でもあります。

現存する社会主義が、産業主義の論理に導かれて国家を肥大させ、資本主義との対抗関係を「国家」としてしか表現できず、労働者・人民の自立的な営みを国家として弾圧するに至った現在、我々には、現存する社会主義を超越する新たな社会主義観の獲得とそのための運動論・組織論・革命論の創出が求められているといわなければなりません。

国家・資本に対抗し、その中から自治と連帯に基づく共同性を育んできた労働者・人民は、70年代の分散と独立前進の時期を越え、合流連合し、より大きな共同の力で敵を撃ち、自らを「歴史と社会の主人公」へと高めていくべき時期に際会しています。

「合流し、連合し、敵を撃つ！ 10・30 シンポジウム福岡」に集い、広く問題意識を交流し、われわれに課せられた歴史的使命に一步なりとも接近するべくともに討論を交わしたく御案内いたします。

パネラー(50音順)
いいだも(季刊「クライシス」編集長)
生田 あい(共産主義者同盟議長「旗」)
樋口 篤三(労働者党議長「革命の炎」)
横山 好夫(季刊「労働運動」編集長)
石崎 昭哲 西山 浩介
日時:10月30日(土)午後3時~8時 場所:福岡市民会館国際会議室
日付:10月30日(土)午後3時~8時 場所:福岡市民会館国際会議室
連絡先:着民社気付 〇九二一六五一—二二五七 藤吉 徹
福岡市東区箱崎五丁目高松団地六の二二六

資料 2 「第二回ピラ」

革命的共産主義者の協力関係を確立し、
共同行動を追求し、
左翼の分散状況に終止符をうて！

今、私たちは、益々深まる資本主義の危機と混乱の中で重大な歴史的岐路に立っています。資本主義世界は、「不況・失業・インフレ」のトリレンマにあえぎ、未曾有の危機に陥っています。日本帝国主義も相対的な「小春日和」から冬の季節を迎えています。支配階級は危機から脱出するために、労働者・人民大衆への一層の支配と収奪を強化してきています。

今日の日本帝国主義は、戦後アメリカ帝国主義の「核とドルの傘」の下から、帝国主義国として「自由世界」防衛主体として飛躍せんとしていきます。自民党の言う「八五五体制」—「総合安保」戦略は、政治・経済・軍事・文化・教育・労働・生活など全面にわたる国家的再編として、私たちの眼前にあらわれています。

「臨調—行革」路線による福祉切り捨てと軍拡、とどまるどころを知らない自衛隊の強化、「シーレーン防衛」「五六中業」の強行は、日帝が米核戦略とコミットし、アジア侵略・反革命として、アジア人民の解放闘争に敵対する本姿をあらわにしているといえるでしょう。また、国鉄を中心にかけられている「行革」「人勧の凍結」は、これまでの闘いの中で獲ちとってきた既得権の剥奪にとどまらず、労働者人民への国家からの正面切った挑戦に他なりません。「統一準備会」から「全民労協」へと進行する右翼労働統一—帝国主義的再編は、危機にある日帝を補完する新たな支配秩序構築の決定

的環であります。

ますます深化する経済不況は、小手先で解決することはできず、労働者人民へのいっそうの重税と賃金抑制攻撃として現われてきています。今日の「鈴木退陣」をめぐる自民党内の矛盾と抗争は、「頭のスゲカエ」のみでは解決不可能であることを示すものであり、支配者自身が危機からの根本的脱出を不可能であると熟知していることを物語っているといえます。

こうした日帝の危機と支配階級の攻撃の中で労働者人民・左翼の側はどうか。

たしかに、自民党政府による国家再編に対して、労働者人民の危機感と政治的流動化が開始されています。反核闘争という、地域・学園・職場からの「草の根」運動が、底深い流れとして現われています。しかし、こうした流れが鈴木木の「反核・軍縮」路線を打ち破っていないことも事実です。私たち労働者人民が、主体的に、日帝を根本から撃ち、解放への道すじと路線を闘いっていないことに根本問題があるといえるでしょう。

日帝による、戦後支配体制のなしくずしの国家再編に対決する、「故郷なき、地域なきプロレタリアート」の、主体陣型の構築が急務とされているでしょう。

日本労働運動の「主流」を占めてきた総評労働運動は国益主義に毒され、分解・再編の渦中にあります。また、戦後革新勢力の社共は、現在の攻撃に対決する思想と路線を喪失し、激流の中で分解を余儀なくされています。そして、革命的左翼総体も又、七十年代の苦闘を通し、自らの歴史的総括を主体的になしつつ、解放への根本的な準備を進めていかねばならないでしょう。日本労働者人民は、

資料 2

危機の中で新たな政治的流動化をむかえています。
 イスラエル・米帝による、パレスチナ人民虐殺に抗するパレスチナ人民の決起、軍政IIソ連による「連帯」圧殺に抗し立ち上ったポーランド人民の闘いに解放の希望を重ねつつ、右翼労働統一反対、反開墾地域住民闘争の結び目と交流・連鎖、反差別国際連帯の闘い等、日本人民の主体的勢力が開始されています。
 季刊「労働運動」誌上における「われわれの組合をめぐる論争」「一万人の労働者行動綱領づくり」「日本はこれでもいいのか市民宣言づくり」。共産主義者同盟『赫旗』紙上「情勢に込め統一協議会をつくらう」(一月)という提起。また「労働者党による革命運動協議会について」(三月)、そして「人民の主体的解放を志すすべての人々は、みずからの再生、みずからの自力更生を通して大連合

へ」という季刊「クライシス」の二期にむけてのよびかけを、私たちは極めて時宜にかなったものであると積極的に評価するものです。また、共産党全協の「共産主義者の連合にむけての討論のよびかけ」(六月)も発表されています。

私たちは意見の違いをこえ、大胆に、解放と革命に向けた模索をあらゆる形において進めていく必要があると考えます。革命的共産主義者は、協力関係を確立し、共同行動を追求し、左翼の分散状況に終止符を打つように努力すべきでありましょう。

十・三〇シンポを、人民がひとつになり、解放への道すじをつかんでいく第一歩にするべく、皆さんの参加を訴えます。

〔主催〕シンポジウム企画委員会(代表) 藤吉 徹

〔パネラーおよび連絡先略〕

資料 3

共産主義労働者党の分派としてのプロレタリア革命派による
 10・30シンポジウム破壊策動を糾弾するとともに、プロレタリア革命派の諸君が胸襟を開き、共同の事業に参加されんことをよびかける！

10・30シンポジウム企画委員会

合流し、連合し、敵を撃つ！ 10・30シンポジウム福岡は、共産主義者の総結集にむけての多角的な作業の重要な一步を刻印し、成功のうちに終ったことを確認したいと思えます。九州で初めて大衆的に公開された革命運動や党の問題を真正面から論じる、こうした試みへの破壊策動が、共産主義労働者党の分派プロレタリア革命派によってなされたことを怒りをもって糾弾します。
 まず、経過と事実関係を具体的に明らかにしたいと思えます。

最初に明確にしなければならないのは、10・30シンポの意義については、企画委員会の中で共通の認識のうえで協力して進めてきたことです。企画委員会代表の藤吉徹は、九月下旬パネラーにあいさつに回り、「労働情報」のW氏へのあいさつには×××氏も同行しています。

ところが突然、××氏が企画委員会からおりた旨の手紙をパネラー諸氏に送付したことについては、企画委員会の中で正式な討論も

されておらず、非常に不可解な行動です。

次に、10・30シンポ当日の事態を明らかにします。

一、10・30シンポ開始直前に、「共産主義者の連合へ向けた卒直な討論をはじめよう」と題する「共産主義労働者党九州地方委員会」名のビラが企画委員会に対して何らの了承を得ることなく、〇〇氏ら二名によって一方的に撤かれました。これに対する企画委員会の当然の抗議に対して、プロ革派の数名が突如、大声を張りあげて集会を混乱に陥れようとした。

二、休憩後再開されたシンポの冒頭、〇〇氏は司会が制止するにもかかわらず、一方的に「企画委員会からの脱会について」説明を行い、これにプロ革派数名が大声で呼応し、シンポの運営を混乱させました。

三、××氏筆による「企画委員会および司会をおりた」旨の手紙がパネラー四氏(いいだ、生田、樋口、横山諸氏)に送られています。またパネラー以外の人にも発送されています。パネラーあての手紙の内容については、企画委員会は承知しておりません。

当企画委員会は、××氏が企画委員会および司会からおりた件については、討論もしていませんし、企画委員会代表にも報告されていません。付言すれば、10月24日に開催した企画委員会に××氏に参加要請をしましたが、「都合により」という理由で欠席されました。(〇〇氏の欠席の理由については、何も報告はありませんでした)

四、白川氏のパネラーとしての参加の正式通知は、当企画委員会には直接連絡はありませんでした。企画委員会の一名には××氏が

資料 3

ら白川氏参加の話はありましたが(28日夕方)、企画委員会代表には通知はあっておりません。なお、いいた氏経由で30日午前11時、企画委員会代表へ連絡があったことを付言しておきます。

以上の事実からも明らかのように、プロレタリア革命派の諸君がとった行動は、口では「10・30の意義は認める」と言いつつ、実際は、シンポを彼ら自身の手で混乱におとし入れようとする事によって、シンポの意義を自ら否定する行動であるといわざるをえません。企画委員会を一方的にやりながら、集会に大挙して参加し、妨害策動を行ったプロ革派諸君の行為は、セクト主義そのものであり、共産主義者や人民の総結集にとって有害なものであると考えます。企画委員会の中軸を担ってきた共産主義労働者党九州地方委員会内部で発生した合流をめぐる路線の相違については党内問題であり、当企画委員会とは無関係です。

党内問題を企画委員会内部の問題であるかのように主張し妨害を實踐するのは大衆運動の引き廻しであり、党派の作風上の問題として糾弾されねばなりません。私たちは、大衆運動の原則を守り、党派の一方的破壊策動に対しては防衛のための断固とした闘争を展開します。当企画委員会に共産党九州地方委員会の関係者が多数参加

していることは事実ですが、企画委員会は名実ともに大衆的組織であることを明言するものです。

私たちはこうしたプロ革派諸君の破壊策動にもかかわらず、10・30シンポは大きな成果を収めたことを確認するものです。企画委員会代表がいさつしたように、10・30シンポは東京でのある意味ではインテリ主導型の密室論議をこえ、大衆的に開催することによって問題状況を活動家の前に提起し、総結集への流れを創った点に意義があります。

また、白川氏のバネラし参加については、企画委員会代表が経過をのべ「参加者が協力して暖かく迎えるように」と訴えたにもかかわらず、プロ革派諸君はこれを無視し、シンポを混乱に陥しいれようとしたことは激しく自己批判されねばならないでしょう。プロ革派の諸君が自己を戒め、謙虚に胸襟を開き、運動を進められんことを願ってやみません。

一九八二年十一月一日

「建党協議会」準備会議 結成への「よびかけ」

共産主義者の建党協議会準備会議結成に向けた予備会議

共産主義者としての義務と、人民解放の歴史的事業への責任を自覚するわれわれは、

マルクス主義の思想・方法と日本労働者階級・人民の革命の伝統に依拠し――

革命的な実践を総括した正反両面の歴史的教訓に深く学び――
ここに、真の革命党創出のための行動を開始することを宣言する。

心ある全国のすべての同志と、社会の革命的変革をめざす先進的労働者・活動家の多くが、そのための「共産主義者の建党協議会」準備会議結成に、積極的に参加・結集されることを、心から訴える。

内外の情勢は重大である。二十一世紀にむけて、戦争と革命の激動の八十年代がはじまった。一九一七年のロシア革命によってきりひらかれた社会主義への人類史の大過渡期のなかで、「既存社会主義」の体制がさまざまな否定的側面を露呈し、それがこの大過渡期の時代を複雑・困難なものにしているにもかかわらず、人民の解放と民族の自決、真の社会主義の創出にむかう歴史の潮流こそが、時代の趨勢を決定づける主要な勢力になっている。しかしそうであればあるほど、侵略と反動・反革命のうねりもまたきびしい。

日本の階級・政治情勢の現局面も、その例外ではない。階級矛盾は激化し、中間層の動揺はひろがり、支配階級は混迷と腐敗の度をふかめている。だがかれらは、対抗する人民の力が、労働者階級の小さくない歴史的弱点につけこみ、帝国主義強国にすもうとする野心のもとに、人民を権力的に統合することによって必死に生きぬこうとしている。

こうしていまや、戦後最大の反動期がおとずれている。遠くない将来、十年を一日に圧縮するような、戦後を画する激烈な政治的決戦のときをむかえるであろう。だがこのとき、日本革命の先達となるはずの日本共産党は、修正主義に転落し、議会主義にたつ排外的・独善的な小ブル政党に転化してしまった。日本における階級闘争の全局面において、全国単一のあるべき前衛党は不在である。

人民の生活の破綻がふかまり、人びとの心がゆれ、戦争の危険にたちむかう巨大な反核・反戦の波がたかまるなかで、人民はみずからを解放する信頼できる導き手を求めている。日本の社会主義的変革をめざす共産主義者にとって、革命をになうにたる真の前衛党を、人民の生活と闘争の火中でつくりだしていないことにまさる、痛苦

なあまりはない。

もちろん、党をもとめ、共産主義と労働運動の結合をもとめて、日夜、最前線で闘う労働者はいうにおよばず、われわれ革命的左翼のなかでは、それぞれの確信と方向性において、不屈で貴重な革命的営為がつみかさねられてきた。だがその分散した力と、小さな前衛意識や狭い組合主義的レベルの活動に自足したままでは、社会変革にじゅうぶんな役割をはたすことはできない。こんにちの日本は、人民の諸闘争を進展させ、資本主義を打倒する偉大な革命の勝利にむけて、すべての誠実な共産主義者と先進的労働者・活動家が、小異をのこし大同につくべき時代である。志を同じうする者が、革命的情熱と共産主義者の大義において団結し、人民に依拠してともに敵をうつ合作と協力をつよめ、そのなかで日本革命を領導する前衛党の建設にのりださなければならぬ。

「共産主義者の建党協議会」は全国単一の前衛党を建設するための機関である。それを構成するのは建党の志をもつ政治組織、グループ・個人である。

このような合作に踏み出すことそれじしんが、こんにちの日本における共産主義者がになうべき、「一つの革命」である。

われわれは、このあたらしい質の建党運動のなかで、過去・現在のすぐれた革命的实践に学び、それを発展的に今日に活かすとともに、修正主義に転落した日本「共産党」およびこれと一線を画してたたかってきた新左翼の二十数年の歴史をもまた総括する。

一、性格

「建党協議会」がめざすのは、世界の被抑圧民族・人民をむすぶプロレタリア国際主義にたち、労働者階級を主導とする革命の党、とりわけ下層労働者と被抑圧人民の闘争に依拠しつつ、人民みずからの革命に奉仕する単一の大衆的前衛党である。かかる党は、人民にたいして支配・君臨する党ではなく、人間愛にあふれ、人民に服務し、労働者階級・人民解放のために、どんな犠牲をおしめない党——新しい型の、そして将来つくられる権力のモデルになることを自覚した党である。

「建党協議会」は、このような党のあり方の追求とその創出に全力をあげてとりくむとともに、そうした党の形成ががちとられるまで、協議会そのものが、過渡的・創造的に、全国の工場・地域・農村などの戦場で、大衆闘争の最前線にたち、八十年代階級情勢が要請する政治的・理論的問題に共同して全力をあげてとりくみ、一定の前衛的役割をはたす。

二、目標と課題

われわれの目標は、労働者階級の指導による反帝・社会主義革命

をへた共産主義社会の実現にある。当面は日本帝国主義を打倒するための階級闘争の全局面をにない、とりわけ反戦・反核・反侵略・反安保・反抑圧・反差別の闘争、アジア・第三世界人民との連帯を積極的におしすすめ、階級的労働運動を再生・構築する。そうした闘いを通じて、人民に学び、共産主義者の共同の作業として日本労働者階級解放の旗じるしとなる綱領を理論的・組織的レベルにおいて主体的に獲得する。

しかし、「建党協議会」は、その出発点において、あらかじめ特定の綱領・路線の一致を強制するものでなく、革命の大義と人民への服務の責任感から出発する。

人民を主人公にした闘争と、マルクス主義の創造的發展・適要のなかで、実践によって点検され、相互の同志的信頼感をきずつつ、はじめていきいきとした綱領が獲得されるであろう。それはまた、人民の解放をたたかいたる創造的な統一戦線と、変革のための人民自衛の形態をつくりだす課題と不可分である。

三、建党協議会の団結の思想と基準

① われわれは、プロレタリア階級独裁をつうじて抑圧された人びとすべての解放をもとめるマルクス主義の立場に断固としてたち、労働者階級を主導階級とし、人民自身の革命的実践のなかで、断に解放の理論としてのマルクス主義そのものを発展させる。

② 人民、とりわけ下層労働者のたたかいに奉仕し、実践にもとず

く団結と相互協力、人民大衆を教師にした作風を、つくられるべきプロレタリア階級独裁権力のモデルにたかめる自覚をこめて、創造的につくりだす。

① 階級敵との闘争と人民への服務においてのみ、一味同心、大同し、異論を排除せず、恐れぬ。異論は分裂の根拠でなく、たがいの発展・前進のバネである。

② 参加する諸組織、個人の独自性と献身性を尊重し、共同の実践のなかでの切磋琢磨、同志的信頼の獲得にむけて努力する。ヘゲモニー主義をゆるさず、団結をひとみのようにまもり、子供をそだてるように、これを育てる。人民の利益と無関係なテロリズムを許さない。

全国の誠実で積極的な共産主義者および革命の勝利を求め、それをめざそうとしているすべての先進的労働者・活動家のみなさん！

われわれの人生かけての決意、それぞれがみずからになおうとしている誇りと知恵を、虚心に、共産主義者の崇高な責任感をもって重ねあおう。

日本革命の前途が安易なものでないことはいままでもない。必要なのは持久の革命的ところざしをもって、人民解放にむかう光榮ある長征の道にのりだすことであり、そのために足らざるをおぎない、たがいに力をあわせて奮闘することである。われわれの建党への決意と方策そのものが、全国の共産主義者とすぐれた活動家の協

力のもとで、さらに大きく、さらにゆたかに、力づくで発展させられることを期待したい。

全国の共産主義者の組織と共産主義者のみなさん！ 先進的労働者のみなさん！

団結しよう！

労働者階級解放の歴史的事業への責任を謙虚にわかち合い、つよい意志をもって、合作の道に、全国単一の前衛党創出の道に合流しよう！

共産主義者の建党協議会準備会議結成に向けた予備会議

連絡先 〇三(七六一)八七四四

付記

A 建党協議会の発足をめざし、一定の人びとの同意と参加をもって、まず準備会をつくる。準備会は建党協議会の発足に必要な一切のこと——規約・当面の綱領的諸問題・組織方針・人事・財政・事務所体制などを定めると同時に、この準備会の段階から、直ちに次のような諸課題をみずからの責任とする。

① 情勢の正しい把握と闘争の環の提示。それにもとづく共同行動

② 下層労働者・人民に依拠した人民の政治的共闘をになう多様なチャンスづくり

③ 全国的結集と並行した地域的建党協議会の組織化、その相互連携の強化

④ 革命の道程・展望を獲得するための理論的シンポジウムや研究会の開催

(課題例)

- ① 資本主義の変容と主体の問題
- ② 日本における革命の歴史の総括
- ③ 帝国主義・国家・社会主義論
- ④ つくられるべき党のあり方

⑤ 日本革命における日和見主義など。

B 建党協議会準備会としての機関紙・誌の発行と、人民ジャーナルの発展への協力
⑥ 革命塾、「飛ぶ人民大学」、産労的調査研究機関構想の検討と具体化の準備

この「呼びかけ文」とは別に、準備会によって、さらに大衆的な「建党協議会」参加のよびかけ文がまとめられるべきである。

以上

季刊 労働運動

一九八三年 34号

*反中曾根の立脚点は何か 小田実×横山好夫

*横浜事件の敵は誰か 樋口篤三

*総評の危機と「労研センター」発足

市川誠／中島誠

右翼「労戦統一」反対

階級的労働運動の構築をめざして

〔著者〕 樋口篤三

〔定価〕 一五〇〇円

〔発行〕 拓植書房

マルクスとコミュニオン社会論

二三〇〇円

現代社会主義再考

上下

各 一五〇〇円

〔著者〕 いいだもも

〔発行〕 社会評論社

潮流をこえた総結集を克ちとり
プロレタリアートの党を創造しよう

(10・30シンポジウムの記録)

発行日 1983年5月10日
編集発行 革命派の総結集／シンポ企画委員会
連絡先 福岡市博多区神屋町9番20号
パソナール博多 205号室
定価 900円

